

ギヤスケル論集

第31号

多比羅真理子先生追悼号

2021

日本ギヤスケル協会

役員名簿			
会 長	大野 龍浩	(立正大学教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
			全体の責任者・『ギヤスケル論集』編集委員
副 会 長	松岡 光治	(名古屋大学大学院教授)	第16・17期 (2018年4月～2022年3月)
			HP管理・『ギヤスケル論集』編集委員
事務局長	芦澤 久江	(静岡英和学院大学短期大学部教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
			事務局 (事務局長)・英国協会連絡
幹 事	宇田 和子	(埼玉大学名誉教授)	第16・17期 (2018年4月～2022年3月)
			『ギヤスケル論集』編集委員
	遠藤 花子	(日本赤十字看護大学専任講師)	第16・17期 (2018年4月～2022年3月)
	閑田 朋子	(日本大学教授)	第16・17期 (2018年4月～2022年3月)
	齊木 愛子	(熊本大学非常勤講師)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
	瀧川 宏樹	(大阪工業大学特任講師)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
	玉井 史絵	(同志社大学教授)	第16・17期 (2018年4月～2022年3月)
	西垣 佐理	(近畿大学准教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
	松本三枝子	(愛知県立大学名誉教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
	村山 晴穂	(元三育学院短期大学教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
会計監査	猪熊 恵子	(東京医科歯科大学准教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
	早川友里子	(大妻女子大学専任講師)	第17期 (2020年4月～2022年3月)

— 日本ギヤスケル協会倫理規程 —

日本ギヤスケル協会は、協会設立の目的を推進するために、以下の規定を定める

1. 会員は、人種、国籍、性別、障害などのいかにかわらず、すべての人に対して公平かつ誠実に行動しなければならない。
2. 会員は、学会内外の活動において、すべての人のプライバシーおよび人権を尊重し、社会人としての規範を守らなければならない。
3. 会員は、他の研究者の研究・および発表・発言の自由を尊重しなければならない。
4. 会員は、研究成果を公表する際、盗用、改竄、その他不正な行為をしてはならない。
5. 『ギヤスケル論集』に掲載された論文は、著作権は投稿者に、著作権は日本ギヤスケル協会に帰属する。『ギヤスケル論集』に掲載された論文を著書などに収録する際は、その旨、断り書きをする。

ギヤスケル論集

第31号

多比羅真理子先生 追悼号

2021

日本ギヤスケル協会

故 多比羅 眞理子 実践女子大学講師



多比羅真理子先生 《略歴》

- 1948年 8月 東京都に生まれる
- 1967年 3月 実践女子学園高等学校卒業
- 1971年 3月 実践女子大学文学部英文学科卒業
- 1973年 3月 実践女子大学大学院修士課程英文学専攻修了
- 1973年 4月 実践女子短期大学英文学科非常勤講師
- 1992年 4月 実践女子大学文学部英文学科非常勤講師（～2019年3月）
- 1993年 4月 東洋英和女学院短期大学非常勤講師（～1997年3月）
- 1999年 4月 北里大学看護学部非常勤講師（～2008年3月）
- 2004年 4月 日本大学商学部非常勤講師（～2017年3月）
- 1997年 4月 日本ギャスケル協会事務局長（～2006年3月）
- 2010年 4月 日本ギャスケル協会第3代会長（～2014年3月）
- 2021年 1月26日 逝去（享年72歳）

《主な業績》

主要著書

- 『ギヤスケル文学にみる愛の諸相』共著 北星堂書店、2002年
『ギヤスケル小説の旅』共著 鳳書房、2002年
『ギヤスケルのまなざし』鳳書房、2004年
『エリザベス・ギヤスケル——孤独と共感』共編著 開文社出版、2009年
『エリザベス・ギヤスケルとイギリス文学の伝統』共編著 大阪教育図書、
2010年
『ギヤスケル中・短編小事典』編著 開文社出版、2016年
『ギヤスケル作品小事典』編著 開文社出版、2019年

主な翻訳

- 『メアリー・バートン——マンチェスター物語』近代文藝社、1999年
「リジー・リー」『ギヤスケル全集1：クランフォード・短編』大阪教育図書、
2000年

主な論文

- 「短編「リジー・レイ」について」『ギヤスケル論集』第2号、1992年
「共感者としてのGaskell——*Mary Barton*と“Lizzie Leigh”」『ギヤスケル論集』
第16号、2006年
「エリザベス・ギヤスケル『北と南』——ミルトンへの道」『実践英文学』第
63号、2011年
ほか多数

追記

本稿作成にあたりましては、多比羅真理子先生のご主人多比羅誠様のご協力を頂き、遠藤花子先生がまとめて下さいました。心より御礼申し上げます。

(『ギヤスケル論集』編集委員長 西垣佐理)

目 次

追悼 多比羅眞理子先生

多比羅眞理子先生——愛らしくて剛直だったひと——

…………… 鈴江 璋子 …………… 1

多比羅眞理子先生追悼

…………… 木村 晶子 …………… 3

See You in the Next World, Professor Tahira!

…………… 大野 龍浩 …………… 5

お二人の「温かいまなざし」

…………… 足立 万寿子 …………… 7

多比羅先生との思い出

…………… 遠藤 花子 …………… 9

論 文

『北と南』における移動するヒロインと性差、階級、地域性の境界としての「壁」

…………… 石井 麻璃絵 …………… 11

『アダム・ビード』と『ルース』における悔い改めと執り成しの祈り

…………… 村山 晴穂 …………… 27

The Plan of Salvation in *Scenes of Clerical Life* and *Cranford*

…………… 大野 龍浩 …………… 41

法廷内から法廷外への戦いの意味

——『メアリ・バートン』のメアリと『悪夢の一夜』のエリノアを中心に——

…………… 矢野 奈々 …………… 57

書 評

M. Joan Chard, *Victorian Pilgrimage: Sacred-Secular Dualism in the Novels of Charlotte Brontë, Elizabeth Gaskell, and George Eliot*

…………… 村山 晴穂 …………… 71

Melissa Schaub, <i>Performativity in Elizabeth Gaskell's Shorter Fiction: A Case Study in the Uses of Theory</i>	大前 義幸	81
Meghan Lowe, <i>Masculinity in the Work of Elizabeth Gaskell</i>	瀧川 宏樹	87
日本ギヤスケル協会会則.....		93
編集後記.....		94

多比羅真理子先生追悼 —— 愛らしくて剛直だったひと ——

鈴江 璋子



第5回日本ギヤスケル協会全国大会（1993年10月31日）右から山脇会長、多比羅幹事、鈴江幹事（当時）

1968年実践女子大学日野学舎。2年生対象の英語演習クラスの最前列に、ニコニコと反応の良い学生が座っていた。瞳と額を光らせて、どんな質問にもさっと答えてくれ、クラス全体を弾ませてくれる。その学生の名は伊藤真理子さん。私はその年に実践女子大に着任したばかりだったので、こういう学生の存在はまことに有難かった。

やがてある日、非常勤講師の伊藤真理子先生が、結婚して多比羅真理子先生となられたと聞いて、驚くことになる。なんと不思議な苗字。だが、多比羅真理子となってから、真理子さんの能力は急速に開花していった。

日本ギヤスケル協会設立当初から、真理子さんは山脇先生の右腕として活躍されていたのだが、9年目の1997年から、事務局長の重責を担うことになる。会務を隅々まで掌握し、よく気が付く真理子さんは事務局担当に最適だったが、負担も大きかったに違いない。初めての大会を成功させた翌日、学科研究室を訪れて「有難うございました」と言ったまま頭を上げられなかったのは、泣いていらしたからなのだ。これは安堵の涙だったろう。いつも楽しそうに笑っている真理子さんだが、実は芯の強い、勝ち気な完全主義者であること、失敗を怖れるあまりに、表面に出たがらないこと、山脇先生に対しても、時にはお気に入らぬ忠告をする、剛直なところのあるひとだと、もうこの時には分かっていた。私は「内助の功」ではだめよ、もっと自分を前面に出さなければ、と助言したように思う。

多比羅事務局長を悩ませた案件には、お金の問題があった。協会設立当初は資金も人材も豊富だったのだが、海外の著名な学者を講演に招くなどのお披露目行事が続いて、事務局引き継ぎ時の繰越額は40万円にまで下がっていた。多比羅

事務局長は支出を切り詰め、自分で会員の研究室を回って会費の未払い分を徴収するなどして、繰越金40万円を死守された。後々の会計担当者も「多比羅先生の40万」と呼んで、この金額を切らないように努力した。私が2代目会長をお引き受けした時は「事務局を続けて頂けるわね？」とお願いして、ぴしゃりと拒まれてしまった。「鈴江先生なら、誰とでもちゃんとおやりになれます」というのが拒絶の理由である。幸い日大法学部の諸坂成利教授が事務局を引き受けてくださったので、この時期には、お金・会場・運営などの心配は全くなかった。

多比羅先生は「ギャスケル展」によって、華々しく3代目会長のスタートを切られた。実践英文学会との共催であるために入場者も多く、貴重なヴィクトリア朝のドレスや帽子も展示されて、大成功だった。会長2期目に、新入会員がメーリングリストを使って会長・事務局を誹謗するという事態が起こった。SNSはじめのような彼の攻撃は、会長が女性であることへの偏見に起因していた。たしかにブロンテ協会もオースティン協会も、男性の会長を戴いていたから、ギャスケル協会は唯一の例外であったかもしれないが、なんという了見の狭さだろう。

多比羅会長はメーリングリスト停止という剛速球を投げて、事態を取められた。新事務局長を引き受けてくださった市川千恵子先生始め、会長をサポートされた幹事・会員の方々に、多比羅先生は終生、感謝と信頼を寄せていらしたと思う。

ある日渋谷を歩きながら、眞理子さんは中3の時の悲劇を話してくれた。「みんなが大好きだった社会科の先生が警察に連れていかれて、私たち10人位が、放課後、渋谷警察まで駆けて行って、『せんせーいっ！』って叫んだんです」。1962年、学園と中高教職員組合との間に紛争が起こり、書記長が不当な扱いを受けた。双方の和解までには数年を要した。私の着任前のことである。「それは、なかったことになっているようよ」と言うと、眞理子さんは目を見開いて「私たちの目の前で起こったんです」と言った。歴史を書く側の大人たちが忘れてしまったことを、14歳の少女だった眞理子さんが覚えていることに、私は感動していた。

ギャスケルの『メアリー・バートン』の職工組合に関する記述が、眞理子さんと歩いた日の記憶を甦らせる。眞理子さんが育てた「研究会」は、これからもずっと継続していきたい。

(日本ギャスケル協会第2代会長、実践女子大学名誉教授)

多比羅真理子先生追悼

木村 晶子

歳をとって学んだこと——人生には祈るしかできないことが多々あり、そしてその祈りもかなわないことがあること。多比羅真理子先生の早すぎる旅立ちには、また、届かない祈りを思い知らされることとなってしまいました。

多比羅先生が長年にわたって、ギヤスケル協会初代会長の山脇百合子先生、第二期会長の鈴江璋子先生を事務局長として支えられ、その後は自らも会長として協会に多大な貢献をなされたことは多くの方がご存知でしょう。ただ、私にとっての多比羅先生は、ギヤスケル研究の大先輩である以上に、人生の先輩、先輩のママ友の真理子さんというかけがえのない存在でした。十数年前に、二人の息子がいること、偶然にもその息子たちが同じ小規模のカトリック系中高一貫校の出身だという共通点がわかり、一挙に距離が縮まって、真理子さんのご提案でお互いをファーストネームで呼び合う関係になりました。年に二、三回でしたが、ランチとお茶をしてお喋りする楽しい時間を共有してきました。研究の話もしないわけではなかったのですが、それ以上に、お互いの日常の心配事やささやかな喜びを話し合っていました。真理子さんもお母様の介護をなさっていたため、一番多かった話題は介護だったかもしれません。

そのような事情から、ご病気についても随分前からお聞きしていましたが、他言しないように言われました。手術は成功していても転移が心配とのことでした。それでも、術後十年目にもお元気だったので、こんなことになるとは思いませんでした。十年では決して安心できない病気だと話す真理子さんに、いつも私は楽観的なことばかり言っていました。そして不幸にも十年以上経ってから転移してしまったのですが、それでも、真理子さんなら必ず乗り越えられると信じていました。事実、抗癌剤治療によって真理子さんのご体調は、一度は改善しました。三年前にはお母様が亡くられ、真理子さんは、悲しみつつも見送れたことに安堵なさりと、ご次男のお孫さんの誕生にはとても喜んでいらっしゃいました。

一昨年は、辛い副作用が最も軽くなる日時を真理子さんが選んでくださり、私が真理子さんの最寄り駅まで出かけてお食事しました。食欲も戻り、いつもどお

りの眞理子さんとお話できて安心してしまいました。それでも、完治したわけではなく、最新の分子標的治療も期待した効果をもたらさず、抗癌剤治療再開とのことでした。コロナ禍で「ハイリスク患者」とされたとのことで、結局昨年は一度もお会いできず、副作用のひどい日だったら迷惑だと思い、お電話も遠慮してしまいました。年賀状のお返事がなかったのでご自宅にお電話し、退院なされたところだけでも、ご体調が良くないとご主人様からお聞きし、愕然としました。

今思えば、転移してからずっと眞理子さんは人生のカウントダウンをしていて、必死に闘っていたのですが、健康状態の不安を語る眞理子さんに対して、私は希望のかけらを少しでも大きくすることばかりに熱心でした。それは多分に私自身のためであり、眞理子さんの不安を十分受け止めていなかったと痛感します。二冊のギヤスケル小事典の出版は、眞理子さんの闘いの成果で、眞理子さんにとってのギヤスケルは、単なる学問の対象を超えた生きる指針だったと思います。

眞理子さんはお嬢様育ちの良い面ばかりを持ち合わせていて、思いやりがあって辛抱強く、真面目でした。そんな眞理子さんと話すと、自分が粗野で我儘な人間だと感じることもありました。芯が強い一方で、私と同じケーキを注文するときなどのいたずらっ子のような笑顔や甘えた口ぶりはとても可愛らしく、強さと愛らしさを兼ね備えた方でした。また、いわゆる「緑の指」の持ち主で、シンピジウムの欄の鉢植えを毎年見事に咲かせ、お庭に多くの美しい花々を育てていました。「お花が咲くときには、お水が沢山いるのよ」というアドバイスは忘れませんが、私はシンピジウムの花を毎年咲かせられないままです。

最後にお声が聞けたのは、亡くなる六日前の病院のベッドからのお電話でした。義理堅い眞理子さんらしく、お見舞いの花のお礼だったのですが、普段と全く違う苦しそうなお声には私はすっかり動揺してしまい、人には言わないことにしている「頑張って」という言葉しかかけられませんでした。眞理子さんが十二分に頑張ったことはわかっていたのに。それでも眞理子さんは前向きに「専門の病院に入れたの」とおっしゃり、「またお会いしましょうね」が最後の言葉になりました。今は、陽だまりのような眞理子さんとの時間、優しい笑顔を思い、伝えられなかった「ありがとう」を繰り返すばかりです。心からご冥福をお祈り致します。

(日本ギヤスケル協会第5代会長、早稲田大学教授)

See You in the Next World, Professor Tahira!

大野 龍浩

2012年10月から年末にかけて起きた「メーリング・リスト（以下MLと略す）炎上事件」。それは一会員による新刊書紹介のメールに、事務局長が「自由投稿を規制すべき」という提案をしたことから始まった。その後、「自由投稿」か「規制投稿」かについて諸会員から意見が寄せられるなか、論争に嫌気がさした一会員から「退会したい」と会長に連絡があった（12 Oct）。このことを重要視した会長は「ML一時休止」を役員会に打診し、了承を得て、MLを停止した（14 Oct）。これを機に一会員から会長と事務局長の解任要求が出される事態となり、会長は問題解決のため臨時的役員会を招集した（14 Oct）。その会議で、副会長が中心になって「メーリングリスト問題に関する役員会見解」をまとめることになった（28 Oct）。解任動議の対象となっていた二人を除いた役員名で出されたその冒頭には、「今回の問題は協会が発展するための一つの契機を提供したものと理解する。当事者はこれでノーサイドとし、今後とも他の会員ともども、協会設立の目的を遂行するため、それぞれの才能を發揮して運営に協力してくださることをせつに望む」とある（9 Nov）。ML再開（14 Nov）後も、公式見解に対する反論が寄せられたり、複数の退会者が出たりしたが、退会の意思を表明した事務局長の後任を選出する臨時役員会（22 Dec）を経て、翌年1月吉日に新体制による活動方針が会長より発表された。

多比羅眞理子先生が第3代会長を務められた2010年4月1日から4年間、副会長として先生を支えたが、一番の思い出はやはり冒頭に概要を記した件である。

会長の学会運営能力に疑義が寄せられたとき、先生は次のように返答された。——「私は会長就任のあいさつで、ギヤスケルを愛する一人として微力ながら、会の発展に寄与したい、と申し上げました。この気持ちは今もまったく変わっておりません。そして、決して独断専行することなく、役員の皆様、会員の皆様とご相談の上、会運営をしていきたいと、お伝えしました。ですから、今回も皆様から頂戴したご意見をありがたく受け止め、少しでも会運営に生かしていきたいと考えております。加えて、私の使命の一つは、ギヤスケルを愛する会員を一人

でも多く増やしていくことだと任じております。どうぞ、その点だけのご理解いただきたくお願い申し上げます。」(4 Oct)

先生から ML 休止への賛同を求められたとき、私は「そこまで大仰にしなくてもいいのではないか。『役員会で協議中。結論が出しだいお知らせします』とでもアナウンスしておけばいいのではないか」とお伝えしたが、先生は「とにかくギヤスケル協会を分裂させてはなりません！」(14 Oct) との強いご意志を貫かれた。

臨時役員会が招集されたとき、私は「大騒ぎするほどの問題」ではない、「騒いでおられるのは 120 名の会員中、たった 4 名です。しかも、みなさんインテリです。泰然自若とかまえるべきかと思います」(19 Oct) と申し上げ、メール会議を提案したが、事態の深刻さを憂えられた先生から「28 日には、ぜひご出席くださいますよう、お願いいたします。……お力をお貸しくださいませ。お願い申し上げます。協会のために」(22 Oct) というご返事を戴き、その熱意に打たれ熊本から上京した。



2010年10月2日、実践女子大学雪香記念館にて

先生から届いた最後のメール——「昨日の研究会開催には、いろいろご迷惑をおかけいたしました。……無事、終了され、また、先々の発表者までお決めくださりまして、ホットいたしました。……おかげさまで安心して療養生活に入れます。しばらくお休みをいただきますが、

また、Zoom で皆様とお目にかかるのを楽しみにさせていただきます」(9 Nov 2020) ——は、自ら主催されていた 2 ヶ月に 1 度の読書会を気にかけてくれたものだった。最後の最後までギヤスケルを愛し、協会の行く末を案じられた方だった。

「今後、抗がん剤の治療は受けません。幸せな人生でした。患まれた人生でした。悔いは何もありません」と、ご家族に語っておられたという（ご主人より）。その潔さに頭が下がる。今頃は来世でギヤスケルや山脇百合子先生、松村昌家先生と話をされていることだろう。いずれわたしもその仲間に加えていただく日が来る。そのときにより報告ができるよう、現世でできるだけのことをするつもりだ。

(日本ギヤスケル協会第 6 代会長 立正大学教授)

お二人の「温かいまなざし」

足立 万寿子

私はいま、多比羅真理子先生のご著書『ギヤスケルのまなざし』を手にしている。表紙の中央にはサミュエル・ローレンスの描くギヤスケルの肖像画が載っている。肖像画のギヤスケルの目を見ていると、再び疑問が浮かんできた——「遠くを見遣るギヤスケルのまなざしは何に向けられているのだろうか」と。

『ギヤスケルのまなざし』の第一章から第四章に取り上げられているギヤスケルの作品には、当時の道徳基準に外れているとされる罪や社会的に蔑まれた職業、身体や精神の障害などから、苦しい人生を強いられる登場人物たち、多比羅先生のお言葉をお借りすれば、「社会的弱者」（同書 p.48）が登場する。

登場人物の一例は、同書「第一章 ギヤスケルとナイチンゲール——『ルース』を接点として」で取り上げられた長編『ルース』の主人公ルースである。彼女は愛し愛されていると思っていた上流階級の男性に捨てられたと知り、自ら命を絶とうとしたときベンスン師に救われ、さらに身籠っていると分かっても、ベンスン師やその一家の愛のこもった助けに支えられて、当時「罪の子」とされたレナードを出産し、育てる。やがて彼女は病院看護人となり、町に蔓延する疫病の患者の看護に親身になって献身的にあたる。彼女の働きもあって疫病は終息していく。当時是とされた規範から逸脱した罪を犯し、さらにナイチンゲールの働きが世に知られる以前には卑しい職業とされていた看護職に就いたルースだが、町中の人々から称えられる。ところが、彼女も疫病に感染し、最期に神に迎えられたと確信しながら息を引き取る。多比羅先生は、世間から蔑視される「存在に、ギヤスケルは小説のなかで、尊厳の光を与えた」（同書 p.35）と論述されている。

同書「第三章 幽閉から解放へ」で扱われた短編「半生をふり返って」では、熱病のため脳に障害を負い、知性を失い、時には凶暴にもなるウィリーが登場する。彼を介護する姉スーザンは力で抑え込むのではなく、目に見えぬ敵と闘っている彼に寄り添いながら、言葉を尽くして彼をなだめ、落ち着かせる。多比羅先生は、「スーザンがウィリーの狂気を鎮めるのに必要とし、かつ彼の狂気に立ち向かうのに使ったものは、拘束具の類ではなく、彼女の言葉であり、深い愛情であつ

た」(同書 p.89)と指摘されている。

次に、私が手に取った『ギヤスケル全集 別巻I (短編・ノンフィクション)』の中の多比羅先生訳「ジョン・ミドルトンの心」ではどうだろうか。この短編には、リチャードの投石による頭部の傷がもとで次第に四肢が麻痺し、寝たきりになるネリーが登場する。彼女は最期に、夫ジョンとリチャードが見守る中、リチャードに「あなたを赦します。ジョンもそうすると信じています」と言い遺す。ジョンは、不幸の渦中にあっても柔和な表情のネリーの心はキリストへの信頼と人々への愛に根差していたと悟る。ことごとく邪魔をするリチャードに復讐する機会を狙っていたジョンであったが、ネリーの言葉に促されてリチャードを赦す。多比羅先生は訳者解説で、「リチャードに対するジョンの強い復讐心が、「赦しと慈悲の心」へと変わるまでの心の軌跡が、力強く語られている」(同書 p.189)と説明されている。

私はいま、多比羅先生に初めてお会いした日を懐かしく回想している。そう、30年近く前の、日本ギヤスケル協会の例会のときだった。私はある大学の掲示板で、日本ギヤスケル協会の例会が実践女子大学で開催されるとのポスターを目にした。同大学のどなたも存じ上げていなかったが、勇気を出して参加させていただいた。このとき温かく迎えてくださったのが多比羅先生だった。そのお目元に浮かぶ微笑みは新参者の私を違和感なく新しい世界にいざなうものであった。

その後、多比羅先生とは年齢が近いこともあり、ギヤスケルに関係することだけでなく、家族や職場のことなど個人的なことも話させていただき、先生の優しいお声に心軽くなったものだった。先生もきさくにお話くださり、中でも「私にはお母さんが二人いるの。一人は私の母で、もう一人は山脇百合子先生なの」と、いたずらっぽく笑いながらおっしゃったことを思い出す。そのとき私は心の中で、「ギヤスケルにもお母さんが二人いて、一人は実母のステイーヴンソン夫人で、もう一人は育ての親のラム伯母なのだけれど…」と思ったのだが…。

多比羅先生のご本を読み返し、先生の思い出を辿りながらいま、気づいたことがある。肖像画のギヤスケルの「まなざし」が向けられた先は社会的弱者ではなかったか、と。さらに、彼らへのギヤスケルの温かい愛情を作品から読み取られたのは、多比羅先生ご自身のお目元の温かい「まなざし」ではなかったか、と。

(元ノートルダム清心女子大学教授)

多比羅先生との思い出

遠藤 花子

2021年1月30日、多比羅眞理子先生がご逝去されたのご連絡を頂いた時、全身が凍てついた。そして、2020年11月に頂いた最後のお手紙を握りしめて涙した。闘病されていたことは伺っていたが、こんなに早く他界されるとは思ってもみなかった。

多比羅先生がいかに優れたギヤスケル一筋の研究者であったか、そしていかに日本ギヤスケル協会に貢献されたかについて語ると紙面が足りなくなるので、ここでは、多比羅先生の教え子として、思い出を綴ることにした。

多比羅先生には学部2年生の必修の授業でお世話になった。大層朗らかで可愛い先生というのが第一印象であった。この後20年間にわたりお世話になり続けるとは、この時は想像もしていなかった。実践女子大学のギヤスケルと言うと、故山脇百合子先生が筆頭に来るかもしれないが、私が学生だった時には既に多比羅先生イコールギヤスケルの先生と定着していた。学部3、4年生の多比羅先生の演習（選択）の授業では、ギヤスケルの短編“The Half-Brothers”を読んだ。犬好きでいらっしゃる先生が涙ながらに人間と動物の素晴らしさや奥深さを語っておられた。授業で感動して泣くことなど、初めての経験であった。それ以来、ギヤスケルの作品に興味を持ち、イギリス留学中にはナッツフォードを始め、小説の舞台になったウィットビーなどを旅して回った。あの多比羅先生の感動的な授業を受けていなければ、ギヤスケルの小説に出会うこともなかったかもしれない。

ちょうど私が留学から戻ってきて、実践女子大学で助教をしていた時、多比羅先生より「今度の日曜日はお暇かしら？ 今度、研究会をすることになったので、来て下さらない？」と目をパチくりさせて訴えかけるようにお声をかけて下さった。研究会に参加させて頂くようになった始まりである。校務と重なり、中々参加が叶わず、失礼ばかりしていた矢先、「今度事典を作ることになったので、一緒にやってほしいの～」とまたもやお声をかけて下さった。駄目な子ほどかわいいと言われているが、まさにそのような感じだったのではないかと思われる。そ

の研究会の成果は、ひとえに多比羅先生のご尽力で2冊の事典として出版された。特に2冊目の時には、闘病されながらの作業となったにもかかわらず、先生は最後まで精力的であった。先生には、何度もお声をかけて頂き、そして事典の執筆にまで参加させて頂けたことに、心から感謝申し上げている。

多比羅先生とは（多すぎて怖くなるくらい）共通点が多く、会話のたびに驚きと嬉しさや楽しさに包まれた。数多くある共通点の一例を挙げると、私が入学した東京都目黒区立の小学校は多比羅先生が通われていたのと同じ小学校であり、中学校から大学院までも同じところで学んでいる。更に、私が通っていた幼稚園の関係の方が多比羅先生のご隣人であると知った時には、私の人生と何か運命的なものを感じた。また、先生のご主人様と私の父が同じく目の周辺を怪我したタイミングや、多比羅先生と私の母の骨折のタイミングまで一緒だった時には、もう笑うしかなかった。

このような共通点が多いという理由もあるのかもしれないが、多比羅先生には本当に良くして頂いた。感謝してもしきれない。今でも「花子ちゃん、ちょっといいかしら……」と、多比羅先生のあの素敵なお声で電話がかかかってきそうな気がしている。電話の内容は、時には学会やお食事のお誘い、そして時には悩み相談、更にはレベルの高い学問的なご質問やご依頼などである。もちろん、私の話も沢山聞いて頂き、世間話も多かった。でも何より、ご家族のお話をされる時はとても嬉しそうだった。会話の全てが楽しい思い出として蘇ってくるが、中には能力以上の依頼もあった。それには随分と困惑したものだったが（その都度多比羅先生は「うふふ……大丈夫よ」と笑っておられたが）、それだけ期待して下さっていたのだと思うと、大変有難く、弟子としてはこの上なく幸せだった。色々なことを思い出すと、目に涙が溜まってしまう。

多比羅先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（日本赤十字看護大学専任講師）

『北と南』における移動するヒロインと性差、階級、地域性の境界としての「壁」

石井 麻璃絵

1 序

ジェニー・アグロウがエリザベス・ギヤスケルの『北と南』(North and South, 1854)を「一部教養小説であり、一部産業小説である」と評したのは適切であろう(369)。マンチェスターをモデルとするミルトンを主な舞台とするこの物語は、南の村ヘルストンからやってきた牧師の娘マーガレット・ヘイルの成長を軸に、産業都市における労働者と彼らを雇う新興中産階級の工場主たちの対立を描く。タイトルである「北」と「南」はそれぞれ、マーガレットが結ばれる工場主ジョン・ソーントンが活躍するミルトン、そして彼女の生家があるヘルストンを指す。しかし、より広義で捉えるならば、北にはマーガレットが親交を持つようになる労働者ニコラス・ヒギンズがやってきたバーンリィ、そして南にはマーガレットが幼少期を過ごす叔母ショウ夫人の屋敷があるロンドンを含めることができるだろう。ヒギンズはマーガレットに出会った際に次のように述べる。「北と南はこの大きな煙たい場所で両方が出会い友達になったようなもんです」(NS 73)。ヒギンズの言葉通り、ミルトンは物語の主要な登場人物が集結する場であり、ある者は偏見を捨てて相手の価値観を受け入れるようになり、また、ある者は固執した考えから抜け出せずこの地を去っていく。ヒロインであるマーガレットは中産階級の年頃の娘として登場し、旅の過程で地域による意識の違い、階級の差による生活態度の違い、男女の性差による活動の違いといった様々な「壁」を目撃、あるいは体感する。物語のなかで、こうした隔たりはしばしば他人との精神的な溝のみならず、人物を取り巻く物理的な壁として表われる。本論では『北と南』における空間描写に注目し、ヒロインと彼女を取り巻く登場人物たちのアイデンティティーと空間の相互関係を考察する。生まれた階級や育った環境にとらわれることのないマーガレットが、移動に伴い出会う様々な境界としての壁を乗り越え、周囲の空間に適応し、変化する時代にふさわしい女性へと変容していること

を指摘することが本論の目的である。

2 ハーレイストリート——ミドルクラスの壁

ヴィクトリア朝時代、ミドルクラスを中心に普及した家庭内イデオロギーは精神的避難所としての家庭像と、良妻賢母の「家庭の天使」を理想とする階級・ジェンダーの規範を生み出した。家は男性社会と対峙する地上の楽園であり、女性は結婚して妻・母として家庭にのみ居場所を求めることが想定された。近年、家庭性を研究する多くの批評家が家の中に存在する住人を分けるジェンダーや階級の壁の存在を指摘する。例えば、サッド・ローガンは19世紀のミドルクラスの屋内生活に変化をもたらした三つの要素、つまり「プライバシーへの関心の高まり」、「家庭空間（と外）の区別への新たな嗜好」、そして「社会的地位を明示する欲求」を指摘する（16）。18世紀まで家族と従者は寝食を共にし、男女もまた部屋を共有していた。しかし、19世紀以降、住人は自身の階級やジェンダー、年齢のアイデンティティーに従って部屋を使い分けるようになる。従者は家族の調和を乱さぬよう呼ばれた時のみ存在するものとされ、男性が家に持ち込む仕事や政治の話から女性は退き、子供は大人が集まるスペースから引き離された（Flanders 8-9）。ジョン・ラスキンが「女王の庭」（“Of Queen’s Gardens,” 1865）で謳った理想の家庭像は一つの大きな女性的でプライベートな空間であったが、家もまた社会的構造物の一つであり、住人は目的や使用者、デザイン、性格が異なる個々の空間に属することで自身の社会的立場を自覚するようになったのである。

『北と南』の初めの舞台となるハーレイストリートは、マーガレットがまさに19世紀の家の中で重要になった「分離」（Flanders 9）の概念を学ぶ場になっている。9歳のマーガレットはロンドンのハーレイストリートにある叔母ショウ夫人の家に預けられる。家では裕福なアッパーミドルクラスの生活が営まれ、住人にとって正餐会や訪問、買い物、舞踏会は日常的なものになっている。¹マーガレットがハーレイストリートに預けられた理由は直接言及されないものの、娘により良い教育と教養を望んだ母ヘイル夫人の願望であったことが推測できる。ヘイル夫人の父ジョン・ベリスファド卿は州長官だった。ヘイル夫人は貧しい牧師ヘイル氏と結婚するが、南部の村ヘルストンの牧師館での暮らしは彼女が期待した結婚生活ではなかった。服を新調できないヘイル夫人はショウ夫人の娘イーデイスの

結婚式を欠席する。しかし彼女は娘のマーガレットにはリスペクタブルな人々との交際を維持するように説く。ヘルストンの家にはガバナンスを雇う余裕も近隣に社交を営めるような立派な家もない。病に臥せるヘイル夫人は將軍と結婚した裕福な妹に娘を預けることで、彼女が淑女に必要な教養や生活様式を身につけることを期待するのだ。

ヘルストンの「素朴な」(NS 10)少女としてやってきたマーガレットは、ハーレイストリートでは子供は子供部屋で過ごしなればいけないことに衝撃を覚える。ヘルストンの牧師館には子供部屋がなかった。そのためマーガレットは母親の衣裳部屋で眠り、食事は常に両親と食べていた。しかし、ハーレイストリートで彼女は子供部屋で食事をとり、眠ることが求められる。部屋は口うるさく厳しい乳母が取り仕切り、たえず服装を清潔にしなければならない。幼いマーガレットにとって子供だけで寝なければいけないことはつらい経験で、彼女は様子を見て来たショウ夫人と父親を不快にさせないようにすすり泣きを抑える。ヴィクトリア朝時代の子供部屋は客間や食堂といった家の中心的な空間から離された。アンドレア・カストン・タンゲによれば、子供たちは「同じ屋根の下にいながらも、まだ完全なミドルクラスのメンバーとして認められていなかった」(24)。紳士淑女である両親に比べ、子供にははっきりとした社会的立場や性の役割分担がない。彼らは「ミドルクラスのアイデンティティーがもっとも適切に表される公的な部屋、つまり食堂と客間に決まった時間に、招待のみを通して入ることを許された」(Tange 24)。このように、子供は社会的アイデンティティーが未熟であり、自身が属する階級の価値観や行動規範を両親によって客間や食堂に招かれることで学ぶ必要があった。幼いマーガレットもまた、ミドルクラスのメンバーとして認められていないためにハーレイストリートの子供部屋に隔離される。彼女は最上階の子供部屋の自分が「空高くにいる」のに対して、一階の食堂にいる父親と叔母は「地中深くにいる」(NS 10)と表現して彼らとの距離を感じている。

マーガレットがハーレイストリートの住人として認められたことは、成長した彼女が客間の淑女として現れていることからうかがえる。客間は女性が一日でもっとも長い時間を過ごす「閉鎖的な部屋」だった(Logan 5)。女性はここで帰宅する男性家族を迎え入れ、客人をもてなし、ピアノをひき、本を読んで過ごした。こうした女性の嗜みは階級の証明として重要であり、部屋の調度品や家具同

様、家族の社会的地位を表す媒体だった。² ハーレイストリートのマーガレットも客間で客人の相手をし、正餐会や訪問の目録をつけるなど細々とした家事を担当する。彼女は帰還したヘルストンでも病気の母親に代わって客人をもてなし、刺繍など淑女の仕事を引き受ける。

客間の淑女としてのマーガレットの嗜みは、やがて未来の夫であるソーントンを魅了する。工場所有者たちが台頭する産業都市ミルトンはいわゆる成り上がりの商売人たちの街である。一部の人間は自分たちに教育や教養が足りないことを弱点として捕らえるが、多くの人間にとって時は金なりであり、即物的な価値観が蔓延している。そんな彼らにとってつましいとはいえ時間に追われないヘイル家の上品な暮らし、教養と教育が日常になっている生活はひどく珍しいものである。ソーントンはホテルに滞在するヘイル家を訪れ、マーガレットによって客間に迎え入れられる。「若い淑女」が「恐れることなく威厳のある態度」(NS 62)で対応するのを見た彼は、落ちぶれたヘイル家には借家の品の悪い壁紙がお似合いだろうと思っていた己の考えを恥じ、彼らの新居クラプトンの壁紙を張替えるよう大家に命じる。二度目の訪問でクラプトンを訪れたソーントンはお茶の用意をするマーガレットの優雅な手つきに目を奪われる。この時、彼は居心地よく整えられた彼女の客間に感銘を受けている。客間ではヘルストンから持ってきたチンツカーテンと椅子カバーが「温かい落ち着いたあるゆったりした色合い」(NS 79)を醸し出し、草花の入った花瓶、針仕事の綺麗な籠が飾られている。マーガレットの客人への「優雅な心遣い」(NS 80)が示されたこの部屋は、まさにミドルクラスの家にはないと考えられた理想の家庭空間であり、彼女が淑女であることの証明になっている。ソーントンの屋敷の客間で正餐会が開かれた時も、彼女の魅力は人一倍輝く。他のミルトンの淑女たちが他人の服のあら探しをしたり食事に注意を払うのに対して、マーガレットはソーントンの妹ファニーに話しかけ、紳士たちの話に耳を傾ける。品位があつて美しい彼女は目立ち、何人かの街の有力な人物が彼女の素性をソーントンに尋ねる。ソーントンもまた落ち着かずに服を引っ張る妹の不安な目と、静かで穏やかな力を放つマーガレットの大きな優しい瞳を比べ、改めて彼女の魅力を確認する。このように、『北と南』のなかで客間はソーントンが淑女であるマーガレットの魅力を感じる場所になっている。

ハーレイストリートから帰還したマーガレットは、馬車建造業で財を成した近隣のゴーマン家を「商売人は嫌いだ」(MS 20) と言って母親を驚かせ、ソーントンに「商人」(65) と呼んだことで父親に咎められる。物語初期のマーガレットが抱く新興中産階級、商売人への偏見は叔母のもとで培われたことが想像できる。ショウ一家の社交は自分たちと同じ階級、似た社会的地位の人物に限られていた。召使たちは台所のある「彼らの地下世界」(MS 364) に住み、マーガレットは外でもあくせく働く労働者の姿を見たことがなかった。ハーレイストリートは住人を囲う物質的、概念的な「壁」をもつ建物であり、それ以外の人間を他者として締め出す。そして、一度はその住人であったマーガレットもまた、社会的地位の変動によってこの家庭空間から追い出される可能性を秘めていることがほのめかされる。両親が亡くなった後、マーガレットは再びショウ夫人に引き取られる。しかし、ハーレイストリートに帰還した彼女はイーディスの子供の子守や小間使のような雑用を押し付けられ、自由な時間がほとんどなくなる。また、以前と異なり、叔母は社交期にもかかわらず彼女を正餐会に連れて行かない。マーガレットの名付け親であるベル氏は、孤児になったマーガレットがハーレイストリートで不当な扱いを受けぬよう、ショウ夫人に生活費として年間 250 ポンドを差し出すことをマーガレットに助言していたが、彼女が正餐会に連れていかれず屋敷で一人寂しく取り残されているのを見た時は驚いている。このように、ハーレイストリートは良くも悪くもミドルクラス階級の閉ざされた狭い社会を象徴する。マーガレットが住人として認められていたのは彼女が元ジョン・ベリスファド卿の娘である母親と、貧しいとはいえヘルストンの牧師であった父親の娘であった間だけであり、社会的後ろ盾を失った彼女はハーレイストリートの住人たちから仲間意識を向けられなくなっているのだ。³

3 ヘルストンとミルトン——父親の空間の失墜と新たな男性的空間

ハンプシャー州のヘルストンはバラが咲き乱れる教会と数件だけの家からなる寒村だが、マーガレットにとってこの地は他のどこよりも素晴らしく、彼女は両親と再びここで暮らせることを喜んでいた。しかし、マーガレットがヘルストンに戻って三か月後、ヘイル氏は彼女に唐突に聖職離脱の意思を告げる。聖職離脱の理由は国教会に対して疑いを持った彼の良心に従ったものだが、臆病なヘイル

氏は移住の決定を妻に語る勇気がなく、その役割をマーガレットに託す。彼の年収は 170 ポンドで、そのうち 70 ポンドを反乱の容疑をかけられて逃亡中の息子フレデリックに送金している。当時、リスペクタブルなミドルクラスの生活を維持するには年間 300 ポンドが必要であったことを考えると (Gordon and Nair 15)、ヘイル氏の年収はかなり低い方であったことが分かる。また、聖職と異なり彼がミルトンで始める個人家庭教師の仕事は不安定である。夫が聖職俸から引き出した収入を使いきったことを知ったヘイル夫人は、彼が次の賦課金に手を付けようとしていることに苦言を呈する。

移住の決定はマーガレットに「家と愛する父親についてすっかり安定していた考えの基盤」(NS 36) を失わせる。ヘイル氏によって示されるのはミドルクラスの女性が依存すべきとされた頼もしい家父長像、そして彼が守るとされた家庭の安定の崩壊だろう。彼には一家に経済的安定を約束する力はなく、「羅針盤の方位が分からない」船乗りが「状況によって方位を即興的に決める」(NS 75) ように進むため、結果的に家族を苦しめる。失墜したヘイル氏の家父長の権威はその後にも回復しない。彼は移住の算段や新居の準備を娘に丸投げし、ミルトンに移ってからはもっぱら彼女の相談役にとどまる。しかし、ヘイル氏はけっして有能な相談役ではない。妻が危篤に陥った時、彼は事実を受け入れられず右往左往するばかりで、結局フレデリックを呼び戻す決定も妻の葬式の手配も全てマーガレットに任せる。最終的にヘイル氏は遺産を残すこともなく、慰安のために出掛けたオックスフォードのベル氏の家で心臓発作によりあっけなく亡くなる。古い家父長制度はもはや女性が頼れるイデオロギーではなく、マーガレットは父親に頼らない生き方を模索する必要に迫られるのだ。

産業都市ミルトンはマーガレットが父親とは違った男性性、そして彼らとの間に築かれた階級や心的「壁」を目撃する場所となる。ミルトンではレンガ作りの家屋と工場が規則正しく建ち並び、三十年ほど前にできた主要街路を人々や荷馬車が忙しそうに行き来している。街に台頭する新興中産階級の世界は紡績工場の所有者であるソーントンとその家族によって象徴される。彼の父親は投資に失敗した後自殺し、ソーントンは一家の大黒柱となるべく学校をやめて商売の道に入った。田舎の反物業で週に 15 シリングを稼ぐ苦しい生活をした後、彼はミルトンに戻って父親の負債を全て返済する。ソーントンは勤勉と節制、努力によつ

て勝利を勝ち取る人間であり、貧しい労働者たちは己の墮落した性格のために貧困から抜け出せずにいると考える。労働者を“hands” (NS 120) と呼ぶ彼にとって、労働者は個人ではなく労働力にすぎない。『北と南』でもっとも深刻に描かれる対立は、このソーントンに代表される新興中産階級と労働者階級の対立であろう。事業不振から賃金を下げる雇用側とそれに納得しない労働者側の軋轢は激化し、やがてデモ隊がソーントン一家を襲撃する事件にまで発展する。

しかし、ソーントン一家が他者との間に築く壁はこれだけではない。辛酸を舐めながら商売でのし上がった彼らにとって、何もせずとも土地から利益を得る南部の荘園領主や地主、ロンドンの上流貴族気取りの人間は時間を無為に過ごす怠惰な人間である。ソーントンの場合、ヘイル氏から古典を学び、母親に対して訪問の礼を尽くすよう求めるなどミドルクラスの作法や教養に対する歩み寄りが見られる。南部の人間、そしてミドルクラスに対する偏見は彼よりも彼の母親ソーントン夫人の方が強い。ソーントン夫人はミルトンで生まれ育った体格のがっしりした女性である。息子と貧乏の苦しみを分かち合った彼女は、現在の地位まで上り詰めた息子を何よりも誇りにしている。「ミルトンは臆病者の住む街ではない。・・・ミルトンで暮らすのなら勇敢な心を持つことを覚えなければならない」(NS 116)。夫人はかつてストライキで荒れ狂う暴徒たちの間を練り歩いた経験をマーガレットに語り、上品ぶった南部の人間たちにはないダークシャー州の男女の強さを誇る。

ソーントン夫人の男勝りな性格、新興中産階級の即物的な価値観は彼女が使う空間に表れている。ソーントンの家は彼の工場と隣接する。およそ五・六十年前に建てられた家は番号の付いた長く狭い窓が並び、安全用の手すりのある立派な建物だが、工場のブンブンとうるさい機械音が絶えず響いている。そして、家の巨大な食堂にソーントン夫人はいる。それは「まったく女性が住んでいる気配のない、立派などっしりとした」、「飲食する以外のどんな仕事にも役に立たない」(NS 79) 部屋である。黒い絹の服を着こなしたソーントン夫人は素晴らしい織物のテーブルクロスを繕っているが、本は邪魔だと言わんばかりに家具の隙間に挟まっている。ヴィクトリア朝時代の食堂は一般的に男性の空間とされた。これは食事を済ませた女性が客間に退いた後、主人が男性客とビジネスや政治について話し合ったためである。客間の壁紙が明るい色で統一されたのに対して食堂は暗い壁

紙でレイアウトされ、また、高価な食事や年代物のワインは主人の経済力や社会的地位を表す媒体とされた (Tange 146)。モールバラの家でも正餐会では豪華な食事が並べられ、一家の財力が周囲に示される。一方、客間は普段「誰もそこに入ったことが無かった」(NS 112) ように冷え切り、正餐会の時にだけ金びかの調度品を汚れから守るための覆いが外される。モールバラでは客間は食堂同様、家族の金銭力を表すだけの場所であり、家族や客人が憩いを求めて集まる空間にはなっていないのである。

即物的で現実主義なソーントン夫人にとって、物事は金銭になるか得になるかどうか全てである。彼女にとって刺繍は「つまらない、役に立たない仕事」(NS 96) で、上流社会の教養や訪問といった礼儀作法は単なる時間と金銭の無駄にすぎない。淑女の嗜みを身につけようとする人間としては、ソーントン夫人の娘ファニーがいる。彼女は見栄ばかりが先行する軽薄な女性で、客間向けの曲をたった一曲、しかも間違えてばかりで弾けていると言いが難いが、淑女としての嗜みを身につけていると考える。クラプトンを訪れた際、彼女は引越してピアノを売ってしまったマーガレットの客間を見て、彼女を淑女ではないと馬鹿にする。ファニーはソーントン家のなかで唯一精神的にも肉体的にも「弱い」(NS 95) と認識されており、後にずっと年上の金持ちの工場長と結婚する。このように、ミルトンでは淑女の嗜みを身につけるような女性は弱い人間と見なされ、金銭目的の愛のない結婚に身を任せるしかないのだ。

マーガレットはソーントンがクラプトンの客間を訪れた際、彼と父親を比べて対照的な印象を抱く。ヘイル氏は細い体つきで、動揺する感情をそのまま表すような柔らかい皺と、女性のような気だるげな美しい目と眉をもつ。一方、ソーントンは真っ直ぐな眉と澄んだ熱心な目をもつ。皺は大理石に掘られたかのように深く、美しい歯並びと明るい微笑が大胆に勇気をもって行動する男らしさを表す。また、両者は外見だけではなく、金銭の管理能力にも大きな差がある。財務管理能力のないヘイル氏に対して、節制を重んじるソーントンは家族の財政的窮地を救ってきた。反物商で下働きをする間、彼は給料のなかから定期的に3シリングを貯め、そこで学んだ克己の念は成功した現在の彼にとっても重要な信条となっている。両者の違いは、時代遅れになりつつある古い家父長制度の在り方と、新たに力を付けつつある新興中産階級のあり様を示すものだろう。個人が努力に

よって階級や生活を改善できる時代が迫っている。それに伴って良妻賢母の「家庭の天使」が一番とされてきた女性の生き方にも変化が生じるのである。

4 クラプトン——繋げるマーガレット

ヘイル夫人は結婚後移り住んだヘルストンの村も、煙の味と匂いがするミルトンも好きになることはなかった。ショウ夫人もミルトンをおぞましい場所と呼び、訪れた際は一刻も早くロンドンに帰りたがる。ヘイル氏は妻の死を早めることになった引っ越しに最後まで自信が持てず、学生時代からオックスフォードで暮らすベル氏は故郷ミルトンを低俗な地と呼ぶ。このように、物語の中で多くの人間は偏見を捨てることができず、自身が属する狭い世界の価値観のなかでのみ生き、また亡くなる。『北と南』のなかで誤解や無理解を捨て、互いに結びつく成長をみせるのはマーガレット、ソントン、ヒギンズの三者であろう。イーディスは客間のソファで眠る“Sleeping Beauty”として登場し、結婚式に関する事務的な取り決めを母親任せにする装飾的な女性だった。マーガレットはハーレイストリートでイーディスと姉妹のように育てられるが、彼女はイーディスと異なり実践的に行動できる女性である。本章ではマーガレットのアイデンティティーや内的成長と結びつく空間に注目する。

ヘルストンに帰還後、マーガレットはハーレイストリートの「贅沢な同居人」(NS 363) から「ヘルストンの牧師館の一人娘」(8) としての生活にすぐに自らを適応させる。彼女は子供をお守りし、老人に話しかけ、病人に食事を運び、やがて転居が決定すると生活の変化に圧倒される両親をしり目に引っ越しの準備を始める。マーガレットの判断で、新居が決まるまで荷物を駅に預けること、病気の母親を海水浴場に向かわせるなど「家庭内の厄介な雑事に関する決定」(NS 50) が下される。そして引っ越しの当日、彼女は落ち着いた態度で女中や手伝いにやってきた男たちを監督し支持を出す。マーガレットは「努力し、行動し、真剣に計画する」(NS 52) ヒロインであり、頼りない父親に代わって家族という船の舵を取る決意を示すのだ。引っ越しの計画を立てる際に、マーガレットが書斎から地図帳を客間に持ち込んでいるのは興味深い。空間批評家であるダフネ・スペインは「性差に基づく空間は(略)日々の行動によって形成される。いったん定着すればそれは当然のこととして受け入れられ、(略)不変であるように思われる」

(28-29)と主張する。しかし、マーガレットの行為はこうした考えに挑戦している。女性のプライベートな空間とされた客間に、教育や仕事を示唆するパブリックな書斎から男性的性格を持ち込む彼女は、部屋の性質を変化させることで家庭内に築かれた性差の「壁」を希薄にする。

マーガレットが屋内にある階級やジェンダーの壁を取り除く行為は移り住んだミルトンの地でも見ることができる。彼女の決定により、三つの居間をもつクラプトンは一階が食堂と父親の書斎、二階が客間と母親が休む寝室、そして二階から張り出した部屋が彼女の寝室として使われることになる。一見するとクラプトンは一階が男性的、二階が女性的な領域として分けられているように思える。しかし、マーガレットの客間はソートンや父親が彼女を交えて工業や労働者の問題に関してしばしば議論をする場所になる。父親は重要な決定をする時、必ず彼女の客間に立ち寄り、召使のディクソンも本来家長であるヘイル氏に相談すべきことをマーガレットの意見を仰ぎにやってくる。また、ヒギンズと交流を始めたマーガレットは彼を二階の客間に通す。これを見たディクソンは「私どもがミルトンに来てから、どうして旦那様とお嬢様がいつも下の階級の人達を二階に上げられるのかその理由が私には分かりません。ヘルストンでは台所より高くには入れなかったのに」(NS 297)と言う。このことからクラプトンの家は子供部屋をもたず、また男女の活動領域が明確に区分されていなかったヘルストンの家の性質を受け継ぐだけでなく、階級を隔てる壁すら稀薄であることが分かる。さらに、クラプトンではマーガレットが書斎を使う頻度も多くなる。娘のベッシーを亡くしたヒギンズを食事に招いた際、ヘイル氏はマーガレットに同席を求め、三者は書斎で長いこと話し合う。また、ミルトンに来た兄フレデリックを駅まで見送った彼女は、捜査でやってきた警部の相手をたった一人書斎でする。現れた高潔な女性を見た警部は彼女の潔白を信じはじめ、後日、死因審問がなくなったことを伝えに再び書斎でマーガレットと会う。キャロリン・ランバートはマーガレットが警部と書斎で対峙するのは、離れていても彼女が父親からの保護を受け取るためであると主張する(40)。しかし、前述のようにヘイル氏は家族を守る力のない男性である。マーガレットが警部の相手を書斎でする間、ヘイル氏は客間におり、彼と彼女の家のなかで求められる役割が交代していることが分かる。

ヒギンズ親子との交流はマーガレットにミルトンの街での生き方を受容させ、

彼女が外で使う空間にも変化をもたらす。親子に興味を覚えたマーガレットは淑女が行う慈善の訪問を申し出るがヒギンズは不審がる。彼女は自分の申し出が相手のプライドを傷つける無作法なものだったことを恥じ入り、それを見たヒギンズは彼女の善良さを感じて改めて訪問を許可する。これをきっかけに両者は階級の隔てを超えた交際をはじめ、マーガレットは彼らとの会話から労働者たちが働く劣悪な環境、ストライキの存在とその意味を理解し、ミルトンの言葉を身につける。レサ・スクールが「言語がアイデンティティと結びつき、他の住人と同じように話すことでマーガレットは彼らに順応し、所属している」(102)と指摘しているように、労働者たちの飾らない態度に親しみを覚えたマーガレットは、街を一人歩きすることに喜びを感じるまでになる。ハーレイストリートで暮らしていた頃、ショウ夫人はマーガレットとイーディスが外出する時には必ず従僕が付き添うべきだと主張していた。このことにマーガレットは「自立心」(NS 71)が制限される窮屈さを覚えていたが、今や活気あるミルトンの空気は「彼女の若い血を元気づけ」、「彼女の足取りは軽くなる」(NS 131)。そして、母親であるヘイル夫人が亡くなった際には、彼女は貧しい女性たちは参列すると主張して葬式に参加する。⁴ ミルトンにおけるマーガレットは牧師の娘ではなく、年間 30 ポンドの借家で堅実に暮らす住人に過ぎない。彼女は一家に新たな女中を雇う余裕がないことを理解しており、ディクソンを手伝って「小さなむさくるしい台所で半日も召使のように立ち働きまわる」(NS 77)ことを厭わない。このように、ミドルクラスの家で階級やジェンダーの行動規範を学んだマーガレットだが、彼女の行動は淑女の枠組みに取まらない。彼女の独立心、行動力は社会的アイデンティティが曖昧になったミルトンでより強まり、彼女の屋内、屋外の世界での活動に反映されていく。ヘルストンの林を自由気ままに歩いていた彼女の素朴な気質は矯正されることなく、変化する社会のなかで生き抜く強みになるのである。

労働者たちのモールバラ紡績工場襲撃はマーガレットが工場主と労働者の世界を繋げるきっかけになる。母親の水敷布団を借りにソートンの家に向かっていたマーガレットは、怒り狂った労働者たちがモールバラ工場に向かって行進する光景に遭遇する。ソートンの家では召使たちは全員屋根裏に逃げ、興奮したソートン夫人と恐怖で気絶寸前のファニー、そして労働者からの挑戦を受けて立ちとするソートンが客間にいる。マーガレットはソートンに同じ人間として

群衆に語り掛けるよう懇願し、彼は玄関の外で荒れ狂った暴徒たちの前に立つ。今にも爆発しそうな労働者たちの様子を見たマーガレットは客間から駆け下り、ソントンの首に腕を回して投石から彼を守る。石を額に受け血を流す彼女を見た群衆は我に返り、その場から逃げ去っていく。二階の客間から降りることができなかったソントン夫人、気絶して寝室に寝かされたファニーに対して、女性の領域から飛び出したマーガレットはミルトンに住むにふさわしい勇気ある女性であることを証明する。

また、彼女の行為はソントンだけでなく、鎮圧にきた兵士たちの刃から労働者たちを救う結果にもなっている。階級や立場からではなく、同じ人間として対話すべきという彼女の主張はやがてソントンとヒギンズの心を動かし、ソントンはマーガレットの助言で個人的に仕事を求めてやってきたヒギンズを雇う。対話を繰り返すうちにヒギンズをはじめとする労働者たちは滞る賃金に理解を示し、ソントンが倒産の危機に直面した際は再興のために喜んで彼のもとで働く申し出る。両者がここまでの信頼で結ばれるには、ソントンが労働者のために工場内に新たに建てた食堂の役割が大きい。労働者自身が運営する食堂にやがてソントンは食事に誘われるようになり、両者は食を交えながら話す。マーガレットが工場主と労働者をもっと対話をするべきであると見抜いていたように、両者に足りなかったのは対話の時間とそれを可能にさせる場所だったのである。

5 おわりに——新しい客間

両親の死後、マーガレットはベル氏と共に生家ヘルストンを訪れ、様変わりした村を目撃する。彼女が知っていた木は切り倒され、住人は転居や死亡、結婚により入れ替わり、「変革」と「改善」(NS 383)を掲げる新しい牧師によって禁酒の動きが進んでいる。牧師館もすっかり変わり、牧師夫婦の子供たちのために元マーガレットの部屋の外に子供部屋が新たに作られようとしている。この変化はけっしてマーガレットが期待していたものではなかったが、翌朝、宿で目覚めた彼女の心境は変化を受け入れるものに変わっている。

「結局、それでいいのだわ」と、彼女は着替えをしながら遊んでいる子供たちの声を聞いて言った。「もし世間がじっとしていたら、それは後退し、腐

敗してしまうでしょう。・・・外を見ると変化に対する悲しい気持ちがわくけれど、周囲の進歩は正しいことで、必要なことなのだわ。」(390-91)

この台詞はこれまで見てきた変化や成長を受け入れ、適応してきたマーガレット自身を象徴するものだろう。永遠だと思われていた牧歌的なヘルストンにも時代の変化が訪れた。しかし、変化を停滞よりも良いものとするマーガレットは故郷の変化、両親の死などつらい経験もまた全て受け入れる。

やがてバル氏も急死し、マーガレットは彼が所有していたミルトンの巨額の資産を譲り受ける。彼女はショウ家の人たちと訪れたスコットランドのクロウマアで海を眺めながら今後について考えた後、⁵ ハーレイストリートの客間で弁護士レナクスと投資、借地契約、土地の価値、法律について話し合う「会議」(MS 422)を開く。翌日、マーガレットはソーントン客間に呼び出し、銀行よりも高い利息を受け取る代わりに彼の事業に投資することを申し出る。このように、物語の冒頭でもっとも女性的な空間として登場したハーレイストリートの客間は、マーガレットによってパブリックとプライベートの境界がなくなった hybrid な空間へと変貌する。マーガレットの投資は、又貸ししなくてはならないところまで追いつめられた彼の工場と隣接した住居の借地契約を更新させるだろう。大家となった彼女は今後も工場や労働者の問題に関わっていくだろう。淑女としての美德を兼ね備えながらも階級やジェンダー規範の「壁」を越境するマーガレットの姿からは、時代や社会の変化とともに客間に収まらず、臨機応変に行動する女性の到来を見ることができるといえる。

注

- 1 エレノア・ゴードンとグウィネス・ネイルも言及するように当時の「ミドルクラス」の定義は容易ではない。彼らによれば、ミドルクラスのアイデンティティーは「経済的、社会的に構成されるだけでなく、文化的に作られた」(14)。一般的にミドルクラスの間は「知的な仕事によって収入を得」、「学問、教育水準、参政権、政治的な力を持つ」(Tange 8)ものとされる。しかし、それだけではなく、彼らには「物理的に完璧な家」(17)が必要だった。タンゲによれば、ミドルクラスの家は「物理的な空間とそれが包括する(住

人の) アイデンティティーの相互作用」が重要であり、「正しくレイアウトされ、注意深く飾り付けられ、最新の注意を払って管理され、入念に掃除され、展示される必要があった」(6)。本論は職業、収入、教養、社会的貢献など、文化的、総合的な面から考慮すると同時に、タンゲが注目する一定の屋内生活と空間使用のルールに則った人間をミドルクラスと捉え、ハーレイストリートの住人もまた(アッパー)ミドルクラスと認識して考察する。

- 2 実際には多くの家庭の手引き書やマニュアル本が出版されたにも関わらず、女性が来客をもてなし、インテリアをコーディネートして居心地の良い屋内空間を作り上げるのは淑女に生まれながらに備わる能力と信じられ、彼女が属する社会的アイデンティティーの証明と考えられた (Tange 37)。
- 3 デイヴィヤ・アズマナサンはハーレイストリートにおけるマーガレットの低い地位の継続は、ミルトンでの彼女の成熟した地位との対比を表していると指摘する (40)。
- 4 当時ミドルクラスの女性は葬式、特に埋葬式には参加しなかった (Davidoff and Hall 408)。
- 5 ウェンディ・パーキンスはショウ夫人、イーデイスと夫レナクス大尉が買い物や乗馬といった「慣習的な娯楽」を楽しむのに対して、海を眺めて内省するマーガレットの行為は「近代化の絶え間ない変化」を指すものと考察している (515)。

引用文献

- Athmanathan, Divya. “‘You might pioneer a little at home’: Hybrid Spaces, Identities and Homes in Elizabeth Gaskell’s North and South.” *Place and Progress in the Works of Elizabeth Gaskell*, edited by Lesa Scholl, Emily Morris and Sarina Gruver Moore, Ashgate, 2015, pp. 37-52.
- Bryden, Inga, and Janet Floyd, editors. *Domestic Space: Reading the Nineteenth Century Interior*. Manchester UP, 1999.
- D’Albertis, Deirdre. *Dissembling Fictions: Elizabeth Gaskell and the Victorian Social Text*. MacMillan, 1997.
- Davidoff, Leonore, and Catherine Hall. *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class, 1780–1850*. U of Chicago P, 1987.
- Flanders, Judith. *Inside the Victorian Home: A Portrait of Domestic Life in Victorian England*. W.W. Norton

- & Company, 2004.
- Gaskell, Elizabeth. *North and South*, edited by Patricia Ingham. Penguin, 2003.
- Gordon, Eleanor, and Gwyneth Nair. *Public Lives: Women, Family, and Society in Victorian Britain*. Yale UP, 2004.
- Lambert, Carolyn. *The Meanings of Home in Elizabeth Gaskell's Fiction*. Victorian Secrets, 2013.
- Langland, Elizabeth. *Nobody's Angels: Middle-Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culture*. Cornell UP, 1995.
- Logan, Thad. *The Victorian Parlour*. Cambridge UP, 2001.
- Massey, Doreen. *For Space*. Sage, 2005.
- Parkins, Wendy. "Women, Mobility and Modernity in Elizabeth Gaskell's *North and South*." *Women's Studies International Forum*, vol. 27, nos. 5-6, 2004, pp. 507-19.
- Piehler, Liana F. *Spatial Dynamics and Female Development in Victorian Art and Novels: Creating a Woman's Space*. Peter Lang, 2004.
- Ruskin, John. *Sesame and Lilies, the Two Paths, and the King of the Golden River*. J M Dent & Sons, 1864.
- Scholl, Lesa, et al., editors. *Place and Progress in the Works of Elizabeth Gaskell*. Ashgate, 2015.
- Spain, Daphne. *Gendered Spaces*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1992.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Manchester UP, 2006.
- Tange, Andrea Kaston. *Architectural Identities: Domesticity, Literature, and the Victorian Middle Class*. U of Toronto P, 2010.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. Faber & Faber, 1993.

(愛知大学助教)

Mobile Heroine, Gender, Class and Regional Boundaries in *North and South*

Marie ISHII

This paper examines the interplay between the spaces and the heroine and other characters of a remarkably mobile narrative, Elizabeth Gaskell's *North and South* (1854). The narrative's juxtaposition of places and spaces depicts the differences of social class, gender, and region. These differences are perceived as physical and psychological walls that divide people. I argue that, wherever she goes, heroine Margaret Hale signifies change and progress. Brought up in her aunt's respectable middle-class home, Margaret is independent and mobile and often exceeds the limitations of gender and class norms. Discovering that her father does not have the power to provide a stable home and family life, she takes over from the patriarch. Moving with her family to the industrial town, Milton, she becomes involved in a new community that includes factory owners and workers. Margaret's social ambiguity, resulting from her father's resignation from the Church, permits her a dynamic use of space both inside and outside the house. She is not limited to domestic work in a drawing room, which is the most feminised space in the middle-class home. As a mediator, rather than a mere observer, Margaret intervenes in the workers' riot. Margaret finally transforms a drawing room into a hybrid space by conducting a business meeting there as the new landowner of the mill of her future husband, Thornton. This paper aims to explore the spatial mediation and complexity of social spaces in the Victorian era through the correlation of spaces and the people that belong to them.

『アダム・ビード』と『ルース』における 悔い改めと執り成しの祈り

村山 晴穂

1 序

George Eliot (1819-80) の叔母の Elizabeth Evans (1776-1849) は、1802 年に Nottingham の巡回裁判で死刑の判決を受けた Mary Voce の為に熱心な執り成しの祈りを捧げ、回心へと導き、メアリは天国を確信して亡くなった。『アダム・ビード』(Adam Bede, 1859) をこの史実に基づく小説と解釈して、本稿は、悔い改めと執り成しの祈りという主題化に向けて論じていく。叔母の経験談に感動して、ジョージ・エリオットは、孤児の Hetty Sorrel という女性を含めた話に脚色して、この最初の長編小説を著したという論点から、本稿では、原罪を負った Adam (旧約聖書・創世記) になぞらえて題名としたこの小説を、死刑囚ヘティの利己心と悔い改め、愛他的な信徒説教者 Dinah Morris の執り成しの祈りを対比させた作品として分析していく。

他方、『ルース』(Ruth, 1853) では、出産した子を前に罪の告白をする Ruth が、Benson 牧師等の支えにより、自他共に執り成しの祈りに支えられ、献身的な生涯を全うする。『ルース』の「結び」では、受難を経て、罪の清めを願い、「衣を小羊の血で洗い、白くした」経験をした者達の天国での様子をベンソン牧師が聖書の黙示録から読み上げる。

本稿は、19 世紀の両作品及び悔い改めたヘティのモデルの史実から、罪を覆う神の愛と兄弟愛 (Philadelphia・黙示録 3 の 12) の本質的意義を考察し、聖書的視点を展望する。

2 エリオットの三つの作品にみる悔い改めと愛他性の主題に関連して

『牧師館物語』(Scenes of Clerical Life, 1857) の三部作の中の『ジャネットの悔悟』(Janet's Repentance) において、酒乱の夫に苦しむジャネットは、精神的カウンセリングをする非国教会の牧師 Tryan により、自ら悔い改めの経験をしていく。愛

他の牧師トリアンは、Milbyの町に来て、人の弱さを思いやるキリストを信じる信仰により、罪を赦され、義とされる生き方を、悔い改めるジャネットに知らせていった(村山2007.24)。トリアンのモデルとなったJohn Edmund Jones牧師の福音説教は、エリオットの父親のRobert Evans(1773-1849)も拝聴していた(Haight 375)。

『アダム・ビード』は、エリオットの叔母であるメソディストの信徒説教者Elizabeth Tomlinson(Elizabeth Evansの旧姓。作品中のDinah Morrisのモデル)が、死刑囚メアリ・ヴォウス(作品中のHetty Sorrelのモデル)を悔い改めに導く実話を土台にしている。

『ロモラ』(Romola, 1863)は、ドミニコ会修道士で宗教改革者となったGirolamo Savonarola(1452-98)が、FirenzeのLorenzo de Medici(1449-92)を悔い改めに導き、フィレンツェの宗教改革を断行していく舞台が背景となっている。サボナ・ローラの生涯を研究し、エリオットは、殉教するサボナ・ローラの死や、家族たちの死に遭遇する若い女性ロモラを主人公にして作品を完成した。悔い改めることのない、自己中心的な若者Teto Melemaは、ロモラから離れ、ロモラは、孤独の中で、社会的弱者の孤児の面倒を見る愛他的な生き方を全うする。

キリスト教的愛他性と自己中心的な罪の描写が色濃く、描写されている上記の作品中、『アダム・ビード』は、死刑囚メアリ・ヴォウスが悔い改め、天国を希求する者へと変えられていった実話からエリオットがヒントを得て、若者たちの生き方を考えさせる作品化を試みた。ヘティは、遊び半分のArthur Donnithorneとの森での密会で、赤ん坊をはらみ、置いている間に赤ん坊が死んでいる、という設定で、エリオットは、ヘティの悲劇を物語っている。エリオットが、作品中、ダイナ・モリスという愛他的な人物像と、ヘティ・ソレルという娘の悲劇と悔い改めとを対比させている視点が、本稿の基本的視点となっている。ヘティの絞首刑の赦免状を持ってかけつけたアーサーは、アダムに詰め寄られるが、アーサーは、ヘティの島流しという減刑を救うことはできなかった。主人公の大工のアダム・ビードは、交際していたヘティから赦しを求められる。アダムは、ヘティ以上に、ヘティを回心に導いたダイナ・モリスに魅かれて、結婚するという筋展開をエリオットは、人道主義的に創作している。

エリオットは、1839年か1840年(20歳頃)、メソディストの叔母エリザバス・

エヴァンズから、若い死刑囚メアリ・ヴォウスが牢獄で回心した実話を感銘深く聞いていた。後年、それを思い起こし、1857年10月22日に執筆を開始し、1859年に、『アダム・ビード』の執筆を完成した。アダムと弟のセスは、創世記に出てくる人物名であるが、彼らの生き方の対話を継続させつつ、最初、アダムが漕かれていたヘティという孤児を回心させるダイナ・モリスの愛他性をエリオットは、強く、打ち出している。アダム、セス、ダイナ・モリス、ヘティ、これら四人の登場人物のモデルとなったのが、エリオットの父親と叔父、叔母、そして叔母たちの執成しの祈りにより、回心へと導かれたメアリ・ヴォウスである。ただし、エリオットの従兄である William Mottram (1832-1913) は、エリオットの親戚と彼女が描く登場人物の関係を描く際に、ヘティの悲劇性とそのモデルであった実在の人物となったメアリ・ヴォウスの悲劇とは異なったものであると断っている (Mottram xiii, 76-79)。

『アダム・ビード』の作品において、主人公のアダム・ビードは、エリオットの父親のロバートがモデルであった。ただしエリオット自身は、アダム・ビードの言動をロバートのように描いてはいないと断っており、メソヂストの説教師ダイナ・モリスとエリザベス・トムリンソンの個性の類似性についても、むしろその差異について強調している (Haight 1954. 503)。説教師ダイナ・モリスは、「聖であって、正しく、かつ善である」(参照口語訳聖書ローマ人への手紙7の12) 神の御心を確信するようになると、私たちが愛し、平和と喜びで魂を満たしてくれる神の愛から、苦痛も、洪水も、いっさいの物も、私たちが「引き離すことができない」と説教し、福音を伝えることに献身している (ローマ人への手紙8の33-39。33節「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなしてくださるのである」本稿題目に係する太字は筆者による強調)、(『アダム・ビード』33。Adam Bede 29)。

『ジャネットの悔悟』、『アダム・ビード』、『ロモラ』は、エリオットの描く愛他的人物と利己的人物の対比を端的に描出しており、特に執り成しの祈りと悔い改めの相互作用が、『アダム・ビード』に写實的に描写されているのは、エリオット自身が、叔母の執り成しの祈りと悔い改めの史実を聞いて、感動した経験をもとに作品化しているからであろう。

3 史実と『アダム・ビード』作品化における、執り成しの祈りと無限の愛と悔い改め

『アダム・ビード』の作中人物ヘティのモデルであるメアリ・ヴォウスの入獄・処刑の記録について、the University of Oxford の Valentine Cunningham 教授（1944。歴史事実と文学作品内容との関連の研究者）は、ノッティンガム中央図書館所蔵の記録を紹介している（後出。Ed. by Carol Martin *Adam Bede* 2008 巻末 487-88, 492）。教授は、メアリ・ヴォウスの史実とエリオットの物語の可変性についても述べている（Introduction xxxviii Ed. by Valentine Cunningham *Adam Bede* 1998）。

24歳のメアリ・ヴォウスは、煉瓦職人の夫に見捨てられ、ノッティンガムの町で、幼い二児を抱え、ヒ素を用い、自殺しようとしていた。その場を離れている間に、子どものエリザベス・ヴォウスは喉が渇いていて、近所の子ども達が、棚上の茶碗に入っていたものを誤って、エリザベスに飲ませ、その中のヒ素により、エリザベスは死んでしまった。1802年3月12日金曜日、4時間近くの審理の末、陪審員の有罪判決により、メアリ・ヴォウスは死刑判決を受けた。翌週の死刑執行迄に、メソヂストの二人の女性、Miss Richards とエリザベス・トムリンソンが、メアリに付き添って、共に熱心な祈りをささげていた。また前からメアリ・ヴォウスの回心のために、メソヂストの John Clarke や Henry Taft が、キリストの生涯と救いの計画を説明し、メアリが悔い改め、罪の告白ができるよう、執り成しの祈りをしていた。ヘンリー・タフトは、以下のように、メアリの回心の事実を記録している。

「死刑執行が言い渡された金曜日の夜、自暴自棄になっていたが、土曜日の朝、メアリ・ヴォウスは、良心が目覚め始め、罪を告白してキリストによる赦しを得ないのであれば、地獄が自分の受けるべき分であると確信するようになった。土曜日の早朝2時、ついに殺害を認めたが、魂に罪過を覚え、神の律法の有罪宣告にたいし、おびえていた。土曜日の午前中、ついに真実の悔い改めをし、神を熱心に求めるようになった。土曜日の午後、自分の罪ゆえの苦悩にたえかね、・・・悪魔がとりついていると考え、結局、地獄に行くことになることを恐れた。悪い関係にあった男の人を赦すことが必要であると判断したが、神がこの魂を解放するまで、それは不可能なことであると感じていた。およそ5時頃、彼女の精神状態ははるかに和らげられ、心からの悔い改めに導かれ、罪過を思い起こし、全て

の罪を告白し、神の憐れみを求め、熱心で悲痛な祈りをささげていた。Miss Unwin と Miss Richards がメアリ・ヴォウスのために神の憐れみを懇願してまもなく、メアリ・ヴォウスは、感謝と喜びに満たされて、こう言った。「主が私のためになされたことは何と！」それについて問われると、「主は、私のすべての罪を赦されました。心の中でそう感じます！」と彼女は答えた。彼女の罪過と苦難の重荷は即座に消え去り、彼女の幸福な魂は、平和と服従に満ち溢れていた。彼女は直ちに感嘆の声をあげた。「私は何と幸福なのでしょう。もしあなたがたが、私と同じように幸福であると感じておられるのならば、私のためにこんなに骨折ってくださるのも不思議ではありません。まさかこんなことがありえるなどとは思っていませんでした。あなたがたは何と幸せな人生を生きておられるのでしょう」。ジョン・クラークとミス・リチャーズ、それにエリザベス・トムリンソンがメアリ・ヴォウスと共に祈ったあと、メアリ・ヴォウスは、より明確に、赦しの確証を感じた。彼女は大いなる慰めをえることができた。そのあと、疑うことがなくなり、死を少しもおそれることがなくなった」(An Account of the Experience and Happy Death of Mary Voce, who was executed on Nottingham Gallows, on Tuesday, March 16, 1802, for the murder of her own child. By Henry Taft) (Ed. by Carol Martin *Adam Bede* 2008 Appendix 2. 487-88)。

処刑前に、メアリ・ヴォウスは、周囲の人たちにたいし、神が罪を告白するのを助けてくださり、神が彼女の罪を赦し、天国に向かおうとしている今、自分は幸せであるという信仰の告白をした。1802年3月16日火曜日の朝、処刑される前、夫の裏切りへの復讐から毒による自殺計画を考えた経緯についてふれたあと、メアリ・ヴォウスは、以下のような告白をしている。「神様がこの私の心からの悔い改めを受け入れてくださるよう望みます。キリストの血のいさおしにより、私の罪は緋のように紅くとも、羊の毛のようになるでしょう。悪徳と悲惨に満ちたこの町で、多くの人が暗闇と死の谷間に座しています。それでも福音は彼らに伝えられています。彼らは目覚めていません。でも私の死が彼らをめざめさせますように。最期に、私を非難した人たちを赦します。死んだ後は、もはや非難しないように望みます。私の悲しい死去を泣き悲しむ愛情深い姉がいるからです。私の言うことはこれだけです」(The Life, Character, Behavior at the Place of Execution and Dying Speech of Mary Voce, who was executed on Nottingham Gallows, on Tuesday, March

16, 1802, For the Wilful Murder of Elizabeth Voce, her own Child. By Mary Voce) (Adam Bede 2008 Appendix 2. 492)。

エリオットは、父ロバートのように国教会福音主義派の出身ではあるが、『アダム・ビード』を執筆するにあたり、メソヂストの教えを徹底的に学び、特にジョン・ウェスレーの伝記 *The Life of John Wesley* (1820 by Robert Southey 1774-1843) を読み、史実を正確に理解していたことで、牢獄での対話が現実のもののように描出されている。『アダム・ビード』において、人々の苦悩をすべて受けて、罪の身代わりとなって、共感共苦する (= 憐れみ深い。compassionate) イエスの、父なる神にささげる執り成しの祈り、「父よ、彼らをおゆるしてください」(ルカ 23 の 34) という祈りを、ダイナ・モリスは、説教し、虚栄心に満ちた若い Bessy Crunage に悔い改めの涙をながさせ、魂の救済のために福音を伝えていく (『アダム・ビード』 31, 32)。この第 2 章「説教」におけるメソヂスト説教者の伝道状況を、エリオットは描写し、第 15 章と第 45 章のクライマックスの執り成しと悔い改めに関わるダイナ・モリスの基本的生き方として提示している。

エリオットの長編小説第 15 章「二つの寝室」において、「迷える小羊」(poor wondering lamb) (『アダム・ビード』 35. *Adam Bede* 2008. 31) のヘティを思いやるダイナ・モリスの動機は、「愛と同情に満ちたお方の臨在」(the presence of a Love and Sympathy) の感得から滲みでていた (『アダム・ビード』 157. *Adam Bede* 2008. 142)。この第 15 章の寝室という舞台で、「慰めや救い」が必要になり、困っている時には、ヘティの面倒を見るというダイナの「約束」は (『アダム・ビード』 159. *Adam Bede* 2008. 145)、第 45 章の牢獄において、ダイナが罪を犯したヘティのために執り成しの祈りをささげ、ヘティが悔い改めるときに「成就」する。すなわち「約束」の寝室と「成就」の牢獄は、執り成しと罪の悔い改めの相互作用において、対応している。

牢獄で、恐怖と苦悩で震えている罪人ヘティに対して、ダイナ・モリスは、「悲しげな、思いこがれる愛」(sad, yearning love) (*Adam Bede* 2008. 401) に溢れており、「神の愛」と「赦しを与える慈悲」(God's love / his pardoning mercy) (*Adam Bede* 2008. 403) に心を開くよう、ヘティに伝える。ダイナのように感じられないヘティの手をとり、無力なヘティが罪を告白し、「生ける神の臨在」(the presence of the living God) (*Adam Bede* 2008. 404) を覚えることができるよう、ダイナは、ヘティ

のために救い主イエスによる罪の赦しを求め、熱心に執り成しの祈りを続ける。「イエス様、この世にいます救い主よ！あなたはすべての悲しみの深さをご存じです。あなたは神のおられぬ真暗闇の中に入れられ、見捨てられたる者たちの叫びをあげられました。主よ、お出でになってあなたの労苦と嘆願の成果をお集めください。最後まで救いの力をお持ちの主よ、あなたの手を伸ばし、この迷える者をお救い下さい。・・・すべての過去を見ておられ、暗闇も昼間の光と感じられる生ける神の存在を彼女に感じさせてください。・・・あなたの無限の愛を信じます。わたしの愛、わたしの嘆願が何になりましょう。それはあなたの愛や嘆願の中では消えてしまいます。わたしは弱いこの腕に彼女を抱き、わたしのか弱い同情で彼女に促すことが出来るだけです。あなたが—あなたが死せる魂に命を吹きかけられると、答えることのない死の眠りからそれは立ち上がるのです」（『アダム・ビード』435-36。Ed. by Carol Martin *Adam Bede* 2008. 404）。ついに告白するヘティのために、ダイナは、慈悲深い神に（to the God of all mercy）（Ed. by Carol Martin *Adam Bede* 408）、共に祈る（*Adam Bede* 1996 引用聖句参照—'Blessed be God, even the Father of our Lord Jesus Christ, the Father of mercies, and the God of all comfort; who comforts us in all our tribulation, that we may be able to comfort those who are in any trouble, with the comfort with which we ourselves are comforted by God.' II Corinthians 1:3, 4 King James Version）。

ヘティは、結婚を考えていたアダムに赦しを乞う。森でヘティと密会していたアーサーは、ヘティの死刑赦免状を持って駆けつける。人道主義作家エリオットは、ヘティの処刑ではなく、オーストラリアへの島流しという筋立と並行して、ヘティの救霊のために執り成しの祈りをしていったダイナ・モリスの愛こそ、アダムの伴侶にふさわしい愛として提示し、家族愛を描出している（『アダム・ビード』519）。

4 『ルース』（1853年）における執り成しの祈りと悔い改めと慈愛

4-1 牧師たちとルースによる執成しの祈り

ルースは、Henry Bellingham との間に生まれた子ども Leonard のために、また自分自身のために、罪の悔い改めと執り成しの祈りをしていくようになるまで、地域社会のある人たちの支えがあった。ルース自身には「人を愛さずにはおれない

性質」(異訳『ルース』(39)があった。膝の上で『天路歷程』を読んで聞かせてくれたトーマスじいさん(48)は、悪魔の誘惑から守られるようにルースに願ひ、道を踏みはずさないように、執り成しの祈りをしていた(50)。ギヤスケルは、ベリンガムとルースの接触という誘惑に気付いた Mrs Mason を通して、「心をこめた警戒と母性的な気づかい」による守りの必要を覚えさせている(53)。ルース自身は、「あなたが犯した罪を悔い改めるように勧めたいのです」というミセス・ベリンガムの置き手紙を読み、祈りはじめていた(91-92)。Thurstan Benson 牧師の姉 Faith から、ルースが罪を犯していると聞いたベンスン牧師は、子への母親の愛情を屈辱する世間の目が、母親の神への信仰をも汚すことが無いようにと願ひ、母親は、子に神を畏れることを教えることで、罪を締め出し、彼女を清めていくという見方を呈示していた(118-19)。のみならず、彼は、彼自身が、聖なる御子の愛の精神で(*Ruth* 99)、ルースに語れるように祈り、またルースの罪の贖いのために執成しの祈りをささげていった。ルースが葛藤をおぼえ、憐れみ深い神の愛にすがり、生涯をまっとうできたのは、ベンスン牧師による、ルースとレナードのために神の助けを求める祈りと保護があったからである。ルースの愛する子レナードの洗礼の時、ルースも母親としての献身の思いを新たにす。洗礼式に、畏れ多い想いで臨んだのは、道を誤った母親として、重い責任を果たせるようにと、全能なる神の力を求めていたからである。子どもの将来を考えると不安な思いがよぎる時に、「神の慈しみ深い心」(God's loving kindness)は、「優しい母親の愛」(tender mother's love)に優ると聞いて、平静を取り戻し、祈りに専念することができた(*Ruth* 148)。

4-2 罪を悔い、執り成し、執り成され、神の慈しみに生き続けるルースの清い生き方を求める選び

Mr Donne、すなわち、昔のヘンリー・ベリンガムが、Bradshaw 家に宿泊したとき、ルースは、今またヘンリーに恋慕し、息子を返したら、無罪放免になるとも考えた。その思いを憐れみ深い神に打ち明け、祈っていると、心に「嵐が御言葉を成し遂げる」という聖句(詩編 148 の 8)が浮かんだ。その時、嵐の時に、彼女の胸にすがりついてくるレナードに、力強い神に信頼し、安堵させた晩の記憶がよみがえってきた。神は既に心中を察していると気がついて、涙を流して、キ

リストの御名によって、み旨を行う力を祈り求めている。「ああ、神さま、助けてください。わたしはとても弱いのです。わたしの神さま！どうかわたくしの岩、わたくしの強い砦（詩編 18 の 2 参照）になってください。なぜなら、わたくしだけでは、まったく無力なのですから。あのお方のお名前をお願いすれば、きつと聞き入れてくださるでしょう。イエス・キリストの御名によって、お願いいたします—どうぞ、あなたの御旨をおこなう力を、お与えください！」（異訳『ルース』「23 章 露見」270-71）。

自律的で他律的で、有用性を重視するブラッドショーは、ルースの息子レナードが私生児とわかると、家庭教師のルースを解雇する。無垢で純粋な息子レナードが母親の過ちを知った時には、自分は死ぬ他ないと思っていた。罪の重荷と神の正義におけるルースの信仰の選びの中で、ギヤスケルは、主の慈しみに応じる悔悟のステップを読者に以下のように披歴している。「だが、死んで苦しみから逃れようとしても、それはできないのだ。彼女ははっと気づき、どんなに自分が苦しい目に遭おうとも罪が清められますように、と祈った。神が試練や苦悩、そして耐え難い痛みを与えて罰せようとも、最後に天国の神の御前に行くことができれば恐れることはないのだ。ああ、苦しみを怖がることは人の常である。苦しみの中、助けを求めて祈っても、神にはその祈りは届かないのだ。彼女を正しく判断した神の揺るぎない正義が彼女の他の祈りを受け入れることがあるだろうか。神の掟を一度でも破れば、神は必ず罰をお与えになる。しかし、もし私たちが罪を悔いて神に頼めば、神は、「主の慈しみはとこしえに絶えることがない」（詩篇 136 の 1）と聖書の中にもあるように、従順な心を持って罰に耐えられるよう、私たちに導いてくださるに違いない」（阿部幸子他訳『ルース』「23 章 絶対、彼に間違いない！」（256-57）。

ギヤスケルは、神がどんなに試練、悲哀、呵責を与えようとも、罪を悔いて、天国で神のみ前に出ることができるのであれば、ひるむことなく、「神の慈しみはとこしえに続く」（‘His mercy endureth for ever’ KJV）ことを覚えるように示唆している（*Ruth* 232 異訳『ルース』281）。ギヤスケルが使用しているのは、欽定訳（King James Version）聖書である。Psalm 136:1 ‘O give thanks unto the LORD; for he is good: for his mercy endureth for ever.’ 「主に感謝せよ、主は恵み深く、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」（口語訳聖書詩篇 136 の 1）。「いつくしみ」

(‘loving-kindness’ NLV 等が使用) は、ヘブライ語旧約聖書原典では、「ヘセッド」(創造主・贖い主を覚える者との契約を忠実に守る創造主の「恵み」、「慈愛」、「慈しみ」という意味) であり、旧約聖書 The Book of Ruth の舞台のモチーフとなっている。イスラエルの民を率いるモーセが、神と人を愛する道徳律である十戒を授かる直前、開示される神の性質にも、「ヘセッド」が以下のように明記されている。「主は彼の前を過ぎて宣べられた。「主、主、あわれみあり (ラフーム ‘compassionate,’ ‘merciful’)、恵みあり (ハヌーン ‘gracious’)、怒ることおそく (‘longsuffering’)、いつくしみ (ヘセッド ‘loving kindness,’ ‘goodness’) と、まこと (‘truth’) との豊かなる神、いつくしみ (ヘセッド) を千代までも施し、悪 (‘iniquity’) と、とが (‘transgression’) と、罪 (‘sin’) とをゆるす者」(口語訳聖書出エジプト記 34 の 6。ヘブライ語・英語訳・太字体等は、筆者の補足)。

経済的補償を与えることで幸福を提供するというミスター・ダンに対し、ルースは、私を守り、助けてくださいと神様にお願いしていたという点で、幸福ではあったけれども、私の過去は罪深く、その汚れが自己嫌悪に至らせたと言い放った。「あのような生活が、神さまの純粋で神聖なご意思にどれほど反しているものか、わたしは知りませんでした」(異訳『ルース』「23 章 露見」294)。ご都合主義の体面を気にするミスター・ダンに対し、彼の誘いに乗って、彼と共に神を畏れない生活を送ることを、息子が知った場合、それは神を畏れない行為であり、墮落した生活であるとルースは吐露する。「私は十分に辱めを受けました。私はあなたを愛していません」と言って、ダンをはねつけた(「24 章 砂場での対決」297-98)。

ベンスン牧師は、自分たちが神の言葉から限らない神の慈悲を教えられている者であるので、難行苦行にも耐えて、父なる神に従順であった救い主の忠実さを、息子レナードに教えるよう、ルースに語りかける(「27 章 真実に徹する覚悟」354-55)。

ルースは居場所を求め、執り成しの祈りを通して子育てをし、罪の赦しを経験しつつ、死に至るまで、愛他的な生き方に変えられていく。「ルースの生涯において神がなしたもうことの意味 (それは彼らの心の中に言葉にならぬまま収まっているのであるが)」(456) を説き明かすベンスン牧師の告別説教で読みあげた聖句は、罪を赦され、清められていったルースを思い起こさせる、罪を贖われた

人たちの天国での状況描写であった。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。それゆえ、彼らは神の玉座の前において、昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。彼らはもはや飢えることもかわくこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない、玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである」(新共同訳聖書黙示録7の14)。

5 結語

ギヤスケルが描くルースにしても、エリオットが描くヘティにしても、弱さと自己中心性からの脱却、ひいては罪の赦しを得られるためには、神との和解をもたらず仲保者キリストの名による祈りが必要であった。ベンソン牧師による祈りと保護が必要であったルース自身が、キリストの御名によって、御心を行いたいと祈っていた。同様に、ヘティ・ソレルには、彼女に付き添う、ダイナ・モリスの同情と罪からの赦しを得させる救い主に祈る執り成しの祈りが必要であった。執り成しの祈りをする者は、ベンソン牧師やダイナ・モリスにとどまらない。エリオットが描く、酒乱の夫に虐げられるジャネットにも、トライアン牧師のカウンセリングと同情と祈りが必要であった(『ジャネットの悔悟』)。ギヤスケルが描く、求婚者 Edward Williams から見捨てられた、事故で半身不随になった Nest の場合もそうである。メソヂストの創始者 John Wesley (1703-91) に出会い、回心し、祈りの生活に入った元船長 David Hughes は、「同情心」をもって、人の罪を贖い、犠牲を払うための執り成しの祈りをする贖い主を、ネストの母親 Eleanor に示した(村山 2015. 262)。彼は、ネストのために執り成しの祈りをささげた母親の祈りと、比較にならないほどの救い主の父なる神の御前での執り成しの祈りとを、比較させている。執り成しの祈りに支えられた、身体障害者のネストは、頭脳に障害のある少女 Mary Williams を大切に、またメアりに寄り添われ、ネスト自身の心が変えられていく(村山 2015. 264-65)。

エリオットもギヤスケルも、聖書が描く、神の愛により、執り成しの祈りがささげられ、悔い改めと罪の赦しを得る物語を読んでいた。彼女たちは、聖書と福音進展の歴史的事実に対し、自らの洞察力と想像力を働かせて、贖い主の福音に

与かる者たちを描出していった。その福音の分かち合いと執り成しの祈りに加わる者を通して、神と隣人との正しい関係に入る生き方を描出しているのが、エリオットの『アダム・ビード』とギヤスケルの『ルース』である。

『アダム・ビード』と『ルース』の文学的描写と神学的視点

	<i>Adam Bede</i> 1859	<i>Ruth</i> 1853
人物	全知の語り手に導かれる特定の登場人物	登場人物達の対話の交差による多旋律
人の位置	ヘティの利己性から離れ、ダイナ・モリスの愛他性に引き寄せられるアダムの選択（ヘティのモデル Mary Voce の悔い改めと贖罪）	死に至る迄忠実であったルースの子への愛と、彼女の献身的生き方を支え、執り成す人たち
神学的含意	ダイナのモデルであるキリストの愛他性にひかれるアダム以降の地上の死すべき人。(新約聖書 I コリント 15 章 22・45 節)。パウロ「あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために(精神的)産みの苦しみをしています」(新改訳聖書ガラテヤ人への手紙 4 章 19 節) ☞ダイナのヘティのための執り成し	「神の慈愛 (goodness) があなたを悔い改めに導く」(口語訳聖書ローマ人への手紙 2 章 4 節) ☞ルースの信仰成長を願う、サースタン・ベンスン牧師たちの地域社会における思いと執り成し。
基督教史的背景	19 世紀のフィラデルフィア教会【共感・兄弟愛・博愛を分かち合い、試練を乗り越え、天の門に至る】(新約聖書黙示録 3 章 7～12 節) From Suffering (イザヤ書・自己保身の弱さと墮落と死) to Infinite Love, Sympathy, Pity, Compassion (神の無限の愛、同情、憐れみ ローマ人への手紙・エレミヤ書)	19 世紀のフィラデルフィア教会【共感・兄弟愛・博愛を分かち合い、試練を乗り越え、天の門に至る】(新約聖書黙示録 3 章 7～12 節) From Innocence (無垢と自己保身の弱さと死) to Mercy, Loving-kindness, Goodness (神の慈悲、慈しみ)

注

本稿は、日本ギヤスケル協会大会（2020年）「シンポジウムーキリスト教で解読する G・エリオットとギヤスケル」において、以下の目的で口頭発表した内容を加筆・修正したものである。「英国 19 世紀写実主義小説の泰斗 George Eliot と Elizabeth Gaskell. その文学をキリスト教の視点から分析するとき見えてくるものは何か。各々の主要作品を題材にして比較する」

引用文献

Eliot, George. *Adam Bede*. Edited with an Introduction and Notes by Valentine Cunningham, Oxford UP, 1998.

Eliot, George. *Adam Bede*. Edited with an Introduction and Notes by Carol A. Martin, Oxford UP, 2008.

Gaskell, Elizabeth. *Ruth*. Edited with an Introduction and Notes by Tim Dolin, Oxford UP, 2011.

Haight, Gordon S. (ed.), *The George Eliot Letters*, II. Yale UP, 1977.

———. “History of Adam Bede. GE Journal, Richmond, 30 November 1858.” *The George Eliot Letters*, II. Yale UP, 1954.

Mottram, William. *The True Story of George Eliot*. Basingstoke, Hampshire, 2002, 1905.

エリオット、ジョージ『アダム・ビード』阿波保喬訳、開文社出版、1979年。

ギヤスケル、エリザベス『ギヤスケル全集 3 ルース』日本ギヤスケル協会監修、巽豊彦訳、大阪教育図書、2001年。

ギヤスケル、エリザベス『ルース』「第 23 章 絶対、彼に間違いない！」阿部幸子・角田米子・宮園衣子・脇山靖恵訳、近代文芸社、2009年。

村山晴穂「ジョージ・エリオットの『アダム・ビード』にみる自己愛、愛他心、及び愛情」『三育学院短期大学紀要』第 37 号、2007 年、16-36 頁。

村山晴穂「「ペン・モーファの泉」における三つの愛の諸相」『没後 150 年記念エリザベス・ギヤスケル中・短編小説研究』日本ギヤスケル協会編、大阪教育図書、2015 年、257-68 頁。

(元三育学院短期大学教授)

The Stories of Repentance and Intercessory Prayers in *Adam Bede* and *Ruth*

Haruho MURAYAMA

Adam Bede (1859) is based upon the recollection of a true story that George Eliot heard from her aunt, Elizabeth Evans. It was about Mary Voce's actual repentance and confession of infanticide to Elizabeth Tomlinson (maiden name of Elizabeth Evans). Eliot developed the plot of journeys of Hetty, who was modeled upon Mary Voce, depicting Hetty's suffering and confession and impressive intercessory prayers by Dinah Morris, a Methodist preacher, modeled upon Elizabeth Tomlinson. The recorded account of the experience and happy death of Mary Voce, who was convinced of forgiveness of her sins and her eternal life in Heaven and was executed, has moved the hearts of many people. Eliot's realistic delineation of respective characters is in parallel with her revelation of idealistic manifestation of such values as Infinite Love, pity and sympathy.

Elizabeth Gaskell's *Ruth* (1853) reveals the crystal of tender mother's love under the social discrimination against the innocent woman with an illegitimate child. Ruth's single-minded affection for her child Leonard is to be sustained by the spiritual supporters such as Pastor Benson. Ruth is able to pray peacefully for herself and her child when she appreciates God's loving kindness beyond her tender love. By the light of her child's purity and innocence, Ruth remembers her error and evil against God's justice and laws bringing immutable retribution. However, praying that she might be purified, Ruth becomes sure of eternal mercy (Chapter 23).

Chapter 23 is the climactic part of *Ruth*. Meanwhile, chapters 15 and 45 where Hetty had a true repentance are the climactic parts of *Adam Bede*. Towards the chapters Eliot created the different ways of living between Dinah and Hetty related to the family of Adam Bede, while Gaskell developed the resonance of spiritual guidance by many others in the community for the regeneration of Ruth.

The Plan of Salvation in *Scenes of Clerical Life* and *Cranford*

Tatsuhiko OHNO

1. Introduction

This study is intended to compare George Eliot's maiden work *Scenes of Clerical Life* (1858) and Elizabeth Gaskell's fourth novel¹ *Cranford* (1853) in terms of their narrators' conscious or unconscious commitment to "The Plan of Salvation," one of the dominant thoughts underlying the Bible.

One of the reasons for choosing the two works to compare their authors' views of Christianity is that the focus of both pieces is placed on the description of the daily lives of ordinary people. Graham Handley observes, "Each scene derives from factual place, and some of the characters from people known to Marian Evans, or known of by her, in her girlhood" (375; Gordon S. Haight 220-21). In her reply to John Blackwood, "the sixth son of the Edinburgh publisher and founder of *Blackwood's Magazine*" (Haight, *Biography* 212-13), dated 11 June 1857, where she "earnestly defends the artistic integrity of her realism" (Haight, *Biography* 234) in "Janet's Repentance," G. Eliot expresses her religious concern with the real life of ordinary people:

[T]he story . . . is a real bit in the religious history of England that happened about eight-and-twenty years ago. . . . My sketches both of churchmen and dissenters, with whom I am almost equally acquainted, are drawn from close observation of them in real life, and not at all from hearsay or from the descriptions of novelists. (*George Eliot Letters*² 2.347-48)

Gaskell's focus on ordinary people in *Cranford* is pointed out by Jenny Uglow: "she draws on memories of her childhood and youth in Knutsford, of its characters, buildings, stories and scandals, and uses them, especially in *Cranford*" (*Gaskell* 23). Her moralistic interest in the

realities of ordinary people is explicit in the narrator's introduction to her story: "the ladies of Cranford are sufficient" for "obtaining clear and correct knowledge of everybody's affairs in the parish; . . . for kindness (somewhat dictatorial) to the poor, and real tender good offices to each other whenever they are in distress" (*Cranford* 1).

In the same letter quoted above, G. Eliot states her policy of art: "I should like to touch every heart among my readers with nothing but loving humour, with tenderness, with belief in goodness" (*GEL* 2. 349). This spirit is the same as Gaskell's for *Cranford*. In her reply to the Oxford art critic John Ruskin, Gaskell emphasizes the saving function of humour in her fiction: "whenever I am ailing or ill, I take 'Cranford' and—I was going to say, *enjoy* it! (but that would not be pretty!) laugh over it afresh!" (*Letters* 747).

Another reason for centring on *Scenes of Clerical Life* and *Cranford* is each author's commendation of her rival's work. From March to April 1857, while going on with "Mr Gilfil's Love-Story," G. Eliot read Gaskell's *Cranford* (*GEL* 2: 310, 319) and *The Life of Charlotte Brontë*, Charlotte Brontë's *The Professor*, and Jane Austen's novels (Haight 225). In a letter to her publisher George Smith dated 4 Aug. 1859, Gaskell expresses her curiosity about the authorship of *Adam Bede* because it will damage the "noble grand book" if its author is the adulterous Miss Evans (*Gaskell Letters*³ 566-67). Gaskell's letter to Harriet Martineau dated 29 Oct. 1859 discloses that she had her "great admiration" for *Scenes of Clerical Life* (*Letters* 583) and considered "Janet's Repentance" as "the finest story yet" (*Letters* 584). In the same letter, she repeats her praise of *Scenes of Clerical Life* and *Adam Bede* by writing, "here am I admiring these books heart & soul" (*Letters* 585).

Gaskell's letter to George Eliot dated 10 Nov. 1859 articulates her sincere esteem for *Scenes of Clerical Life* and her faithful observance of Christ's commandment:

Since I heard, from authority, that you were the author of *Scenes from 'Clerical Life' & 'Adam Bede'*, I have read them again; and I must, once more, tell you how earnestly fully, and humbly I admire them. I never read anything so complete, and beautiful in fiction, in my whole life before. I should not be quite true in my ending, if I did not say before I concluded that I wish you were Mrs Lewes. However that can't be helped, as far as I can see, and one must not judge others. (*Letters* 592; emphasis added)

Honestly expressing her regret about G. Eliot's unchristian marriage, Gaskell refrains from further accusation as it is commanded by Jesus that "Judge not, that ye be not judged" (Matt. 7.1).

In her reply to Gaskell dated 11 Nov. 1859, G. Eliot confesses that she has read *Cranford*:

I was conscious, while the question of my power was still undecided for me, that my feeling towards Life and Art had some affinity with the feeling which had inspired 'Cranford' and the earlier chapters of 'Mary Barton.' That idea was brought the nearer to me, because I had the pleasure of reading *Cranford* for the first time in 1857, when I was writing the 'Scenes of Clerical Life.' (*GEL* 3: 198; emphasis added)

After explaining the bedrock principles of the Plan of Salvation—human beings as God's children, Christ's infinite forgiveness for the repentant, and the eternity of our life—in the next section, we shall examine their reflection in "The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton," "Mr Gilfil's Love-Story," "Janet's Repentance," and *Cranford*⁴ respectively in Section 3, 4, 5, and 6 to argue the narrators' conscious or unconscious affinity with the divine plan. Finally, the conclusive Section 7 summarizes our investigation.⁵

2. God's Plan of Salvation⁶

The purport of the doctrine is God's plan for saving His children, or us human beings, through the redemption of His first son Jesus Christ for our happiness not only in the present world but also in the next. Our existence in the premortal world is hinted at, for instance, in the prophet Jeremiah's quotation from the words of God: "Before I formed thee in the belly I knew thee; and before thou camest forth out of the womb I sanctified thee" (Jer. 1.5). The prophet Job records that human beings were the spirit children of God in the premortal world: "When the morning stars sang together, and all the sons of God shouted for joy?" (Job 38.6-7; emphasis added). Our being God's children is proclaimed by the Lord Himself: "I have made" you (Isa. 46.4).

Human beings who had lived with God as His spirit children in the premortal world were

born into earth to have physical bodies; only through this step can our souls have experiences to grow up in the mortal world in preparation for meeting God again in the postmortal world. Our being of dual construction—i.e. made of flesh and spirit—is confirmed by the Apostle Paul’s testimony that we have the father of our flesh and the father of our spirit: “Furthermore we have had fathers of our flesh which corrected *us*, and we gave *them* reverence: shall we not much rather be in subjection unto the Father of spirits, and live?” (Heb. 12.9; emphasis added). A reference to our dual structure is made in the Apostle James’s testimony that “For as the body without the spirit is dead, so faith without works is dead also” (Jam. 2.26; emphasis added). Death that separates spirits from bodies is a step for the eternal journey including resurrection when spirits reunite with bodies.

The resurrection of all the dead is promised by Jesus: “the hour is coming, in the which all that are in the graves shall hear his voice, / And shall come forth; they that have done good, unto the resurrection of life; and they that have done evil, unto the resurrection of damnation” (John 5.28-29). Its situation is detailed by the Apostle Paul: “In a moment . . . the dead shall be raised incorruptible, and we shall be changed. . . . So when this corruptible shall have put on incorruption, and this mortal shall have put on immortality, then shall be brought to pass the saying that is written, Death is swallowed up in victory” (1 Cor. 15.52-54). Christ’s Second Coming and our resurrection are promised by Himself: “I will not leave you comfortless: I will come to you. Yet a little while, and the world seeth me no more; but ye see me: because I live, ye shall live also” (John 14.18-19; emphasis added).

We can return to our Heavenly Father only through Jesus Christ His son, whom He sent for us to overcome sin and death, as is testified by the Apostles John and Paul: “For God so loved the world, that he gave his only begotten Son, that whosoever believeth in him should not perish, but have everlasting life” (John 3.16) and “Neither is there salvation in any other: for there is none other name under heaven given among men, whereby we must be saved” (Acts 4.12). Stressing the eternity of God’s Plan of Salvation, the author of the book of Psalms writes, “The counsel of the LORD standeth for ever, the thoughts of his heart to all generations” (Ps. 33.11). The plan is made by God according to “the eternal purpose which he purposed in Christ Jesus our Lord” (Eph. 3.11).

3. God's Child in "The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton"

This section argues that even the mediocre Countess Caroline Czerlaski, "who jeopardises Amos's reputation" and his wife "Milly's health" (Uglow, *G. Eliot* 86), is depicted as having the quality of a child of God. However self-centred and thoughtless the "handsome" ("Amos" 40, 41), "fair" ("Amos" 40, 41), and "pretty" ("Amos" 41) lady may be, she is a representative of us average human beings whose moral sense becomes weak or strong according to circumstances.

Her "blemishes" or "moral pimples" ("Amos" 42) are spotlighted not merely by the narrator but also through characters' remarks. For example, the narrator observes, "The Countess was a very objectionable person indeed" ("Amos" 39), and "It is true, the Countess was a little vain, a little ambitious, a little selfish, a little shallow and frivolous, a little given to white lies" ("Amos" 42). Her arrogance is recorded by the narrator: she may be "certainly a handsome woman," but "puts on the grand air a little too powerfully" ("Amos" 38-39).

The self-centredness of the Countess's reason for staying at Shepperton Vicarage is explicit in the following quotation:

[T]o humble herself to her brother, and recognize his wife. . . . seemed quite impossible to her as long as she entertained the hope that he would make the first advances; and in this flattering hope she remained month after month at Shepperton Vicarage, gracefully overlooking the deficiencies of accommodation, and feeling that she was really behaving charmingly. ("Amos" 59)

Drawing the reader's attention to her narcissistic egoism, the narrator writes, "there was one being to whom the Countess was absorbingly devoted, and to whose desires she made everything else subservient—namely, Caroline Czerlaski, née Bridmain" ("Amos" 43). Her kindness towards Milly may show a lack of seriousness as her joke contains a tint of selfish motive: "she even began to embroider a cap for the next baby, which must certainly be a girl, and be named Caroline" ("Amos" 59). The Countess is criticized for her nastiness and stinginess by Nanny the maid: "She's niver giv me a sixpence nor an old rag neither, sin' here she's been. A-lyin' a bed an a-comin' down to breakfast when other folks wants their dinner!"

(“Amos” 62). When “the robust maid-of-all-work” (“Amos” 18) refrains from disclosing her involvement in the Countess’s decision to leave the Vicarage, the aristocrat’s moral weakness is intimated in her concealment of the fact for her self-preservation: “Neither he [Rev Barton] nor Milly suspected that it was Nanny who had cut the knot for them, for the Countess took care to give no sign on that subject” (“Amos” 64). She has barely noticed the utter thoughtlessness of her prolonged stay at the Vicarage until she hears Nanny’s accusation (“Amos” 63).

Despite the frequent references to her moral weakness quoted above, however, almost an equal emphasis is put on her moral strength. For instance, her piety and humility can be detected in “her assiduous church-going” (“Amos” 42) articulated by the 33-year-old (“Amos” 37) “Milly” (“Amos” 54) “parson” (“Amos” 15) Mr Ely: “She goes to Shepperton church every day—drawn there . . . by Mr Barton’s eloquence” (“Amos” 38). Her serious quest for moral integrity is confirmed by the narrator: “[S]he really cared about religious matters, and had an uneasy sense that she was not altogether safe in that quarter. She had serious intentions of becoming *quite* pious—without any reserves” (“Amos” 42). Her dignity is clarified in the passage: “the Countess Czerlaski loved herself far too well to get entangled in an unprofitable vice” (“Amos” 58).

When she begins to think of leaving the Shepperton vicarage, being “weary of waiting for her brother’s overtures which never” comes, a brief allusion to the goodness of her spirit is inserted in her reflection that “forgiveness was a Christian duty” (“Amos” 61). She is sensible enough to notice “her position at the Vicarage in an entirely new light” thanks to Nanny’s insolent but justifiable claim and to see “the necessity of quitting Shepperton without delay” (“Amos” 64). She also utters kind words for sickly Milly: “I shall not let you help me pack, so don’t entertain any unreasonable projects, but lie still” (“Amos” 64).

In terms of God’s Plan of Salvation, her piety, or eagerness to seek righteousness and moral goodness, explored above, demonstrates that the self-seeking and insensible Countess is also a Heavenly Father’s valued child.

4. God’s Mercy in “Mr Gilfil’s Love-Story”

Listening to conscience-stricken Caterina Sarti’s night-long confession that her jealousy prompted her attempt to kill Captain Anthony Wybrow, her beloved fiancé of beautiful Beatrice

Assher, with the dagger, Rev Maynard Gilfil, the eponymous hero who has kept his enduring love for the Italian girl, articulates the following words of comfort:

God saw your whole heart; He knows you would never harm a living thing. He watches over His children, and will not let them do things they would pray with their whole hearts not to do. It was the angry thought of a moment, and He forgives you. (“Gilfil” 185; emphasis added)

Three key elements of God’s Plan of Salvation are expressed in the quotation above. The first is the omniscience of the divine being. The second is the concept that human beings are His children. The third is His mercy and forgiveness for us.

God’s omniscience is testified by King David: “O Lord, thou hast . . . known *me*. Thou knowest my downsitting and mine uprising, thou understandest my thought afar off. Thou . . . art acquainted *with* all my ways. For *there* is not a word in my tongue, *but*, lo, O Lord, thou knowest it altogether” (Ps. 139.1-4). King Solomon declares that “thou, *even* thou only, knowest the hearts of all the children of men” (1 Kings 8.39). The Apostle John asserts that “God . . . knoweth all things” (1 John 3.20). It is Jesus’s instruction that “the very hairs of your head are all numbered” (Matt. 10.30).

There is no lack of references to human beings as “the children of God” in the Scriptures. For instance, the Apostle Paul testifies that “The Spirit itself beareth witness with our spirit, that we are the children of God” (Rom. 8.16). He also declares that “we are the offspring of God” (Acts 17.29). The concept is included in the Apostle John’s testimony as well: “Whosoever is born of God doth not commit sin; for his seed remaineth in him: and he cannot sin, because he is born of God. In this the children of God are manifest” (1 John 3.9-10).⁷

The third key element of the Plan of Redemption—God’s mercy and forgiveness—is one of the crucial messages in the Scriptures. God’s everlasting mercy is repeatedly emphasized in the Old Testament: “O give thanks unto the Lord; for *he is* good: because his mercy *endureth* for ever” (Ps. 118.1; Ps. 136.1; 1 Chron. 16.34; Jer. 33.11). King David attests that “thou, Lord, art good, and ready to forgive; and plenteous in mercy unto all them that call upon thee” (Ps. 86.5). The Apostle John’s testimony is one of the most famous verses in the New Testament that

proclaims God's infinite compassion for his children: "For God so loved the world, that he gave his only begotten Son, that whosoever believeth in him should not perish, but have everlasting life" (John 3.16).

There are a few more illustrations of the narrator's conscious or unconscious commitment to the Plan of Salvation in Gilfil's words of consolation to self-accusing and repentant Caterina in the old coachman Daniel Knott's house. For example, his utterance "we have all our secret sins; and if we knew ourselves, we should not judge each other harshly" ("Gilfil" 186; emphasis added) signifies one of the essential concepts of the divine doctrine—God's mercy. Rev Gilfil's insistence that we have all our secret sins derives from such scriptural verses as these: "For *there is* not a just man upon earth, that doeth good, and sinneth not" (Eccles. 7.20), "all have sinned, and come short of the glory of God" (Rom. 3.23), and "If we say that we have no sin, we deceive ourselves, and the truth is not in us" (1 John 1.8). The curate's claim that, if we knew ourselves, we should not judge each other harshly, comes from Jesus's teaching in the Beatitudes: "Judge not, that ye be not judged. For with what judgment ye judge, ye shall be judged" (Matt. 7.1-2; Luke 6.37). This Christian precept is echoed in the words of Jehoshaphat the king of Judah to the judges: "Take heed what ye do: for ye judge not for man, but for the LORD, who *is* with you in the judgment" (2 Chron. 19.6). There is no perfect human being on the earth; therefore, Caterina need not accuse herself too sharply since it is natural that she commits errors; we should not judge our neighbours because it is highly likely that every one of us makes the same error—such assertion of Gilfil's evinces not merely his kindheartedness but also Heavenly Father's mercifulness.

The biblical concept of the frailty of the human soul⁸ is found in Gilfil's words of consolation to remorseful Caterina: "Yes, Tina, many are just as wicked. I often have very wicked feelings, and am tempted to do wrong things. . . . Your sorrow and suffering had taken such hold of you, you hardly knew what you did" ("Gilfil" 185; emphasis added). The following citation of Gilfil's consolatory utterance to Caterina taken from the same scene spotlights the weakness of human souls as well as the fairness of God's observation:

"[W]e mean to do wicked things that we never could do, just as we mean to do good or clever things that we never could do. Our thoughts are often worse than we are, just as

they are often better than we are. And God sees us as we are altogether, not in separate feelings or actions, as our fellow-men see us.” (“Gilfil” 185)

Gilfil’s purport is that, although we “are always doing each other injustice, and thinking better or worse of each other than we deserve,” God sees “each other’s whole nature,” so knows that Caterina “could not have committed that crime” of stabbing Anthony, the object of her passion, to death (“Gilfil” 185). Gilfil’s “answering words of comfort” to Caterina’s “broken confessions” (“Gilfil” 186) closes with his trust in God: “God has kept you in life in spite of all this sorrow; it will be sinful not to try and make the best of His gift” (“Gilfil” 187).

Finally, there is a biblical message prevalent in this three-page scene of Caterina’s confession of sin and Gilfil’s testimony to divine mercy: the repentant confessor will undoubtedly be forgiven by Christ. It is promised by the Apostles: “If we confess our sins, he is faithful and just to forgive us our sins, and to cleanse us from all unrighteousness” (1 John 1.9) and “Jesus will forgive all sinners who repent except those who blaspheme against the Holy Ghost” (Mark 3.21). Despite her repeated articulation of repentance and self-reproach—“it is I who have been more wicked than anyone; it is I who have been wrong all through”—she is not the only person to be blamed for in her mad passion for Anthony, as is elucidated by Gilfil: “the fault has not all been yours; he was wrong; he gave you provocation. And wrong makes wrong. When people use us ill, we can hardly help having ill feeling towards them. But that second wrong is more excusable” (“Gilfil” 186). Gilfil’s explanation implies that Caterina’s guilt rests less with her attempt to kill Anthony than with her jealousy—a sign of infatuation.

5. Eternal Life in “Janet’s Repentance”

G. Eliot’s belief in “the eternity of life” is recognized by M. Joan Chard: “Awareness of the continuity of life, in which the present can never be completely divorced from the past and the future, is expressed in the novels” (110). Chard’s assertion can be applied to “Janet’s Repentance” as well, and this section examines this novella in terms of the scriptural doctrine.

The scene where Janet articulates her painful misery to her mother incorporates Mrs Raynor’s faith in eternal life and God’s love for His children, the two crucial elements of the Plan of Salvation.

“You are cruel, like the rest; every one is cruel in this world. Nothing but blame—blame—blame; never any pity. God is cruel to have sent me into the world to bear all this misery.”

“Janet, Janet, don’t say so. It is not for us to judge; we must submit; we must be thankful for the gift of life.”

“Thankful for life! Why should I be thankful? God has made me with a heart to feel, and He has sent me nothing but misery. How could I help it? How could I know what would come? Why didn’t you tell me, mother?—why did you let me marry? You knew what brutes men could be; and there’s no help for me—no hope. I can’t kill myself; I’ve tried; but I can’t leave this world and go to another. There may be no pity for me there, as there is none here.”

“Janet, my child, there is pity. Have I ever done anything but love you? And there is pity in God. Hasn’t He put pity into your heart for many a poor sufferer? Where did it come from, if not from Him?” (“Janet” 281-82; emphasis added)

Hopeless Janet’s complaints—“God is cruel to have sent me into the world.” “How could I know what would come?,” “I can’t leave this world and go to another.,” and “There may be no pity for me there, as there is none here”—betoken her belief in the postmortal world.

Mrs Raynor’s confirmation that pity comes from God is closely linked to one of the fundamental concepts of the Plan of Salvation—Christ’s redemption of humankind (John 3.16). Her emphasis on the importance of submission to Heavenly Father—“It is not for us to judge; we must submit; we must be thankful for the gift of life”—is an echo of Paul the Apostle’s encouragement such as “we know that all things work together for good to them that love God, to them who are the called according to *his* purpose” (Rom. 8.28; also 1 Cor. 10.13, Rom. 5.3-4). Summarizing the meaning of patience for the author, Chard observes that, for G. Eliot, who is always “tolerant of human frailty and imperfection,” “the real heroes, of God’s making,” are those who “know one or two of those deep spiritual truths which are only to be won by long wrestling with their own sins and their own sorrows” (116).

In the scene where the sleeping lawyer Robert Dempster opens “his eyes full on Janet” his

wife on the verge of his death, the narrator articulates his belief in the next world: “It was almost like meeting him again on the resurrection morning, after the night of the grave” (“Janet” 328; emphasis added). The Bible clarifies the resurrection of all human beings in the next life: “For since by man came death, by man came also the resurrection of the dead. / For as in Adam all die, even so in Christ shall all be made alive” (1 Cor. 15.21-22; emphasis added).

In the final dialogue between the dying Rev. Edgar Tryan and nursing Janet, hinted at is their mutual recognition of meeting in the next world:

“You have a sure trust in God . . . I shall not look for you in vain at the last.”

“No . . . no . . . I shall be there. . . . God will not forsake me.” (“Janet” 348; emphasis added)

Tryan’s meaning is his hope that he will surely meet her in the last place where human beings go, i.e. heaven, or the celestial kingdom depicted as “one glory of the sun” (1 Cor. 15.41). Janet’s reply implies her conviction that he will certainly do. Their belief is sealed by “a sacred kiss of promise” (“Janet” 348). During his mourning procession, Janet feels the existence of the postmortal world close at her hand: “She could not feel that he was quite gone from her; the unseen world lay so very near her” (“Janet” 349; emphasis added). The unseen world is a place where they can meet again.

6. Goodness of the Spirit in *Cranford*

This section highlights the fundamental goodness of the human spirit depicted in a heart-warming episode in *Cranford*. Our spirits may have been tainted by sin since the transgression of the first parents of the earth Adam and Eve—“Wherefore, as by one man sin entered into the world, and death by sin; and so death passed upon all men, for that all have sinned” (Rom.5.12)—and can gain a chance to be good through the atonement of Jesus Christ (1 Cor. 15.22). At the same time, notwithstanding, our spirits were good in the premortal world where we lived with God as His spirit children—“Where wast thou when I laid the foundations of the earth? . . . When the morning stars sang together, and all the sons of God shouted for joy?” (Job 38.4, 7).

The narrator Mary Smith's introduction to the Cranfordians' kind *esprit de corps*, or "a feeling of pride and mutual loyalty uniting the members of a group" ("esprit de corps" *COD*), demonstrates the goodness of their spirits.

We none of us spoke of money, because that subject savoured of commerce and trade, and though some might be poor, we were all aristocratic. The Cranfordians had that kindly *esprit de corps* which made them overlook all deficiencies in success when some among them tried to conceal their poverty. (*CD 7*)

"A few of the gentlefolks of Cranford" are too poor to make "both ends meet"; nonetheless, their dignity is noble enough to conceal "their smart under a smiling face" (*CD 7*). Thus they call themselves "aristocratic." In addition, they are so considerate of others as to "overlook all deficiencies" when some of them try "to conceal their poverty."

Mrs Forrester's small party (*CD 7*) is filled with excellent instances of the goodness of the human spirit. When "the little maiden" disturbs the guest ladies on the sofa "by a request that she might get the tea-tray out from underneath," everyone (a) takes "this novel proceeding as the most natural thing in the world" to avoid causing their hostess embarrassment although they may feel that such action is impolite and ungraceful. Besides, they (b) continue their talk as if to disregard their hostess's poverty for which she can employ only "the one little charity-school maiden." In addition, although they know that the maid's "short ruddy arms" are too weak "to carry the tray upstairs" without her mistress's confidential assistance, they (c) pretend to be unaware of her involvement in the service to consider her pride of sitting "in state, pretending not to know what cakes were sent up." The narrator concludes this short scene of Mrs Forrester's tea party by claiming, "she knew, and we knew, and she knew that we knew, and we knew that she knew that we knew, she had been busy all the morning making tea-bread and sponge-cakes." The "ladies of Cranford seem to think it necessary to pretend to be something other than they are, to appear richer and more genteel" (Emma Karin Bandin 34); still, there is the sign of morality behind their pretence and silence: "This 'elegance'—disregarding the reality of poverty to save their neighbours' and their own faces—is . . . tinged with morality" (Julia Clarke 43). The Plan of Salvation regards this morality in all instances of unspoken

thoughtfulness as the echo of the fundamental goodness of the Cranfordians' spirits.

7. Conclusion

God's Plan of Salvation is the bedrock doctrine underlying the Scriptures which consists of the beliefs in human beings as His children, the fundamental goodness of their spirits, Christ's redemption of humankind, His mercy for the penitent, the eternity of life, the dual constitution of a human being, and the existence of evil spirits or Satan, for instance. The investigation into *Scenes of Clerical Life* and *Cranford* from this Christian perspective discloses the conscious or unconscious commitment of the narrators of the four stories to this divine plan despite the difference in denomination between G. Eliot's Religion of Humanity and Elizabeth Gaskell's Unitarianism.

G. Eliot acknowledges her commitment to the humanistic religion, or "the true religion of neighbourliness" (Q. D. Leavis 17) which trusts in "remedial influences of pure, natural human relations" (*GEL* 3: 382), not only "with her deep sympathy with the inmost emotions of humanity" (*GEL* 6: 387) but also through her characters like Milly Barton, Rev Maynard Gilfil, and Rev Edgar Tryan. Gaskell articulates her Unitarian belief in her letter to her daughter Marianne dated May-June 1854 that "however divine a being he [Jesus] was *not* God" (*Letters* 860). Also, her Unitarianism has long been critics' concern as is shown in "a central force in [her] life" (Uglow, *Gaskell* 5), her "native Unitarian tolerance" (Valentine Cunningham 131), and "the Unitarian liberalism of Mrs Gaskell's theology" (Cunningham 140).

Notwithstanding, as their narrators' drawings of characters' actions bring to light, there is no severe distinction between the two authors' scriptural views of life. For instance, concerning the *raison d'être* of Jesus Christ, "Eliot . . . could never entirely dissociate herself from Christ, the sharer in human suffering, and the supreme lover of the world. The concept of the suffering God of love . . . is one of several legacies of biblical thought to find its way into her fiction" (Chard 109). Neither could Gaskell when she described her characters' genuine faith in Christ: "I longed and yearned for the second coming of Christ, of which Nelly had told me" ("The Heart of John Middleton" 156) and "Henceforward, you must love like Christ, without thought of self, or wish for return" ("The Well of Pen-Morfa" 138). As for the solemn effect of the confession of sin, "confession to a loving human being leads to spiritual rebirth" throughout G.

Eliot's novels (Chard 117), and her conviction is that "The tale of the Divine Pity was never yet believed from lips that were not felt to be moved by human pity" ("Janet" 300). Similarly, confession leads sinners to meet human and then divine pardon in Gaskell's works as in the case of Esther in *Mary Barton* (189) and the eponymous heroine of "Lizzie Leigh" (30-31). As G. Eliot is critical of "dogmatic perversions" ("Dr Cumming" 68), so is Gaskell, who overlooks "sectarian distinction altogether" as she is "less interested in her Dissenters as Dissenters than as Christian" (Cunningham 140).

In conclusion, this study of the two authors' depictions of commonplace people in *Scenes of Clerical Life* and *Cranford* in terms of God's Plan of Salvation sheds light on their similarity in their belief in the fundamental biblical teachings as well as on the truth of this divine doctrine as a means to elucidate the meanings of our daily life.

Notes

This paper is based on the presentation made at the 32nd Annual Conference of the Gaskell Society of Japan held online on 10 October 2020.

1. Gaskell's novels published before *Cranford* are *Mary Barton* (1848), *The Moorland Cottage* (1850), and *Ruth* (1853) (Tatsuhiko Ohno, "Textual Criticism" 43).
2. Hereafter abbreviated as *GEL*.
3. Hereafter abbreviated as *Letters*.
4. Each title shall be abbreviated as "Amos," "Gilfil," "Janet's," and *CD* respectively hereafter, and page references to each work shall be inserted in the text together with the abbreviation.
5. The significance of the religious approach to both novels has been acclaimed by some critics who stress the Bible's influence on Victorian things (Chard 2, George P. Landow 3, and Denis Walder 4).
6. The explanation of the divine plan is taken from Section 1 of my article "The Plan of Salvation and the Religion of Humanity in 'Janet's Repentance.'"
7. Other references are found in such verses as Matt. 5.9, Matt. 5.44-45, and Gen. 1.27.
8. The Apostle Paul testifies that our frailty is for the manifestation of Christ's power (2 Cor. 12.9).
9. This section is an abridged edition of Section 4 of my article above.

Works Cited

- Bandin, Emma Karin. "Domestic Performance and Comedy in *Cranford* and *Wives and Daughters*" *The Gaskell Journal*, vol. 24, 2010, pp. 30-46.
- Chapple, J. A. V., and Arthur Pollard. *The Letters of Mrs Gaskell*. Mandolin, 1997.
- Chard, M. Joan. *Victorian Pilgrimage: Sacred-Secular Dualism in the Novels of Charlotte Brontë, Elizabeth Gaskell, and George Eliot*. Peter Lang, 2019.
- Clarke, Julia. "'A Regular Bewty!': Women Remaking and Remade in Elizabeth Gaskell's *Cranford*." *The Gaskell Journal*, vol. 33, 2019, pp. 37-50.
- Cunningham, Valentine. *Everywhere Spoken Against: Dissent in the Victorian Novel*. Clarendon, 1977.
- Eliot, George. *Scenes of Clerical Life*. Penguin, 1998.
- . "Evangelical Teaching: Dr Cumming." *Selected Essays, Poems and Other Writings*. Edited by A. S. Byatt and Nicholas Warren, Penguin, 1990, pp. 38-68.
- "esprit de corps." *Concise Oxford English Dictionary*. CD-ROM, 2011.
- Gaskell, Elizabeth. *Cranford*. Ed. Patricia Ingham. Penguin, 2005.
- . "The Heart of John Middleton." *The Moorland Cottage and Other Stories*. Oxford UP, 1995, pp. 145-65.
- . "Lizzie Leigh." *Cousin Phillis and Other Stories*. Oxford, 2010, pp. 3-31.
- . *Mary Barton: A Tale of Manchester Life*. Oxford UP, 1998.
- . *Ruth*. Oxford UP, 1998.
- . "The Well of Pen-Morfa." *The Moorland Cottage and Other Stories*. Oxford UP, 1995, pp. 123-43.
- Haight, Gordon S., editor. *The George Eliot Letters*. Yale UP, 1954-78. 9 vols.
- . *George Eliot: A Biography*. Penguin, 1992.
- Handley, Graham. "Scenes of Clerical Life." Rignall, pp. 373-79.
- Landow, George P. *Victorian Types, Victorian Shadow: Biblical Typology in Victorian Literature, Art and Thought*. RKP, 1980.
- Leavis, Q. D. "Introduction." *Silas Marner*. Penguin, 1967. pp. 7-43.
- Ohno, Tatsuhiro. "The Plan of Salvation and the Religion of Humanity in 'Janet Repentance.'" *Bulletin of the Graduate School of Humanities and Sociology: Rissho University*, vol. 37, 2021. pp. 15-42.
- . "The Plan of Salvation in 'The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton.'" *Kumamoto Studies in English Language and Literature*, vol. 63/64, 2022, pp. 97-117.

- . “Textual Criticism of Elizabeth Gaskell’s Thirty-Six Works.” *Kumamoto Studies in English Language and Literature*, vol. 46, 2003, pp. 19-46.
- . *Literature as Theology: The Parable of the Prodigal Son in the Fiction of Elizabeth Gaskell*. Sairyusha, 2020.
- Rignall, John, editor. *Oxford Reader’s Companion to George Eliot*. Oxford UP, 2001.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. Faber and Faber, 1999.
- . *George Eliot*. Virago, 1996.
- Walder, Denis. *Dickens and Religion*. George Allen & Unwin, 1981.

(立正大学教授)

法廷内から法廷外への戦いの意味 ——『メアリ・バートン』のメアリと 『悪夢の一夜』のエリノアを中心に——

矢野 奈々

1 はじめに

文学の最高峰と呼ばれるものには、重要な箇所が裁判のシーンとなっている作品が多数ある。「作家は社会の歪みが一番投影されている裁判を通し、社会の矛盾や不平等に真正面から光を当て、社会のどこが間違っているのかを告発した」¹とされている。例えば、ゲーテの『ファウスト』(Faust, 1806-31)はヨーロッパで最初に死刑廃止を訴えた文学であり、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』(The Brothers Karamazov, 1880)は、話の最後の5分の1は裁判の議事録となっていて、父親殺しの裁判が焦点となる。ギヤスケルと週刊誌『ハウスホルド・ワーズ』(Household Words)を通して接点のあったディケンズは、彼自身が若い頃に法律事務所に勤め、法廷の速記者の仕事をしていたこともあり、作品中に裁判場面の描写が多い。特に『オリヴァー・トゥイスト』(Oliver Twist, 1837-39)の主人公オリヴァーが大人と同じ形式で裁判にかけられる場面があり、この作品をきっかけに当時のイギリスの子供への待遇があらゆるところで見直され、長い時間をかけて年少者を刑事裁判の対象の例外とする、いわゆる「少年法」(Children Act, 1908)が定められるまでに至ったとされている。²

ギヤスケルの作品においても、たびたび裁判場面の描写を見ることができる。『魔女ロイス』(Lois the Witch, 1859)では、ギヤスケルは冤罪を生み出す魔女裁判への批判を行い、「曲がった枝」(“The crooked Branch,” 1859)では、息子の犯した罪を証言する老夫婦に対する法廷での残酷な扱いを描き、行き過ぎた尋問を疑問視する。³ 社会小説家であるギヤスケルの社会に対する矛盾や不公平のメッセージは、そうした裁判場面を通して伝わってくるのである。

本稿では、裁判場面を取り扱った作品の中から、『メアリ・バートン』(Mary Barton, 1848)と『悪夢の一夜』(A Dark Night's Work, 1863)を主に取り上げ、ヒロ

インの法廷内での戦いから法廷外の戦いへと変化していったその意味について考察していく。

2 「公共の女性」として証言する女性たち

はじめに、当時の女性と法曹の職業に関するデータに触れたい。10年ごとに実施されてきたイギリスの国勢調査によると、1871年で法曹関係の職業従事者は男性37,276名に対し、女性は51名だけで、この時点でもまだ女性の弁護士や裁判官は存在していない。この51名という数字は弁護士事務所勤めているか、下級の事務弁護士業務を下請けしている数を表す。つまり、法曹関係の仕事は『悪夢の一夜』が出版されて数年経った時点でも、女性が非常に少ない職業であったことが分かる。このような状況で、女性の証人はLaura Struveの言葉を借りれば「公共の女性(Public Woman)」(10)として目立つ存在だった。

女性の証人が、ギャスケルの小説や他の同年代の小説ではどのように描かれているのか二つの例を見ていきたい。まず『メアリ・バートン』において、メアリがジェムの冤罪を晴らすためにアリバイを立証しようと証言台に立つ第32章の場面がある。メアリが聴衆の前に現れた際、「単なる肉体的な美しさ、外見の美しさを期待していた多くの者は失望した。」(304)と記述されている。法廷と演劇の舞台の類似性が多く書かれているように、注目される場に女性証人が立つと、女性の外見に関心が高まり、傍聴者たちは役者を眺めるような眼差しを証人へ向ける。このような状況下で、メアリは死んだように青白い顔で極度に緊張しながらも、証人尋問に望む。

彼女の心の秘密をそんなにも軽々しく質問する人物は一体誰なのか？普通女性が顔を赤らめ涙を浮かべて、何度もためらいながらただ一人の耳元にささやくことを、そこに集まった群衆を前にして答えるようにと、メアリにあえて求める人物とは一体誰なのか？一瞬、メアリは憤りでまゆをひそめ、その無礼な法廷弁護士の目をじっと見据えた。しかしその時、向こうで顔から両手が離れるのを見た。激しい愛と苦悩の表情——彼女の答えを認めたくない恐怖の表情をあらわにした顔を。突然彼女は決心した。現在がすべてだった。前途を閉ざされた広漠たる未来は、考えただけでも気が狂いそうだった。し

かし、今、自らの過ち、愛さえも告白することができるのだ。最愛の人が人々に嫌悪されてこのように立っている時、女性としての自分と告白する自分との間には恥など存在しないだろう。(ギヤスケル『メアリ』304-5)⁴

メアリは判決に直接左右する発言をするのではなく、法廷弁護士からハリー・カーソンとジェイムズ・ウィルソンのどちらに好意を抱いていたのかという私的な質問に対して答えることを要求され、法廷がメロドラマと化す。傍聴人がメアリの証言内容を期待していないのと同様に、弁護士も判決に関連のある証言を得ることに期待はしていない。通常であれば、ただ一人の耳元にささやく私的な内容を、弁護士は群衆の前でメアリに答えさせようとし、単に傍聴人の関心を引こうとするだけの無礼な弁護士の態度が目立つ。女性が証言台に立つだけでも珍しいことであった時代に、それに加えて非常に私的な質問を受けることは、当時としてはセンセーショナルな出来事として捉えることができる。⁵さらに、このような状況において、メアリはジェムへの愛を告白し、真実を語る。しかしながら、彼女の証言は「被告への同情を呼び起こしたかもしれないが、それでも彼が罪を犯したのではないかという推測を強めたに過ぎなかった。」(305)とあるように、恥を忍んで語ったメアリの告白に判決が有利になるような効力はなかったと言える。メアリの証言は法廷をメロドラマに変え、傍聴人に関心を持たせるだけであった。

結局のところ、ジェムの無実を証明する鍵となる人物は男性のウィル・ウィルソンで、彼は尋問で明快で適切な答えをする。

確証となるあらゆる状況からウィルの証言は明白であった。彼は外国に向かう航海から奇妙な方法で呼び戻されたこと、水先案内船が風に逆らってやっとのことで帰路に着いた時に彼が感じた恐ろしい不安を手短かに説明した。陪審員たちは、三十分前に決まりかけていた意見が、とても不愉快な当惑する形でぐらつき、掻き乱されるのを感じた。(ギヤスケル『メアリ』309)

この後、裁判の決まりに従い、法廷弁護士から反対尋問をウィルは受けるが、手短かに返答を続け、彼の話したことを証明する水先案内人のオブライエンも入廷して証言し、ジェムの無罪が確定する。ウィルはメアリのように判決に直接関係

のない尋問を受けることなく、自身の証言も不要な質問で邪魔されることなくできている。メアリはウィルのように判決に関わりのある証言ができずに、不平等な扱いを受け、群衆の見世物になり、女性であるが故に彼女は証言台に立っても、残念ながら判決を揺るがす直接的な力を発揮することは何もできなかった。法廷における男女の扱いの違いが顕著に表れているのである。

女性が証言台に立つ場面を同年代の作家はどのようにして描いているのであろうか。同じヴィクトリア朝の女流作家でもあり、ギヤスケルの影響を受け、彼女の作品を評価していたジョージ・エリオットの作品である『急進主義者フィーリクス・ホルト』(*Felix Holt, the Radical*, 1866) の法廷場面を次に見てみたい。

『急進主義者フィーリクス・ホルト』のヒロインであるエスタは、メアリがハリーとジェムという対照的な二人の男性の間で心が揺れ動くのと同じく、労働者階級のフィーリクスと貴族階級で莫大な財産を持つハロルドの間で心が揺れる。さらに、誠実でありながら濡れ衣を着せられたフィーリクスを弁護するために証言台に立ち、やがてエスタはフィーリクスと結婚するプロットとなっている。つまり、愛する男性のために、ヒロインが証言台に立ち、その後、自分が助けようとした男性と結婚をして幸せな家庭を築きハッピーエンドとなる話の展開が『メアリ・バートン』と全く同じである。

エスタが聴衆の前に立った時、ハロルドは「エスタの美しい容姿に誇らしい喜びを覚え、さらに法廷中が感嘆するのを見て嬉しさが込み上げた。」(529)と感じている。『メアリ・バートン』と同じように、法廷内での人々の関心は女性の外観に向けられている。しかしエスタはメアリのように公的な場で私的な質問をされることなく、判決に関わるフィーリクスの行動についての証言をする。暴動の可能性を考えて、フィーリクスがしばらく彼女の家において、その後、彼が家を出て行った事実をエスタは話す。そして、以下の引用のようにフィーリクスが罪を犯すような人間とは程遠い立派な人間であり、彼に有利となる証言も明確に行っている。

「やむを得ない事情がないかぎり、フィーリクスさんが暴動に加わって誰かを傷つけたなんて、絶対に考えられません。あの方の品性は高潔そのものです。本当にお心の優しい方です。フィーリクスさんの意図されることはどれ一つ

を取っても、勇気ある立派なものです」(529)

また、聴衆の前での証言を終えたエスタの様子をエリオットは次のように描写する。

聴衆の中でもエスタのことを最も熟知する三人の男たちは——父親とフィーリクスさえも——称賛と驚きの念で身体が震えるほど感動したのだった。今まで美しいけれど実用には向かぬ玩具か装身具のような感のあった、華やかで繊細な美しさを湛えたエスタだったが、その彼女の心の琴線を何かが掻き立て、涙を誘うほどの音楽を奏でたのである。(529-30)

当時のヴィクトリア朝の中流階級以上の女性は一日に何度も衣服を着替え、自宅に人々を招いてもてなすなど、「私的領域」である家庭の中で大半の時間を過ごしていた。エスタも「実用」的な仕事をするのではなく、当時の中流階級の女性のように場を和ませる、言わば男性にとっての「装身具」のような存在であったが、そのような彼女が公の場に立ち、ただ美しいだけではない「実用」への一步を踏み出すことになる。つまり、傍聴人が期待する外観面だけに留まらず、彼女は人々の内面を動かす証言をしたことが分かる。エスタは証言が終わった後、「ひどくうち震えいかにも具合悪そうだった」(530)ので、法廷を引き上げてはどうかとハロルドに懇願されるが、彼女は判決を自分で聞くことを望み、法廷内に留まる。エスタは全力を尽くしたが、彼女の証言は特に判決を左右することなく、判事からフィーリクスに対して「殺人罪」による「4年の禁固」という判決が下されることになる。

エスタはメアリの場合とは異なり、事件に直接関係のない質問をされ、法廷内で見世物ようにはなっていない。彼女自身の証言がしっかりとできている点で、メアリと比べると女性証人の扱われ方に少しの進歩が見られる。しかし、結果的には判決を揺るがすことはできなかったのも、証言に効力がなかった点ではメアリと変わりはない。このように、証言台に立ったメアリとエスタの行為はともにセンセーショナルであったが、判決に対して二人とも直接的な力を法廷内で持つことはできていない。そして二人共に、証言台に立った後に体調を悪くし、メア

りに関してはしばらくの間、生死の境をさまようほど寝込んでしまう。これは公の場に立って証言することが当時の女性にとって不慣れなことであり、疲労や体調不良を催すほど極度の緊張とストレスがかかっていたことを表している。体を張って、愛する者のために証言台に立った二人であったが、哀れにも判決に結び付かない女性としての力の弱さが男性中心の法廷という公の場で露呈されている。

3 真実は法廷の外で語られる——『メアリ・バートン』

メアリもエスタも法廷内で真実を語り、メアリにおいては非常に私的な内容を公の場で恥をしのいで語ったが、真実が語られてもそれが判決に直結しない不平等な状況である。このように法廷内で真実が語られ、それに基づいて判決が下されるといった本来あるべき法廷内での機能がなされていない状況が他の場面で詳細に確認することができる。それは、第35章「我らの罪を赦したまえ」と、第37章「殺人の詳細」という二つの章で、法廷内で語られなかった真犯人の正体が、法廷を出た場所、厳密に言うところ、バートン氏の家とカースン氏の家で語られることになる。まず、第35章でカースン氏がバートン氏の家で息子の殺人に関する真実を聞き、すぐに警察へ報告に行こうとする際、メアリから父親を家で死なせてやって欲しいと懇願される。これに対し、バートン氏はカースン氏に借りがあるから自分はカースン氏の望む場所で彼の望むように死んでいくと言い、ジェムの無罪を告白する。

「メアリ、俺はこの人に幾分借りがある。俺は死んでいく、彼が望む場所で、望むように。俺は今、死と隣り合わせにいます、おまえが言ったことは本当だ。僅かに残された生をどこで過ごそうか問題ではない。その間に、あの世に持っていく推薦状のために、俺は自分の魂と格闘しなければならない。あなたがふさわしいと思う場所に俺は行きます。ジェムは無実です」と、バートンは椅子に倒れ込みながら、ジェムを力なく指さした。(ギヤスケル『メアリ』341)

バートン氏が家で亡くなった後、しばらくして、カースン氏は第37章で自宅に

ジョブとジェムを呼びよせて、バートン氏の罪を引き起こした様々な状況を聞き出すことになる。弁護士であるブリッジノース氏の所へ行ってもカースン氏は満足のいくような話を聞くことはできなかったからである。

「思っていた通り、彼は先月の十八日に起こった出来事の大事なことについて、わたしの満足いくような事はほとんど言ってはくれませんでした。わたしはこのことをはっきりさせたいと心から願っているのです。おそらく、あなた方二人ならわたしの知りたいことを話してくれるでしょう。バートンの親しい友人として、あなた方はかなりのことを知っておいでだろうし、そうでなければ、想像することができると思います。真実を嘘偽りなく話して下さい。この部屋であなた方が言うことは決して他言しません。それに、ご存知とは思いますが、同じ事件で二度裁くことは法で禁じられています」（ギヤスケル『メアリ』356）

ジェムはどのようにしてバートン氏が銃を手に入れたのかというカースン氏の知りたかった事実を包み隠さず正直に告白する。Alison Mouldsはこの件について、「実際の殺人の告白およびその後の赦免は法廷の外で行わなければならないということは、適切に真実を引き出す手段としての法廷の適切性をギヤスケルが疑問視しているようだ」（77）と述べている。本来であれば、法廷内で語られなければならない真実がバートン氏、カースン氏のそれぞれの自宅で語られているのだが、第35章と第37章は法廷の本来あるべき機能が果たされていないことに対するギヤスケルの疑問や批判が浮き彫りになっている章だと言えるのではないだろうか。

4 エリノアの戦いは法廷外で「私的に」——『悪夢の一夜』

ギヤスケルの中篇小説である『悪夢の一夜』における注目すべき点は、この作品が1863年に発表されていて、『メアリ・バートン』の出版から15年も経過していることである。この間、『北と南』（*North and South*, 1854-55）、『魔女ロイス』、『曲がった枝』も出版されていて、裁判を一つのテーマとして取り扱ってきたギヤスケル自身の作品における裁判場面描写の彼女なりの答えが、ある程度まとまって

きているのではないかという推測ができる。ギヤスケルはこの作品を発表した2年後に心臓発作によって急死してしまったので、果たして『悪夢の一夜』の裁判場面が彼女の結論であったのかどうかは定かではないが、『メアリ・バートン』と比較してみると、明らかな違いが見られる。その違いを追って分析していく。

『悪夢の一夜』のヒロインであるエリノアは自分の父の罪を隠しながらも、冤罪を被る召使のディクソンをどうにかして助け出そうとする。そして、正しい真実を証明すべく、勇敢にも証言台に立とうとする点で、メアリと境地在り似たヒロインとして捉えることができる。ところが、エリノアの場合は途中、船のエンジン・トラブルによって予定されていた巡回裁判に間に合わず、証言台に立つことができなかった。しかしながら、あえて間に合わなかったことで、彼女はかつての恋人コーベット判事と直接話をすることができ、ディクソンの判決を大きく動かすことになる。この展開について、エリノアは元の恋人としての立場を利用して、大変都合の良い設定になっているという指摘がある。⁶ エリノアとの面会後のコーベット判事の様子から、彼はかつての婚約者であったエリノアに対する未練と彼女への償いの気持ちがあることが分かる。判事がどうにかしてエリノアに協力しようとなる流れは確かに都合の良い設定であり、彼女にとっては有利な展開だと言えるが、ここに辿り着くまでのお互いの「犠牲」の大きさは計り知れない。

既婚の判事であるにもかかわらず、となりの部屋にいる美しく堂々とした妻…、二、三分前にはごきげんななめだった妻よりも、悲しげでみすばらしい身なりのエリノアのほうが、自分にとっていまだに魅力的な存在であるような気さえしていた。エリノアが立ち去ってしまうと、コーベット判事は未練がましくちょっとため息をついた。彼は、がむしゃらに苦勞し犠牲を払って、現在の地位を獲得した。だが今は、自分の犠牲になり、野心の祭壇の上に惨殺されて横たわっているものが、ふたたび息を吹き返すよう、願わずにはいられなかった。(ギヤスケル『悪夢』310)

このようにして、エリノアが裁判に間に合わずに、証言台に立つことができなくなる展開は、メアリの証言台での女性の力の弱さの露呈を同じようにエリノアが再び繰り返さないよう、そしてエリノアの実質的な勝訴へと結びつけるギヤスケ

ルなりの打開策だったと思われる。なぜならば、当時の男性中心の法廷で、いくら女性が真実の証言をしても『急進主義者フィーリクス・ホルト』のエスタのように女性という弱い立場から勝訴となるのは難しいからである。さらに、メアリの場合、事件現場で銃の詰め物に使用した紙を叔母のエスタから渡されたことで自分の父親が事件の真犯人であることを確信することになった。しかしエリノアの場合は、父がダンスター氏を殴り倒してしまった後に、その殺害現場となった書斎に偶然入ってしまったので、エリノアは事件直後の様子を実際に目撃している。また、彼女は父とディクソンが死体を埋めるまでの準備を手伝っているため、エリノアが証言台に立つことで、誤って裁判に不利になる証言をしまい、彼女も従犯として罰せられることになる危険性も十分伴っている。

メアリは法廷でプライベートな質問に対してでも、彼女の心の内を忠実に語ったが、エリノアの場合はメアリの言動とは正反対で、用心深く最後の最後まで重要なことを内密にして、ディクソンの釈放を推し進めようとしている様子が幾つかの引用箇所から分かる。最初は、エリノアの父であるウィルキンズ氏が、生前にコーベット氏宛てに娘の友達でいて欲しいと懇願して書いた手紙をエリノアが持って、コーベット氏に会いに行く決心をする場面である。エリノアは手紙を持って行ってもそれを「おおやけにする必要はないわ。(I need not bring it out)」(297)と語っている。

次は、コーベット邸でコーベット氏を訪問した理由をエリノアが語る場面である。どの判事にも話さなければならないことなのであるが、「秘密を守ってくださることをあてにして…、(in confidence and full reliance on his secrecy)」(304)と告げている。これはかつての恋人でなければ、到底通用することのないセリフであろう。

コーベット判事がエリノアの話聞きながら、全ての事を書き留め、早急に書類を作成し、エリノアに署名をするように頼んだ際、エリノアは「これは、絶対に公開されないんですね(This will never be made public?)」(307)と確認し、コーベット判事は内務大臣以外の人には見せないようにすると誓う。

ディクソンの特赦が決まり、エリノアがイタリアからイギリスに戻ってきた時、彼女は体調を崩し、何日も、何週間も生と死の境を彷徨ったあげく、やっと意識を取り戻すことになる。これは先に記述したメアリとエスタが証言後に体調を崩

すのと同様で、法廷に立つことが女性にとって如何にストレスがかかり、弱い立場の中、神経が張りつめた状態であったのかを物語っている。そして、コーベット判事夫妻を通しての惨めな思いや、驚きの連続はエリノアにとって負担が大き過ぎ、実際に証言台に立たなくても、精神的な疲労はメアリと同じであったことが分かる。最終的にエリノアがリヴィングストン牧師に全てを告白する場面では、

「ディクソンとわたしは、父がなぐった直後にそのことを知って…、隠す手助けをしてしまいました。わたしたちは秘密を守り続け…、(we helped to hide it —we kept the secret.) 父は、かわいそうに、悲しみと深い後悔のために亡くなりました。」(ギヤスケル『悪夢』317)

と語る。ここでは秘密を守り続けたエリノアの長い年月の苦悩と、その秘密があるが故に、公に情報が漏れないように内密の状態であることに万全の注意を払って、ディクソン保釈へと話を進めた彼女の経緯が明らかになる。

また、エリノアがコーベット邸を訪問して、玄関で待つ場面の挿絵(図版1)は Joseph Swain によって描かれ、*Novels and Tales by Ms. Gaskell* の第7巻に掲載されている。この挿絵のタイトルが「秘密の証人」“The Secret Witness”となっているのも注目すべき点である。エリノアは公の場に立たなくても、人目につかないコーベット判事の家で、真実を証言する。自分の父親に殺意は全くなかったものの、ダンスターを殴った勢いで結果的に彼を死に至らしてしまった当時の様子を語る。コーベット判事も婚約者としての当時のエリノアの言動に気になる部分はあったが、長い年月を経てウィルキンズ氏の秘密を初めて知らされる。



(図版1)
“The Secret Witness”

このようにして、エリノアはディクソンの処刑の令状を持っている司法長官にコーベット判事から赦免状を送らせることに成功する。かつての婚約者の家へ出向いた際、美しいコーベット夫人に不快感を顕わにされ、惨めな気分になっても玄関ホールでコーベット判事を辛抱強く待とうとする彼女には行動力と強さが見て取れる。つまり、エリノアの戦いは法廷の外、厳密に言うとコーベット判事の家で私的に行われる。かつて「公共の女性」として証言台で真実を語ってもなかなか勝訴を手にて

きなかったヒロイン達の敗訴の物語を経て、ギヤスケルはエリノアを通して正反対の戦略での勝訴に辿り着いたと言えるのではない。

5 法廷内から法廷外への戦いの意味

メアリとエリノアを通して、法廷内から法廷外での戦いへの移行が意味するものは何か。一つ目は真実が語られても、裁判所は当時の社会の縮図を表していて、公平な裁判が行われない当時の社会への批判だと考えられる。そして、その批判の先には、「ギヤスケルは男性の法制度に疑いを持ち、社会のために、より公平な法制度を期待していたのだ」(8)と Rebecca Fedewa が述べているように、公平な裁判への希望が託されているのではない。二つ目は、男性は「公的領域」に女性は「私的領域」に従事すべきという社会通念が定着していた当時のヴィクトリア朝社会で、証言台に立つ女性の弱さと「公的領域」に踏み込もうとする女性にとってのヴィクトリア朝社会での限界を示しているのではない。社会小説家のギヤスケルにとって、証言台という一種の「公的領域」で女性としてなかなか有利な方向には動いてはくれない難しさ、その限界が法廷を出た場所という設定に移行していったのではないかと考えられる。そして、三つ目が、エリノアが私的な方法で実質的な勝訴へと導けたように、「私的領域」に留まるヴィクトリア朝の女性が「公的領域」での弱い立場から脱却し、領域外に進出していく女性の未来願望をギヤスケルが暗示していると捉えることもできるであろう。「潔白な老人が刑務所に入れられるなんて、とてもひどいことだわ！」(257)、「ディクソンが死ぬのなら、わたしだって死ななければなりません。」(258)と発言するエリノアからは、弱い立場のまま泣き寝入りせずに、不実に対して命がけで戦う勇敢な姿が見受けられる。

冒頭において、有名な文学作品では、社会の歪みが一番投影されている裁判場面を通し、社会の矛盾や不平等を訴えられているということを述べた。ギヤスケルもそれを実行し、主に女性としての立ち場の弱さ、不公平さを幾つかの作品で訴えている。裁判場面の描出を通して、裁判所が本来あるべき公平性の機能を果たさずに当時の社会の縮図を表す不当な場所であることをギヤスケルが社会小説家として鋭く照らし、その改善策をヒロインの私的な証言場所への移行で模索したのである。

注

本稿は、日本ギヤスケル協会第 32 回大会（2020 年 10 月 10 日、Zoom によるオンライン方式）における研究発表「法廷内から法廷外での戦いへ——*Mary Barton* のメアリと *A Dark Night's Work* のエリノアを中心に——」に加筆修正を施したものである。

- 1 伊藤氏による特別講演「文学から何を学ぶか——学生時代の読書について」の「3. 社会を見る眼を培う——文学における法」部分を要約して引用した。
- 2 宮丸氏は「19 世紀の英文学と少年法」の中で、ディケンズの『オリヴァー・トウィスト』がきっかけとなって、当時のイギリスの子供への待遇があらゆるところで見直されたことを述べている。当時は年齢がどんなに低くとも、また犯罪に至った環境も特に考慮されることなく、大人と同じように子供が裁判で裁かれ、かなりの事例において絞首刑となっていた。その後長い時を経て 1908 年に年少者を刑事裁判の対象の例外とする少年法が定められた。
- 3 ギヤスケルの裁判場面に焦点を当てた先行研究で、様々な作品を取り扱っている論文では、中村氏の「Elizabeth Gaskell の *Lois the Witch*: ピューリタン社会が生んだ冤罪事件」、「刑事裁判問題が扱われた Elizabeth Gaskell 著 “The Crooked Branch” についての考察」等がある。
- 4 使用した翻訳書では「メアリー」と記載されているが、本稿では「メアリ」として、この二つの混同を避けるため、翻訳書の引用部分も「メアリ」と統一した。
- 5 Michael Diamond がヴィクトリア朝の読者にとって、「法廷という対立する場は、センセーションを起こすための理想的な舞台」（5）であったとも述べている。傍聴者の関心が証言台に集中し、証人が時に感情的になる場面などは舞台と共通し、証人は役者同様に目立つ存在となる。
- 6 中村氏が「近代社会の悲劇：Elizabeth Gaskell 著 *A Dark Night's Work* における犯罪の描かれ方」の 203 頁において述べている。

引証資料

Census England and Wales, Vol.8, Irish UP, British Parliamentary Papers, 1871, 1891 and Reports.

Diamond, Michael. *Victorian Sensation or, the Spectacular, the Shocking and the Scandalous in Nineteenth Century Britain*. Anthem Press, 2003, rpt. 2004.

- Fedewa, Rebecca. Parker. *Truth Telling: Testimony and Evidence in the Novels of Elizabeth Gaskell*, dissertation. Marquette University, 2009.
- Gaskell, Elizabeth. *A Dark Night's Work. Novels and Tales by Mrs. Gaskell*. Vol. 7, Smith, Elder, & Co, 1889.『悪夢の一夜』、朝川真紀・中村美絵訳、近代文芸社、2003年。
- Moulds, Alison. *The Female Witness and The Melodramatic Mode in Elizabeth Gaskell's Mary Barton*. London University, 2013.
- Struve, Laura. "Expert Witnesses: Women and Publicity in *Mary Barton* and *Felix Holt*," *Victorian Review* 28.1, 2002.
- 伊藤貴雄「文学から何を学ぶか—学生時代の読書について」、Soka Book Wave 特別講演2、
lib.soka.ac.jp/Library/SEASON/no9/sno9_11.htm
- エリオット、ジョージ『急進主義者フィーリクス・ホルト』富田成子訳、彩流社、2011年。
- ギヤスケル、エリザベス『メアリー・バートン—マンチェスター物語』相川暁子・朝川真紀・阿部美恵・金子史江・多比羅真理子・中村美絵・中山恵美子訳、近代文芸社、1999年。
- 中村祥子「Elizabeth Gaskellの‘Lois the Witch’:ピュリタン社会が生んだ冤罪事件」、『英米評論』、桃山学院大学文学部、第12号、1997年、47-93頁。
- 「刑事裁判問題が扱われた Elizabeth Gaskell 著“The Crooked Branch” についての考察」、『英米評論』、桃山学院大学文学部、第17号、2002年、79-112頁。
- 「近代社会の悲劇: Elizabeth Gaskell 著 *A Dark Night's Work* における犯罪の描かれ方」、『国際文化論集』、桃山学院大学文学部、第29号、2003年、183-213頁。
- 宮丸裕二「19世紀の英文学と少年法」、教育番組「知の回廊」63、2008年、
www.chuo-u.ac.jp/usr/kairou/programs/2008/2008_03/

(早稲田大学非常勤講師)

The Change from In-court to Out-of-court Battles: The Case of Mary in *Mary Barton* and Ellinor in *A Dark Night's Work*

Nana YANO

This paper focuses on *Mary Barton* (1848) and *A Dark Night's Work* (1863), which deal with trial scenes, and considers the significance of their respective heroines' change from in-court to out-of-court battles. While there were few female witnesses in the society of the time, Mary takes the witness-box and shamefully tells the truth about her private matters in public. However, her statement does not have any direct influence on the judgment. On the other hand, Ellinor's behavior is the opposite of Mary's. She keeps her important matter to herself to the end, and succeeds in getting Judge Corbett to send a clemency letter of Dixon without taking the witness-box; she practically wins the case.

Through Mary and Ellinor, the following implications can be worked out about their change from in-court to out-of-court battles. First, the change implies Gaskell's criticism of the lack of fair trials. Second, it signifies the situational weakness of female witnesses and the limitations of women stepping into the public sphere of the time. Third, it reflects Gaskell's desire for women's testimonies and actions to be linked directly to the verdict. Last but not least, it can be fairly argued that Gaskell suggests that the future aspirations of Victorian women remaining in the private sphere should move into the public.

M. Joan Chard,
***Victorian Pilgrimage: Sacred-Secular Dualism in
the Novels of Charlotte Brontë, Elizabeth Gaskell,
and George Eliot***

Peter Lang, 2019, 156pp.
Paperback £57.00, ISBN: 9781433162121

村山 晴穂

本書は、ヴィクトリア朝英国のキリスト教文化に育ったシャーロット・ブロンテ、ギヤスケル、ジョージ・エリオットの神学思想と文学的表象における、聖と俗、あつれきと和解、受難と改変等の二重性を考察した書である。本書は三名の作家の多くの作品に見られる、各作家のキリスト教への洞察と巡礼者としての登場人物への投影を浮かび上がらせている。著者は、カナダの州立のダルハウジー大学 (MA)、コロンビア大学とユニオン神学セミナー (MA)、エディンバラ大学 (PhD) 出身で、四つのカナダの大学と三つの日本の大学で教え、主にシャーロット・ブロンテとジョージ・エリオットの研究を続けている。

序論において、まず、著者は、聖書が、ヴィクトリア朝時代の人たちに、アイデンティティ、方向づけ、目的についての意味を与え、欽定訳聖書は、霊的生活を表示しており、ヴィクトリアン人は、求めあう神と人のドラマとして聖書を見ていたという歴史的前提を概説している。根本的な権威としての聖書の解釈は、一九世紀の作家たち、特に、ブロンテ、ギヤスケル、エリオットの主要な関心事であったと指摘している。聖書における人類救済の歴史を概観した後で、ヴィクトリア朝時代の人々が思考していた巡礼者モチーフの、聖書に次ぐ第二の重要な出所は、バニヤンの『天路歷程』であると分析している。バニヤンのロマン主義的再評価を創始したコールリッジの論点、すなわち聖書の贖罪のドラマに忠実であったバニヤンの卓越性という論点を、著者は詳述している。ヴィクトリア朝時代の人々の愛読書であった、聖書と『天路歷程』の巡礼のモチーフが人々に内在しているのを先見の明でとらえ、人々の相互関係に適用させ、人の改変のために

意図的に用いていった預言者としてのブロンテ、ギヤスケル、エリオットは、ヴィクトリア朝フィクションのための新機軸を開発している、と著者は評論している。以下、三者の作品化における著者の主要な論点を列挙していきたい。

第一章 シャーロット・ブロンテ

巡礼の道

『ジェイン・エア』の最終部でセント・ジョン・リヴァーズが、「アーメン。主イエスよ来たりませ」と言っている言葉は、巡礼についてのシャーロット・ブロンテの理解をひもとく鍵となっており、ブロンテのフィクションの基底部に横たわる主題であると、著者は述べている。このような言葉は、救い主の初臨は、人が求める聖と俗の和解の始まりであり、救い主の再臨はその完成であるというブロンテの確信を指し示すものであると著者は論じている。

ブロンテのフェミニズムは、個人的な敬虔さと社会規範への応諾とに制限されることのないキリスト教世界観、贖罪の歴史においてこの世を包摂する、反文化的な世界観に基づいているとして、著者は、ブロンテの文学性をさらに以下のように説明している。

ブロンテが、聖書、パニヤンの『天路歷程』、ミルトンの『楽園喪失』を読んで得た生き方という道筋の隠喩というものは、ブロンテがフィクションを探求していく手段である。彼女の作品の中核部（自己の探求、関係の相互性、本質的再生）へと向かって、隠喩は、主題、語り、人物描写を結びつけている。天地創造から墮落した人の再創造へと向かう原型的な巡礼という生き方は、ヴィクトリア朝時代の人々が慣れ親しんでいる視点である。パニヤンが『天路歷程』において考察している滅びの町から天の都、またミルトンが省察した、楽園喪失から楽園回復に至る聖書の類型論的道筋は、ブロンテによって型破りな扱いを受けている。彼女が描く登場人物の旅は、寓話というより、むしろ、現実の領域内に横たわるものである。にもかかわらず、彼らの旅路は、完成と未完成、展望と現実、束縛と自由の間のあつれきによって、推し進められる精神の旅路なのである。彼らの巡礼の旅は、被造物の世界を超越し、かつ被造物の近くに寄り添って守る天地の創造主なる神の永遠の世界の背景と、もろく、たちまちのうちに消え去る人生の前景との対比の中におかれているのである。

著者は、さらに、巡礼者の旅は、本質的に、実存的であり、経験主義であると添えている。神の愛と赦しを提示し、受肉して人となった神の子と贖罪を強調していた福音主義運動と同様、初期のヴィクトリア朝神学の中心的立場として掲げられていた、良心に語りかける三位一体の神（父なる神・救い主イエスとして来臨した子なる神・聖霊なる神）を意識することなく、ブロンテは、あらゆる諸関係の性質を意味づける神の性質のより深い理解へと向かわせる巡礼の旅を個人的な経験として扱っている。ジェイン・エアは、自暴自棄になっているとき、「命の源は、精神の救い主であった」（JE 351）という確信を与えられている。

荒野の経験

ブロンテの作品の主要な登場人物は、求道者であり、また心の内と外の戦場で戦う受難者である。「人生の歩み」が「暗い谷間の陰」にある人々は、厳しい現実と大望とを和解させようとする、極度の精神的動揺や不満を体験している。

贖罪の愛

創世記2章と3章のエデンの園の物語とミルトンの『楽園喪失』におけるエデンの園の誘惑の詩的解釈は、愛の関係についてのブロンテの描写のための神話的枠組みを与えている。

ブロンテのフィクションにおいて、艱難、不満、不一致という荒れ野は、楽園喪失から、浮世と永世の聖と俗の二重性を和解させようとする男女の本質的再生に至る旅路なのである。ブロンテが描く作品中の人物は、エデンの理想郷の壊れた夢によって前進を躊躇している人々であり、彼らは、巡礼とは行進ではなく、行程に関わるものであり、到達ではなく、期待に関係するものであることを意識していると、著者は結論付けている。

第二章 エリザベス・ギヤスケル

巡礼への新しい方向づけ

ブロンテとギヤスケルは共に、他の変革以前に精神の領域で根本的な変化が必要であるという確信と確かな聖書的遺産を考察している。しかしながら、『シャーリー』を除いて、ブロンテの小説は、登場人物の差し迫った関心事を超えた状況

について意識することはほとんどない。他方、ギヤスケルの作品においては、外からの力と出来事が登場人物に迫り、自己と社会を統合させるようなある種の解決を求めている。まったき愛の理想に向けての孤独な取り組みが、ブロンテのフィクションの特色であるとするなら、社会的変化のより現実的な意識を持って、求められている一致と相互依存性が、ギヤスケルによる巡礼モチーフの取り扱いの目標である。ロマンと結婚の人生の旅路にとらわれている巡礼者ではなく、より広い共同体の舞台において、個人的な生活を演じる巡礼者が提示されている。

時代精神へのギヤスケルの傾倒と、社会改革のための人の能力への信頼は、彼女に深く根差したユニテリアンの信仰の表明であり、それは作品を超えた創造的な衝動である。三位一体とキリストの神性を退けるユニテリアン主義は、信仰生活において与えられる神の恵みと驚くべき御業の必要を、理性主義と人間の改善性を強調する生き方におきかえている。ユニテリアンは、救世主による罪の贖いを通しての神と人の和解を信じてはいなかったため、クリスチャンの愛と実際の適用を通して、自分たちで罪の赦しを採りこんでいた。彼らは、当時、流行していた高等批評によって引き起こされる疑念に揺れ動くことなく、深く聖書のメッセージも省察することもなく、当時の差し迫った政治的・社会的・経済的な諸問題に積極的に関与していた。ヴィクトリア朝時代のキリスト教の流れを蝕む聖と俗の二分法は、信仰と実践の間に人為的境界線を持ちえなかったユニテリアンの精神を悩ませることもなかったようである。

ギヤスケルにとっては、行為と動機が、精神的巡礼の性質を決定づけている。一九世紀の多くの家庭で愛されていたバニヤンの『天路歷程』は、ギヤスケルの小説にも出てくるが、ギヤスケルの登場人物の行方は、『天路歷程』の主人公の「クリスチャン」の行方とは異なった形をとっている。ギヤスケルの登場人物が歩む人生の旅路は、天国に確実に導く旅ではなく、むしろ地上における苦痛に満ちた暮しに直面させるものである。

ギヤスケルは、ブロンテと同程度に、靈感を与える書として聖書を引用しているが、ギヤスケルのフィクションにおいては、はるかに譬えによる教訓または逆説的な意味が、人物描写、イメージ、物語展開に微妙に統合されている。ギヤスケルにとって、巡礼者の路というのは、有為転変の暮しの中で生き抜くための導きを求める者たちを結びつけるものである。登場人物は、新たな精神的フロンティ

アに生きるべく、前人未踏の孤独の路における探検者としての感覚を伝えている。

ブロンテの小説においては、ヒロインとしての孤児の人物像が孤独な巡礼という観念を強めているが、ギヤスケルの小説においては、社会の相互依存性と責任の必要を強調している。ブロンテの作品中の巡礼者たちは、自分たちの重荷を負う傾向が見られるが、ギヤスケルの作品においては、巡礼者たちが他者の重荷を負い、助けを与えている。それゆえ、個人の精神的苦悶のみならず、人間共通の幾多の苦難の扱いにおいて、ギヤスケルはブロンテを超えた者のように描かれている。

『メアリー・バートン』における登場人物は、お互いに神の慈悲はいつも人間の赦しの尺度を超えていることを思い起こしている。ギヤスケルにとって、家族は、孤立した単位ではなく、神の憐れみを示し、実際の助けをする通路となっている。

ブロンテは、心理的な烈しさを伴う個人の苦しみを描いている一方、ギヤスケルは、多くの人たちの中で、一人も見失うことなく、感傷やもったいぶりの無い感受性を持って、貧しい人たちの多くの苦しみを描き出している。

たくましい精神の女性たち

自己発見とヴィジョンの拡張のプロセスに関与しているギヤスケルのヒロインたちは、信頼と進取の気性を持って、新しい路を歩んでいく。男女個人は、神に申し開きをしなければならないという聖なる創造主の配剤を覚えつつ、登場人物は、可能性を最大限に伸ばし、他者のよりよい人生のために貢献していく課題を受け入れていく。目まぐるしく変化していく社会において、独立独行以上に、相互依存を優先させなくてはならないと認めてはいても、ギヤスケルはまたすべて社会の進展の特質は、個人の巡礼の性質によって定められると認識している。精神の旅路を辿りつつ、ヒロインたちは、人間の性質、特に、善悪を選び取る個人の能力の複雑さを意識するようになる。悪は外部的なものばかりではなく、心の内に認められる力であり、心の改変にとってもっとも難しいものは、心の中にあるもの自体であるという認識に従う時、ギヤスケルの描く女性たちは、その精神のたくましさをあらわにしていく。

二つの世界が相解する

聖と俗の二分法とヴィクトリア朝的捉え方をしながら、ギヤスケルは、内在的な過去と現在、回顧と展望という二重性を併せ持つ社会改革の文脈において、彼女のロマンと結婚というプロットを展開させている。

分離した局面に至らせる権力の乱用への預言者的裁可として、また登場人物の態度の変化と精神的成長を顕わにする手段として、ギヤスケルは聖書を用いる。

贖罪があてはまるのは、切り離された個人に限るものではないという聖書の普遍的役割をギヤスケルは掲げている。

個人の改変は、社会の改革に先じるものであり、ヒロインまたヒーローは共に、ジェンダー関係と人間の巡礼を妨げる政治権力構造を再定義する責任を担っている。公と個の境界区分の線引きを消し去ることで、ギヤスケルは、貧富両者の家庭において、日々の働き場において、人ごみの中において、社会改革の大変動の中であって、また拡張し、懐柔していく世界の動きを日々の務めに関連づけるすべての努力において、神と人が相伴うとギヤスケルは主張している。

第三章 ジョージ・エリオット

ブロンテやギヤスケルのように、エリオットは、聖と俗、期待と経験の二分法を、作品において重要なものとしている。ブロンテは、神への彼女の信仰、また地上において神性を具現化したキリストへの信仰を保持し、ギヤスケルは、キリストの神性の教理を拒んではいるが、行為の至高のガイドとして、キリストの伝道奉仕と教えを擁護している。エリオットは、細かい教会の教義信条から離れ、人間性の宗教を描きだしている。

エリオットの驚異的な学識と洞察力豊かな神学的な識見は、彼女のフィクションにおいて、明白である。『牧師館物語』の福音主義、『アダム・ビード』のメソディズム、『サイラス・マーナー』と『フィーリックス・ホルト』の会衆派主義、『ロモラ』のカトリックの宗教改革、『ミドルマーチ』の国教会主義、ダニエル・デロンダの『ユダヤ教』に代表される様々な精神的経験への彼女の共感的観察において明白である。

彼女は、生涯、欽定訳聖書を読み続け、イザヤ書、エレミヤ書、パウロ書簡を音読していたが、聖書は、「早い時期から親しんでいたばかりではなく、人の宗

教的な生活の向上における聖書の重要性についての深い確信から、彼女にとって、極めて貴重な聖典であった」と J. W. Cross は記している (*George Eliot's Life as Related in her Letters and Journals*, 1885, 419-20)。エリオットは、エデンの園、洪水、荒野、約束の地の繰り返されるイメージを旧約聖書から得ており、誘惑、回心、犠牲、新たな生まれ変わりというイメージを新約聖書から得ていた。エリオットは、人の苦難を身に負い、世の人たちを最高に愛しているキリストから自分を切り離すことはできなかったようである。旧新約聖書共に共通している、人の受難を身に負う愛の神という概念は、聖書思想の遺産の一つであり、彼女の作品の中に躍動しているのである。

生き方という道筋の隠喩というものは、ブロンテとギヤスケルと同様、エリオットのフィクションにおいても繰り返されている。しかしながら、精神的な旅路を辿る登場人物の生き方は、人生への人間的な応答に至るものである。

天職を求めて

エリオットは、個々人の選びの教理に根差した、神が与える霊的な召命という概念を世俗化してしまっているため、あらゆる人の努力を嘉納する靈感をもはや良心に語る天来の声としてではなく、共感の輪を広げて社会の改善に資する精神性に留めてしまっている。エリオットの描く人物の巡礼は、いずれにせよ、自己発見の路を辿る形を取り、個人また社会の豊かさに至る天職を求める形に終始していく。

『サイラス・マーナー』や『アダム・ビード』の登場人物の労働観と自己発見と自己探求を摂理の神（人を最善の道へと導く神）の見方と照合させる分析が著者によってなされている。『フロス河の水車場』や『フィーリックス・ホルト』さらに『ミドルマーチ』に至っては、個人と社会の相互関係をさらに複雑多岐なものにしつつ、世俗社会の中に聖なるものを見いだそうとする。偉大な感情と偉大な信仰によって動機づけられる人間精神の発露こそ、成長のための重要なステップになるという、天職を求めるドロシアの認識を引き合いに出している。

追憶と展望

『ダニエル・デロンダ』は、ヴィクトリア朝イングランドを超えて、新しい人

間像の創造を考察させる物語となっている。この最後の作品は、社会の進化の背景の中での個人の成長を位置づけている。聖なるものと世俗とを分つとき、現代的な関連性を失っていく古代の宗教から、人は人間を結びつける同情の力に信頼していくことになるという仄(ほの)めかしがこの小説の中でなされている。この小説において、自己確認と天職を個人的に求めることは、ユダヤ人の歴史的かつ国民的意識と結びついており、巡礼者の旅は、短期的なものから永遠に至る幅を持つものとなる。

『ダニエル・デロンダ』の中心になっている贖罪のテーマは、聖書に起源を持ち、普遍的な含みを持つものであると著者は指摘している。精神的な支えとなるモルデカイを通して、ダニエルは、抽象的な理想主義に始まる召命により、具体的な仕事という展望が開けてくる。追憶は、エリオットのフィクションを通して、主要な手段の一つであって、それによって、個人レベルと社会レベルの連続体が維持されることになる。旧約聖書の出エジプトを導いたイスラエルの指導者モーセが約束の地カナンを前にして死んでいくように、モルデカイ自身も約束の地に入ることがない。この小説は、モルデカイの死を持って終わり、ユダヤ国家のために献身しようとするデロンダを通して、モルデカイのヴィジョンの成就が予期される。ダニエル・デロンダは、堅固な社会の構築のためには、確実な霊的な礎がなければならないと気付いている。それゆえに共同体倫理における、聖と俗を結びつける、ユダヤの預言者的伝統を維持している。

『ダニエル・デロンダ』においては、本質的には、世俗の運動であるシオニズムは、エリオットの人間性の宗教の最終的表出であると著者は分析している。創造主の神性と人間性は、和解するものであっても、同等のものになりえないということを暗に認めつつ、エリオットは救済史という壮大な物語を見直していると著者は結んでいる。聖書に描かれた人類の救済史において、自身を開示し、人の罪を贖う創造主なる神は、人の巡礼を導き、行くべき目的地へと招いている。しかるに一方、人間性の宗教においては、共感という活性化された内的生命力が、人を贖う救世主の働きと導きを求める必要を見えなくし、単なる代用品となってしまう。神が与える聖化による愛と人が好む共感とは、この新しい配剤において、人を変える信仰において、融合しているという決論に著者は導いている。

* * * * *

以上が著者の主要な論点の概要である。ノースロップ・フライは、聖書は西洋文学の中心的な原型をなし、聖書に親しむことは文学全般を理解する予備条件であると指摘している（『批評の解剖』1957）。名作と言われる英米の作品には、人類諸国民に愛着を与えるキリスト教の恒久的な価値がこめられている。本書に明らかにされている文学思想家、ミルトン、バニヤン、ブロンテ、ギヤスケル、エリオットは、皆、聖書を熟読し、慈愛、恵み、罪の赦し、回心、悪の誘惑に対する善意、義の原則、永遠の生命、その他の精神的賜物を受けとり、各自の経験に取り交ぜ、人物描写の中に、筋展開の中に、主題化の作業を推進し、多くの読者と感動を分かちあってきた。ヴィクトリア朝時代のキリスト教思潮を基軸として、三人の文学性を比較考察した本書は、彼女たちの時代的精神性と思惟をより深く洞察する契機となる読み方のヒントと素材を提示している。

(元三育学院短期大学教授)

Melissa Schaub,
Performativity in Elizabeth Gaskell's Shorter Fiction: A Case Study in the Uses of Theory
Palgrave Macmillan, 2019, 75pp.
Paperback €46, ISBN:978-3-030-26313-3

大前 義幸

エリザベス・ギヤスケルが生涯で残した長編小説は7作品あるが、それに対して42の短編小説が残されている。そのどれを読んでも、当時の社会問題や独身女性問題、家族愛、社会貢献など、繰り返し読んでも新しい発見や感動、驚きを与えてくれる。まるで150年前に書かれた小説とは思わせない作品内容である。それらすべての作品が、彼女がヴィクトリア朝中期に起こした社会改革の勝者の証拠である。とりわけ彼女の作品が特筆されるとき、多くの人が *Cranford* や *Mary Barton*、そして *Wives and Daughters* のような人気のある作品に注目するが、筆者は長編小説の礎ともなっている中・短編小説、特に“*Lizzie Leigh*”や *Cousin Phillis* などに注目し、文学理論を用いて新たな視点で作品解釈を行っている。

本書は、まず始めにギヤスケル小説に登場する人物描写のテクニクが、ジュディス・バトラー (Judith Butler) の Performativity 理論 (「言語行為」) をどれだけ説明しているのかを検証し、続いて、ギヤスケルが執筆した作品の中でも、特に中・短編小説の Performativity に注目し、彼女の作品に登場する様々な人物の行為だけではなく、作者の声として登場するギヤスケルの人物描写のテクニクも含め、検証結果を用いてどの程度実践的に使用されているのかを詳細に論じている。

本書はイントロダクションを含めて大きく4つの章で構成されており、最後に本書執筆にあたっての参考文献リストと索引が掲載されている。

まず第1章では、「主観性のパラドックスと理論性の帰化」(The Paradox of Subjectivity and the Naturalization of Theory) と題し、ジュディス・バトラーの Performativity 理論をもちいて、ギヤスケルの作品世界に描かれている主な対立を取り上げて論じている。また、彼女の理論を用いて説明を行う前に、なぜ彼女の

理論が成立するのかを順に論じていることも、本章の特徴ではないだろうか。1990年にジュディス・バトラーが出版した *Gender Trouble* や 1993年にも出版された *Bodies That Matter* の中では、演劇のなかで取り上げられる performativity は、彼女の初期の理論と密接があることが論じられている。つまり、彼女が位置づけた理論は、テキストの状況によって自身の理論を構築する手法ではなく、はなから理論を用いて文学を解釈する文学理論であった。J・ヒリス・ミラーが、2010年に発表した“cheerful hypothesis”と“gloomy hypothesis”は、バトラーが考える作品から導き出された新たな理論でもあった。そして、様々な理論を使用せずに performativity という専門用語を使用する文学解釈は、特別な理論家から切り離されており、むしろミラーの理論と対比しても登場人物の陽気の仮説に比重を置いた、新たな解釈を生み出す読み方である。

そして著者は、ギャスケル研究者にとってバトラーの Performativity 理論を短編小説に登場する人物たちに当てはめて文学解釈を行うと、新たな読みと解釈を得ることができると主張している。1962年に J.L. Austin が文学理論を用いて、*How to Do Things with Words* という研究書を出版したことで、文学研究において performative という新たな解釈方法を構築し、その後、1972年には Jacques Derrida が、さらにポスト構造主義や脱構築主義という新たな概念を構築していった。その後、1990年代においては、ギャスケル作品を解釈するにあたり、多くの批評家たちは文学理論を用いて、リアリズム小説に見ることができる産業革命における社会問題を中心に研究が行われていった。ヴィクトリア朝女流作家で影響力のある研究者である Elizabeth Langland は、1995年に出版した *Nobody's Angels* という本の中で“theater for the staging of a family's social position” (9) と主張し、ヴィクトリア朝時代における家族関係を論じた。そのため、Performativity 理論は、*Wives and Daughters* における家族関係に注目されたが、多くの批評家たちはギャスケルと他の女流作家や階級社会を題材とする小説などにこの理論を用いることを推奨した。

18世紀の文学作品では、男女の性問題が思考や語り、話者など、物語を展開することにおいては、ふたつの異なる結末へと導くことが描写されていた。そして、ギャスケルは、物理的媒体として思考の映像化を表現しており、言語や性格を表現することで作中何度も性別による異なる行為が用いられている。しかし、*Cranford* の中に登場する女性たちは、静かな女性たちではなく、行動的であり、

活発に自らの意見を議論しあう女性たちが描かれていることにおいて、著者はギヤスケル作品の中でも神秘的な行為として注目できると述べている。

つまり、バトラー理論における主要なカギである *performativity* や *perform*、*performance* という行為に注目することで、性別が異なる者同士の階級差を読むことができ、また同じ中流階級であっても性による差を分析することができる主張している。

続いて第2章では、「物語と小説における厳格な行為性と意味づけの見直しの限界」(Strict Performativity and the Limits of Resignification in Stories and Novels) と題し、バトラーの *Performativity* 理論を用いて、陰鬱な側面を示すエリザベス・ギヤスケルの短編小説の数々を精読する。とくに“Lizzie Leigh”や“The Old Nurse’s Story”、長編小説では *Wives and Daughters* に描かれる、登場人物たちの人物描写を分析している。文芸批評家たちによっては、ほとんど研究されることが少ない物語や小説に登場する彼らの言葉や行為の意味づけを見直し、性による言葉や行為の強勢を検証している。続いて、反対タイプのテキスト、つまり、自らを取り巻く強制的な言葉や行為を辞することができる登場人物を含む小説を論じている。本章では、*Wives and Daughters* に焦点をあてながらも *North and South* にも注目している。さらには、ギヤスケルの長編小説と短編小説を研究するにあたり非常に重要な初期作品である *Mary Barton* を取り上げ、バトラーの *Performativity* 理論をこれらの作品に用いて著者が提唱する仮説を論じている。*Performativity* 理論の仮説を最も強く主張をしているのがギヤスケル作品であると著者は述べているが、どのような要因が言語や行為に影響を与えているのか、その再帰性を可能にしているのかも明らかにはされていないと主張している。

例えば、*Mary Barton* に描かれる登場人物たちは、チャーティスト運動という歴史の事実を舞台に描かれているにも関わらず、女性たちの性格が陽気に描かれている。そのため物語が進むにつれ、作品前半に描かれていた女性たちが、急激な意識の拡散や彼女たち個人の性格の意味づけを直す行為が起きている。しかし、このことに関して、2005年に Nancy Armstrong が *How Novels Think* という著書の中で、「一般的に小説に関する指摘をするならば、wit と ability という2つの並外れた文学的性格に対する似通った能力である」と述べている。アームストロングの考察とバトラーの理論には、2つの読みと解釈ができるが、著者は登場人物たち

の陽気な性格による人間本来の規範が描かれることによって、彼らの性格を面白く読むことができるのではないだろうか。

また、著者は、新しい印象は、「過去に作られた痕跡を完全に消し去ることができ、若い頃の失敗は、年齢を重ねてから別の役割を果たすことで取り戻せることもある」と述べ、ギヤスケル小説は現代を舞台にしたものが多く、あらゆる階級の人物が登場するが、特に「近代的」な人物が多いと指摘している。工場労働者、新富裕層の工場主、科学者や技術者、聖職者や医師などの専門家など、19世紀の間に階級の地位が大きく変化した人物が登場するのも彼女の作品の特徴であると主張している。

つまり、彼女の短編や長編小説を論じる時、その人自身の意識の変化が、19世紀の信頼できる発言であり、また必要性だけではなく、個人の行動の成長においては十分過ぎる状況でもあると論じている。

第3章では、「横転する氷：小説における近代性と複雑なアイデンティティ」(Turning the Glacier: Modernity and Complex Identity in the Novellas)と題し、第2章で論じた、ギヤスケルの短編小説では、バトラーの Performativity 理論を用いて作品解釈を行うことが有効的であり、作品内から示唆に富んだ内容を得ることができるが、あまりにも異なる要因が多数存在するため、2つの形式の登場人物を分けて考える必要があり、重要な側面を切り出すことが困難であることも論じられている。また、短編小説では田舎を舞台にした一人称の小説で描かれていることが多く、語り手は生まれ育った場所に住む人々の習慣とは無縁の感覚を持つことが必要となってくる。そのためギヤスケルの物語形式は、特定の登場人物が自らの演技を強制する発言や行為を認識し、それらのしがらみのある程度脱することができる理想的な環境を作り出していることを指摘し、*Cranford* や *My Lady Ludlow*、*Cousin Phillis* を中心に論じている。

まず著者は、ギヤスケル短編小説に登場する人物たちが、どのようにして Performativity 理論で主張する陰鬱な性格として描かれているのかを述べている。つまり、彼らの個性でもある行為が作者によって強制されているのではないかと論じているのだ。そして時には過ちや喜劇役者として個性を逸脱する行為を行うことで、陽気な一面を描き出していると言う。しかし、ギヤスケルは小説家だが、作中においては語りの視点から物語を語ると言う重要な役を持っている。

Cranford や *My Lady Ludlow*、*Cousin Phillis*、“Old Nurse’s Story”では、物語に描かれる舞台を外から見る語り手が登場することが共通している。つまり登場人物たちが物語を展開するのではなく、しばしば語り手が物語を進め、そして、そこに喜劇や悲劇などの演劇要素を組み込むことで、農村社会で暮らす登場人物の個性を描くことに成功しているのだ。

そのため、*My Lady Ludlow* は憂鬱な雰囲気の中で語り手が語るために悲劇的に書かれており、*Cranford* や *Cousin Phillis* は否応なしに演じることが彼らの個性になっている。そして著者は、*Lady Harriet* や *Lady Ludlow* のような中流階級の上品ぶった人たちは、語り手によって貴族階級出身であっても過ちを犯し、独身の精神的な溝にねじれ込むことができる人物であると辛辣な皮肉を述べている。*Margaret Hale* や *Peter Jenkyns*、*Miss Galindo*、そして *Margaret Dawson* は牧師の子孫であり、*Paul Manning* は技師であり、中流階級の末端に属している。しばしば、Performativity 理論は、歴史的なことも述べているが、実際は、作者ギヤスケルが時代や社会階級によって歴史的な側面を描いていることが重要なことである。*John Lock* やバトラーが提唱する Performativity 理論を用いての人物造形よりも、登場人物たちの生きた経験を述べるのが効果的であると考えられる。つまりギヤスケル小説に登場する人々は、彼ら自身の意識の変化や成長する姿が、より絶え間ない変化を可能にするとして主張している。本章の最後に著者は、彼女の作品に登場する人々は、あらゆる状況の中でも現在形で過ごしているが、特に短編小説では崩壊した社会構造の中に過去の記憶の中で生きている人物が多いことに触れている。

第4章では、「理論を使用するための原則」(Principles for the Uses of Theory)として、文学理論をいかに文学作品に用いればよいかという大きな問題に立ち戻っている。つまり、ギヤスケル作品に登場する人々は、バトラーの Performativity 理論を用いることで、新たな作品解釈や理解を生むことができるが、彼女の作品に登場する人物は、著者が主張するように陽気な女性が存在し、バトラーの男女の性の違いにおける言葉や行為の違いにまで及ぶ読みや解釈は難しいかと思われる。しかし、そのような登場人物を含む他の作品は、多くの研究者や一般読者からもっとも読まれているものである。つまり、バトラーが提唱する Performativity 理論は、彼女が主張する性による代理行為や制御ということを意味するのである。

そのためバトラーが提唱する理論を著者が違法に使用しているように思われるが、もちろん理論を使用しての解釈は学術的な会話であり、それ自体の理論は常に進化していくものである。それに伴い、本章では、学者が様々な原則や文学理論を解明し、教員が大学や大学院での教育現場で指導を行う上での適切な指導法を説明している。

第1章で論じられている、ジュディス・バトラーの Performativity 理論を用いて、ギャスケル作品に登場する人々に当てはめて検証する内容は、作者の実験として考えることができる。つまり、バトラーが論じている Performativity とは、それまで J. ヒリス・ミラーの“cheerful hypothesis”と“gloomy hypothesis”という対立する説を用いて、バトラーの Performativity の考えに至った思考とを重ね合わせることにより、その新しい概念がギャスケル作品のフィクションにどのように適用することができるのかという新たな問題を生むことができる。そして、第2章と3章では、大きな理論的枠組みを参照しながら、ギャスケルの中・短編小説を精読していく。そして著者は、バトラーとギャスケルの両作品を厳密に読むことで、ミラーの“cheerful hypothesis”を自然に受け入れることにも繋がり、ミラーの主張を裏付ける展開へと進んでいくと論じている。さらには、第3章で論じている、「氷の展開：小説に見る近代と複雑なアイデンティティ」を読むことで、J. ヒリス・ミラーの“gloomy hypothesis”を受け入れるべき議論だと主張している。そして、最後の「理論を使うことにおける原理原則」と題した章では、理論家ではない著者が、哲学理論を文学作品に適用する際の指針や原則のある種の注意喚起として論じている。

本書の主題は、ジュディス・バトラーの Performativity 理論をギャスケル作品に適用し、新たな研究方法を浮き彫りにすることが目的であるが、バトラーが Performativity 理論の考えに至った思考や、これから文学理論を用いて文学作品の解釈研究を始める人にとっては、有効的な一冊になるかもしれない。

(岩手県立大学宮古短期大学部講師)

Meghan Lowe,
Masculinity in the Work of Elizabeth Gaskell
Palgrave Macmillan, 2020, 230pp. (Hardcover) / 271pp. (Kindle)
Hardcover £79.99, ISBN 978-3-030-48396-8
Kindle £75.99, e-ISBN 978-3-030-48397-5

瀧川 宏樹

本書はそのタイトルから明らかなように、女性問題から論じられることの多いギaskell作品の男性性に焦点を当てて一冊の研究書として仕上げられている。全8章構成で、その中心的な対象は中・長編小説6作品である。

第1章“Introduction”を読むと、特に21世紀に入り男性性の研究が盛んになってきた現在の動向を受けて本書が生まれたことがよく分かる。フェミニズム研究により女性に対する単一的な考えは見直されてきた一方で、男性に対しては単一的な見方が長らく蔓延していた。先行研究としてHerbert Sussman、Phillip Mallet、John Toshらに主に言及しつつ、筆者は男性性を本質主義的なものではなく、社会的に構築された様々な視点を含むものとして位置づけている。

筆者がギaskell作品における男性性に焦点を当てる際に重視するのは、Manchester、Unitarianism、sympathyの3点である。ギaskellはマンチェスターを拠点にしていたことで、労働者と接する機会が多く、また実業家たちとも社交上の付き合いがあった。そのため、労働者階級と実業家の双方の男性性を描く理想的な状況にいた。ユニタリアンに関しては、特にユニタリアンの性への隔たりを設けない特性について言及されている。女子教育に力を入れ女性の知性は男性と同じになると信じていたように、男性には女性同様にsympathyややさしさ、愛という特性をユニタリアンは当てはめていた。そしてギaskellは男性を含む様々な登場人物のsympathyを描き、これを社会問題や階級闘争の解決策と見なしていた。ヴィクトリア朝社会において女性の特性とされていた愛やsympathyを、ギaskellが男性登場人物を通じて描いたことへの着目が、本書の出発点となっている。

第2章は『メアリ・バートン』論である。本作品の元のタイトルは『ジョン・バートン』であり、ギヤスケルは出版後も中心人物はジョンであると手紙に記している。確かにギヤスケルはジョンへの sympathy を描き、労働者と工場主の sympathetic exchange を描こうとしているが、ジョンは死に、ジェムとメアリはイングランドの外へと移住するという結末のため、結局マンチェスター内において有効な解決策を提示できていない。筆者はこのようなギヤスケルの曖昧な態度の原因を、作品内で描かれる労働者階級の男性性に見出している。

筆者はまず家庭内の領域における男性労働者の男性性を考察し、子どもの養育や感情などの女性的な要素がある点を確認した上で、ギヤスケルは男性労働者の感情の制御ができない様を暴力と結び付け、結局彼らを理性的な能力を欠いた存在とみなしていると述べている。さらに、公でも理性的ではなく感情的に反応する彼らは政治の領域には適さないとギヤスケルはほのめかしているとも指摘し、結局ギヤスケルは決して労働者階級を工場主と同列にしたいと思っているわけではなく、中産階級の人々が sympathy を示すことによって、こうした男性労働者の感情的および身体的な爆発を抑えることができると示しているのである。筆者の主張は、ギヤスケルはジョンを勤勉な労働者で同情すべき対象として描き男性労働者への sympathy を読者に喚起しようとはするが、同時に教育のなさに恐怖も感じていた。そのため労働者階級の男性に sympathy を置きすぎることによる不安を感じており、ジョン（男性）からメアリ（女性）へと重点を移していったというものである。

第3章は『北と南』論である。本作では、『メアリ・バートン』とは異なり読者に sympathy を喚起しようとする代わりに、sympathetic exchanges に従事する登場人物を描いている。この作品の革命的な力となるのは、ソーントンと労働者たちの和解のために動く際のマーガレットの心の反応に根付いた女性的な力である。マーガレットの力は男性にも同様に sympathy を促進している。Sympathy のプロセスを通じて、マーガレットは北部の人々を理解し、男性性の認識を改めることを学び、ソーントンもまた労働者たちに共感し、役に立つものや性的願望とみなしていたマーガレット（女性）に対する考えを改めるという変貌を遂げる。こうしたソーントンの成長を通じて、ギヤスケルは sympathy をジェンダー化された女性的なものに限るのではなく、男性性にも結び付けているというのが、筆

者の主張である。

筆者は、この sympathy を通じた教育に関して、作品内で描かれる手の描写を通じて解明していく。また手への着目によりロマンスのプロットと社会問題のプロットがより合わされていく様をたどり、sympathy や個人的なつながりが、制度的な変化に代わるものとされていると主張している。しかし一つの階級やグループ内での sympathy や連帯が生み出したストライキは労働者や工場主の両者にとっての苦難につながってしまう。ギヤスケルは階級間や異なる領域間の sympathy の必要性を訴えており、それはソートンとヒギンズの協調や、ソートンとマーガレットのロマンティックな結合を通じて描かれる。『メアリー・バートン』における労働者階級の masculinity とは異なり、ソートンの成長は sympathetic and productive masculinity を示すと結論付けている。

第4章は『ルース』論で、ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』との比較研究である。これまで『ルース』研究には堕ちた女と私生児の観点からの論考が多いが、『緋文字』と『ルース』の各二名の男性登場人物を比較することにより、ホーソーンが描く男性性をモデルとしつつ、そこに変更を加えたギヤスケルが描く男性性の特色を本章では浮き彫りにしている。

一組目はディムズデイルとベリンガムである。ディムズデイルは小説の始めから意志の弱い、やつれた、性的に魅力のない男性として描かれている。ベリンガムもまた、ルースと性的交渉を持ったのちに病気になり、その後の決定に関して母親に逆らえず言いなりとなり、意志の弱さを露呈する。ギヤスケルは、制御できない性的エネルギーの結果として弱体化する過程をベリンガムを通して描いている。この過程を描いた点、そしてベリンガムは最終的に回復し、元のアグレッシブな男性性を取り戻す点が、ディムズデイルの描写との相違点である。ギヤスケルは、アグレッシブで支配的な男性の異性愛を覆すことはできず、最終的に反道徳的なセクシュアリティは男性よりも女性にとって損害が多いというヴィクトリア朝の性的規範に内在するダブルスタンダードを示すことを選択している。筆者はさらにベリンガムと、『アダム・ビード』で描かれるアーサー・ドニソーンとの類似性を指摘し、女性の人生を狂わす行為を許される男らしさのモデルに対する不満をギヤスケルとエリオットが共有していたと指摘し、意志の弱い男性像は、当時の男性性として社会的に構築されていたとまとめている。二組目はチリ

ングワースとサースタン・ベンソンであり、肢体不自由の点から比較考察し、ギヤスケルはベンソンに sympathy、思いやり、寛容さなどの特徴を与えて、男性と女性のジェンダーの役割を併せ持つ人物の好意的で進歩的な側面を強調して、従来の男性性に挑戦していると筆者は述べている。

第5章は『従妹フィリス』論で、ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』との比較研究である。ステアフォースによるエミリの誘惑の物語をめぐる登場人物やアイデアをディケンズから借用しつつも、ギヤスケルはディケンズがセンセーショナルに描いたものを、家庭的内の悲劇へと変形させている。例えば語り手であるデイヴィッドとポール・マニングは両者ともそれぞれエミリやフィリスを慕っており、ステアフォースやホールズワースを崇拜し、両者を引き合わせる役割を担うなど、類似点が多い。しかしデイヴィッドとは異なり、ポールはフィリスにホールズワースの気持ちを伝えたことに関してホールマン氏から責められる。しかしギヤスケルは、ホールズワースがいずれは戻ってくることを純粋に信じるポールの無邪気さを描いており、ポールに完全に罪があるわけではないことをほのめかしている。

また筆者は、こうした誘惑の物語の背後にあるデイヴィッドとステアフォース、ポールとホールズワースら男性間のホモエロティックな関係性にも着目している。デイヴィッドの話に耳を傾けるステアフォースとは異なり、ポールのホールズワースに対する愛着は報われないことがないという相違点があるためディケンズほどではないが、ギヤスケルもプライド、所有、崇敬を特色とした男性間の愛着をポールのホールズワースに対する態度を通じて描いている。さらに、誘惑者であるステアフォースとホールズワース、さらにはミスター・ペゴティとホールマンの父親像の比較へと考察を進め、当時構築されていた男性性が、『デイヴィッド・コパフィールド』で描かれるより穏やかで、スキャンダラスではない枠組みでも、悲劇や絶望、心理面での苦悶や身体的な損傷を生み出しようということをギヤスケルは示しているというのが本章の結論である。

第6章は『シルヴィアの恋人たち』論である。ギヤスケルは、舞台をマンチエスターから離れた歴史的な港町ホイットビーに移し、歴史小説という領域を用いることで、船乗りや軍人の男性性に目を転じることが可能となった。ギヤスケルは古くからある男らしい英雄主義を家庭を舞台として描くが、新たな男性性モデ

ルへの進化をフィリップを通して提示したというのが筆者の主張である。

その進化を描く際の土台となるのが、シルヴィアの父ダニエルの男らしさである。それは身体的には力強いが、子どもっぽく、衝動的で、思慮に欠けた、攻撃的な男性性である。鋸打ちであるキンレイドはダニエルと同じタイプの男性であり、自身を英雄と位置づけ、またシルヴィアは彼の英雄的な男らしさに惹かれている。しかしギヤスケルはこのタイプの男性性を時代遅れとしている。一方でフィリップは対照的に、教養があり、注意深く、他者の願望の助けとなろうとする進歩的な男らしさを示している。またシルヴィアに対して母親のように接したり、やさしく触れたり、力強い sympathy を示したりと女性的な側面も持っている。しかしながら女性を所有物とみなしたり、想像上でキンレイドに対する暴力への願望も示す彼には攻撃性も潜んでいたりする。ところが、嘘が発覚し、軍隊に入った後のフィリップを通してギヤスケルが描くのは、意志、決意、自制、深い感情に根付いた強さである。キンレイドを子どものように担ぐほどの身体的な強さも身に着け、男性的エネルギーを自己抑制し、セルフヘルプや勤勉さを示す self-made man へと変容したフィリップの姿は、ギヤスケルが描く新しい男性性のモデルである。強い男が苦難を通じて共感することを学ぶというありふれたパターンではなく、弱々しいが共感できる男が強くなるというパターンをギヤスケルは確立した。そしてフィリップは最後にシルヴィアの心をつかむのである。

第7章は『妻たちと娘たち』論である。論の展開は第6章と同じで、5人の男性の人物像をそれぞれ掘り下げ、最終的にロジャーを通して描かれる男性性を帰結としている。その際、ダーウィンの進化論も視野に入れ、ヴィクトリア朝の社会変動における、古い男性性から新しい男性性への進化をギヤスケルが本作品で描いたと筆者は指摘している。

ミスター・ギブソンは、親切な医者、教育をする父親、博識な科学者として、sympathetic な人物であり、権力を振りかざすような男性性を体現してはいない。しかし彼は女性たちを平等に扱わず、モリーを未熟なままにとどめることで保護しようとする。スクワイア・ハムリーは教養のなさや、家系や長子相続への固執から、妻や息子たちとの関係性を築くのに失敗し、地所も失ってしまう。ギヤスケルは、これら旧世代の父親たちが示す古い男性性のそれぞれの欠点を暴き出し、進化の必要性を求めている。一方で、ライバル同士の恋人たちや対照的な息子た

ちを通して、新しい世代の様々な男性性のモデルを描いている。筆者はプレストンに関して、ダーウィンの自然淘汰説や性淘汰説を踏まえて、彼を自己抑制や感情の制御がきかない、モリーやシンシアを怯えさせる捕食動物のような恋人と解釈している。オズボーンは経済的に妻を支えられず他人に頼り、怠惰で、女性的であり、表面上のことにばかり関心を持つ。しかしロジャーは、身体も丈夫であり、内面の幸福により関心に向け、実際的で、経済的にも家族を支え、長子相続による与えられる名声ではなく、自ら創り出す名声に基づく、新しい社会の男性性を体現している。ミスター・ギブソンとは異なりメンターとして積極的にモリーに教え、また彼の科学への知的関心はあらゆる存在への関心を生み出し、ギヤスケルが最も価値を置く、幅広い sympathy を示す人物として、進化を示す男性性のモデルとなるのである。

第8章は“Conclusion”であり、筆者のまとめを簡単に言ってしまうと、ギヤスケル作品から様々な男性性を読み取ることができ、ギヤスケルは新しい男性性の理想を作品を通じて模索していたということである。

本書は sympathy を一つの大きな軸として論を進めているが、sympathy への言及がほとんどなされない章があったり、年代順に作品が並んでいなかったりと、若干全体像を追いづらいたところがあった。また、紙幅の都合上『シャーロット・ブロンテの生涯』や短編小説に触れられなかったのは仕方がないとしても、女性らしさを持つ男性の描写に積極的な解釈を試みているので『クランフォード』が取り上げられていないのは大変残念であった。しかし、ギヤスケルを主体とした研究書で、これまで masculinity をタイトルに冠したものは見当たらない点を踏まえると、この研究書に触発されて新たな論考が生み出される可能性は極めて高く、今後のギヤスケル研究の視野を広げる重要な一冊と言えるであろう。

※今回は書評の執筆に当たり、Kindle 版を用いた。

(大阪工業大学特任講師)

日本ギヤスケル協会会則

第一条 (名称)

本会は日本ギヤスケル協会 (The Gaskell Society of Japan) と称する。

第二条 (事務局)

本会の所在地は事務局とし、事務局は原則として事務局長の所属する研究機関に置く。

第三条 (目的)

本会はエリザベス・ギヤスケルの文学および関連分野の研究に寄与し、あわせて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第四条 (事業)

本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 総会および全国大会の開催
- (2) 研究会、講演会その他の会合の開催
- (3) 機関誌、ニューズレター、その他の刊行物の発行
- (4) 国内外各種研究団体との交流
- (5) その他必要と認められる事業

第五条 (会員)

本会は原則として、本会の趣旨に賛同して入会した個人をもって会員とする。なお本会の目的、事業に賛同する法人を賛助会員とすることができる。会員の入会・退会は役員会がこれを審議し承認する。会員は所定の会費を毎年度末までに納入しなければならない。

第六条 (組織)

本会に次の議決機関および執行機関を置く。

議決機関

- (1) 総会
- (2) 役員会

執行機関

- (1) 各種委員会
- (2) 事務局

第七条 (役員、名誉会長、名誉会員)

1. 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 1名
- (3) 幹事 若干名
- (4) 各種委員会委員長各1名
- (5) 事務局長 1名
- (6) 会計監査 2名

2. このほか役員会の推薦により、名誉会長、名誉会員を置くことができる。

第八条 (任務)

役員は任務を次のように定める。

- (1) 会長は本会を代表し、会務を統括する。
- (2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
- (3) 幹事は会務の運営にあたる。
- (4) 事務局長は事務局を統括する。
- (5) 会計監査は会計を監査する。

第九条 (選任・任期)

役員を選出方法および任期を次のように定める。

- (1) 役員のうち、会長・副会長および幹事は、役員会の推薦にもつぎ総会において選出し、事務局長・各種委員会委員長および会計監査は、役員会において選出する。
- (2) 役員の任期は2年とし、連続2期4年を超えて重任しない。ただし会長・副会長・事務局長の任期は就任時から始まるものとする。会長の任期は2期4年を限度とする。

第十条 (総会)

- (1) 総会は本会の最高の議決機関であり、毎年1回会長が招集する。ただし会長が必要と認めるとき、または会員の3分の1以上の要求があったとき、会長は臨時総会を招集する。
- (2) 総会の議決は出席会員の過半数とする。

第十一条 (役員会)

- (1) 役員会は本会会則および総会の議に沿って、本会の目的達成に必要な事項の企画および審議決定にあたる。
- (2) 役員会は第七条第1項(1)から(5)に記した役員によって構成され、会長が招集する。
- (3) 役員会は各種委員会を組織することができる。

第十二条 (経理)

- (1) 本会の経理は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってあてる。
- (2) 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終了する。
- (3) 本会の会計報告ならびに監査報告は、毎年1回、総会において行う。

第十三条 (メーリング・リスト)

本会の情報交換のために、メーリング・リストを開設する。原則として全会員が登録され、自由に投稿できる。ただし、問題が生じた場合には会長の権限で停止することもあ

第十四条 (会則の改廃)

本会則の変更は総会の議決を経なければならない。

付則

この規約は昭和63年10月16日から実施する。この改定規約は平成4年10月18日から施行する。この改定規約は平成16年10月3日から施行する。この改定会則は平成17年10月2日から施行する。この改定規約は平成18年10月1日から施行する。この改定会則は平成19年6月2日から施行する。この改定会則は平成28年10月1日から施行する。

本会は事務局を、〒422-8545 静岡県駿河区池田1769 静岡英和学院大学短期大学部芦澤久江研究室に置く。

編集後記

『ギヤスケル論集』第31号をお届けします。今号は、2021年1月26日に逝去された多比羅眞理子先生追悼号です。多くの先生方に追悼文を書いて頂きました。また、遠藤花子先生から多比羅先生の年表・業績表・写真を提供して頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。編集委員一同、多比羅先生のご冥福をお祈りいたします。◆投稿論文は、第32回大会のシンポジウムに基づくもの2本と合わせて計4本で、すべて審査を経て本号に掲載されました。掲載順は、慣例に従い執筆者のアルファベット順です。次号以降も多くの投稿があることを願います。◆書評は近年の新刊書に関するもので、今回3本を載せることができました。『論集』では、ギヤスケルに関連する新刊書をできるだけ書評に取り上げます。希望の書籍がございましたら、編集委員会までご一報ください。(西垣)

ギヤスケル論集第31号

2021年10月19日 印刷

2021年11月1日 発行

発行者 大野 龍浩

編集者 『ギヤスケル協会』編集委員会

発行所 日本ギヤスケル協会

〒422-8545

静岡県静岡市駿河区池田1769

静岡英和学院大学短期大学部

芦澤久江研究室内

ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp

印刷所 株式会社篠原印刷所

〒422-8033

静岡市駿河区登呂6丁目7番5号

TEL:054-286-5141 FAX:054-285-6261

『ギヤスケル論集』投稿規程

【資格】投稿者は日本ギヤスケル協会会員であることを原則とする。

【内容】原稿はエリザベス・ギヤスケル、およびその周辺に関する研究とし、未発表のものに限る。ただし、すでに口頭発表し、その旨を別紙に明記している場合には審査の対象とする。

【執筆要項】

- 1) 書式は *MLA Handbook for Writers of Research Papers* の最新版に準ずる。
- 2) 原稿は原則として Microsoft Word で作成する。執筆用テンプレートが協会のホームページにあるので利用されたい。
- 3) 日本語原稿の場合は 14,000 字以内とし、別に英訳題名をつけ、200 ～ 300 語程度の英文による要約をつける。
- 4) 英語原稿の場合は 6,000 語以内とする。要約は不要。
- 5) 日本語原稿、英語原稿とも、題名、注、文献目録その他一切を規定文字数のうちに収める。
- 6) 注は本文中に算用数字で表記し、本文の最後に通し番号でまとめる。注番号にはカッコは使用しない。Word の参考資料メニューの脚注および文末注の挿入機能を使用しない。

【締切】4 月末日。

【提出】1) 原稿の印刷コピー 1 部を事務局に提出する。同時に、ファイルを電子メールに添付して事務局に送付する。氏名は原稿には記載しないこと。
2) 英文要約（和文論文の場合）3) A4 の用紙に、氏名（日本語、ローマ字表記）、タイトル（日本語・英語）、所属・職名（日本語・英語）、連絡先を記したもの。原稿は返却しない。

【審査】原稿掲載の可否は編集委員会が決定する。審査の公平と査読者の自由な知見を守るために、査読者の氏名は公表しない。

【校正】執筆者の校正は初校までとし、訂正加筆は印字上の誤りのみとする。

細則

1. 論文執筆者には『論集』5 部、論文以外の（エッセイや書評など）執筆者には会員 1 部、非会員 2 部および各論文、記事等の PDF を進呈する。なお、執筆者が希望すれば、実費（含送料）にて抜刷購入可とする。
2. 執筆者に掲載料の負担が発生する場合がある。
3. 掲載された論文は一定期間を経た後に電子化され、インターネット上に公開される。公開を望まない場合は、事務局に申し出ることにより、非公開とすることができる。
4. 英文の論文および要約の原稿は英語母語話者のチェックを受けること。

※尚、この投稿規程は 2020 年 10 月 10 日改定、2021 年 4 月 1 日より施行。

Gaskell Studies

Vol. 31

— CONTENTS —

In Memoriam: Professor Mariko Tahira

A Flowery Smile and Stubbornness: How I Miss Professor Mariko Tahira	Akiko SUZUE	1
In Memory of Ms. Mariko Tahira	Akiko KIMURA	3
See You in the Next World, Professor Tahira!	Tatsuhiro OHNO	5
The Mutually Affectionate Gaze	Masuko ADACHI	7
In Memory of Mrs. Tahira	Hanako ENDO	9

Articles

Mobile Heroine, Gender, Class and Regional Boundaries in <i>North and South</i>	Marie ISHII	11
The Stories of Repentance and Intercessory Prayers in <i>Adam Bede</i> and <i>Ruth</i>	Haruho MURAYAMA	27
The Plan of Salvation in <i>Scenes of Clerical Life</i> and <i>Cranford</i>	Tatsuhiro OHNO	41
The Change from In-court to Out-of-court Battles: The Cases of Mary in <i>Mary Barton</i> and Ellinor in <i>A Dark Night's Work</i>	Nana YANO	57

Reviews

M. Joan Chard, <i>Victorian Pilgrimage: Sacred-Secular Dualism in the Novels of Charlotte Brontë, Elizabeth Gaskell, and George Eliot</i>	Haruho MURAYAMA	71
Melissa Schaub, <i>Performativity in Elizabeth Gaskell's Shorter Fiction: A Case Study in the Uses of Theory</i>	Akiyuki OMAE	81
Meghan Lowe, <i>Masculinity in the Work of Elizabeth Gaskell</i>	Hiroki TAKIKAWA	87